

花
屋
敷
遺
跡
I

東大阪市

花屋敷遺跡 I

河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇七年三月

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター



1. 06-1-1 調査区第5面全景（東から）



2. 06-1-1 調査区第4面全景（西から）



1. 出土した陶磁器類



2. 19埋桶 出土漆器

東大阪市

花屋敷遺跡 I

河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

花屋敷遺跡は東大阪市吉田1丁目に所在し、ラグビーで全国的に著名な「花園」の、近鉄奈良線の河内花園駅の北側に隣接しています。現在、近畿日本鉄道株式会社により、奈良線連続立体交差化工事が進められており、財團法人大阪府文化財センターは、それに伴い平成11年より周辺の調査を行なってきました。

今回の調査は、河内花園駅前地区第一種市街地再開発計画に伴う発掘調査です。調査では、中世の遺構面が複数確認されました。主な遺構としましては、井戸、溝、貯水施設と導水施設、土坑、柱穴などが検出されました。遺物も、土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質甕、備前焼甕、常滑焼甕、東播系須恵器鉢、中国製青磁碗などが多く出土しています。また、木製品も多く、曲物、漆塗椀、箸、下駄、草履、紡織具、毬と豊富です。

特に溝から出土した2点の墨書された木簡は、注目すべきものです。1点は「西方源三上」であり、もう1点は「□田八郎」と人名が記され、続けて「小麦十九把」、また「ウ（芋）カラ六把」と書かれていました。溝は南北方向と東西方向に走行しており、建物を囲んでいたものと思われます。集落の年代は出土した遺物より13世紀後半から15世紀と考えられています。

周辺の同時代の遺構としましては、南西約1.6kmに若江城跡があります。城の周辺地域において、数棟の建物が溝に囲まれた屋敷が集まって集落が構成される、その様な村が散在している風景が浮かんできます。

大和川は、江戸時代の宝永元（1704）年に堺方面に付け替えられる以前は、西側が長瀬川、東側が玉串川に分かれて北流していました。玉串川は、更に菱江川と吉田川に分岐して流れていきました。花屋敷遺跡の中世集落は、ちょうどこの分岐する所に当たります。花園駅の南側には「市場」という旧字名が残されており、舟運の盛んな時代には、交易の中継点として大いに賑わったと思われます。大和川が付け替えられた後、菱江川は菱屋東新田、吉田川は川中新田、玉串川は玉井新田として開発されました。

今回発掘調査が行われるまで、この地域では埋蔵文化財に関してほとんど空白地帯というような状況でしたが、この地域の歴史を紐とく手がかりとなる、一定の調査成果を挙げることができました。今回の調査で得られた成果をより多くの方々にご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査に当たっては河内花園駅前地区市街地再開発組合、大阪府教育委員会などの関係各位に多大なご協力、ご指導を頂きました。記して感謝の意を表します。今後とも当センターの事業に、より一層ご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成19年3月

財團法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府東大阪市吉田1丁目地内に所在する花屋敷遺跡06-1の発掘調査報告書である。
2. 調査は河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴い河内花園駅前地区市街地再開発組合から平成18年5月1日～平成19年3月30日の間、委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成18年5月12日～平成18年7月31日まで行った。平成18年8月1日～平成19年3月30日まで遺物整理作業を行い、平成19年3月30日、本書刊行を以って終了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

調査部長 赤木克視　調整課長 田中和弘
中部調査事務所長 小野久隆　調査第二係長 森屋美佐子
主任技師 岡本圭司 専門調査員 影山美智与
4. 遺物の撮影は中部調査事務所主査片山彰一が、木製品・金属製品ほかの保存処理と樹種の同定については同主査山口誠治、専門調査員岩立美香が、獸骨の同定は班長宮崎泰史が行った。土師器皿の一部については網伸也、南孝雄が、木製品の器種については、黒須亜希子が判別した。
木簡の釈文については、関西大学助教授原田正俊先生および当センター理事長水野正好にご教示いただいた。
5. 調査の実施に当たっては地元河内花園駅前地区市街地再開発組合、東大阪市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとし、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

【調査協力】（順不同、敬称略）
福永信雄、菅原章太（以上、東大阪市教育委員会）　松尾信裕（（財）大阪市文化財協会）
橋本久和（高槻市教育委員会）　森村健一（堺市教育委員会）　原田正俊（関西大学）
小谷利明（八尾市立歴史民俗資料館）
6. 調査の実施に当たって、自然科学分野の分析として、「花粉・珪藻・植物珪酸体分析」をパリノ・サーウェイ株式会社へ委託した。その報告は第4章に田中義文・馬場健司・伊藤良永「花屋敷遺跡06-1発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析」として掲載している。
7. 本報告書の編集と執筆は岡本（上記の第4章を除く）があたった。
8. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1. 実測図の基準高は東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標の単位はすべてmである。座標は世界測地系である。
3. 全体図および遺構実測図の方位は座標北である。なお、真北を基準とした場合、調査区周辺の座標北は $0^{\circ} 13'$ 西に、磁北は $7^{\circ} 01'$ 西に偏位する。
4. 発掘調査や遺物整理は当センターの「遺跡調査基本マニュアル」（2003年版）に準拠して行った。
5. 調査名は上記のマニュアルにのっとり「花屋敷遺跡06-1」と命名した。また各調査区はさらに枝番号をつけて標記した。（例）第1調査区の場合：花屋敷遺跡06-1-1
これらの名称は遺物の取り上げ、注記などに用いている。
6. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
7. 遺構番号は基本的に調査時に付けたものを使用した。調査区、遺構面、遺構の性格に関係なく、通しのアラビア数字の後に遺構の種類を示す名称が続く。（例）14構、16戸戸、117ピット
8. 遺構図の縮尺は遺構面全体図が $1/200$ 、 $1/300$ 、遺構の平・断面図には $1/10$ ・ $1/20$ ・ $1/40$ を使用している。そのほかも各図にスケールを用いて表記してある。
9. 遺物実測図の縮尺は $1/4$ を基調とするが、一部、金属製品、石製品および小形の土器が $1/2$ 、大形の木製品が $1/8$ となっている。縮尺は各挿図にスケールにて示した。写真図版については遺物のスケールを統一していない。
10. 遺構図の断面の位置は、「」によってその位置を明記した。
11. 掲載した遺物の番号は掲載順に通しの番号を与えている。
12. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
13. 本文中、第1図は国土地理院発行平成10年度版大阪東北部・平成7年度版大阪東南部 $1/50,000$ を、第2図および第61図は東大阪市都市開発課発行平成13年度版H-6-3-23 $1/25,000$ を、第4図は原1987「河内低地の地形分類」を、第5図は国土地理院平成14年度発行大阪府東北部・平成14年度発行大阪府東南部・平成18年度発行生駒山・平成13年度発行信貴山の各 $1/25,000$ を、第6図は大阪府文化財分布図2001年度版を、それぞれ一部改変して使用した。
14. 土器の記述は主に下記の文献を参考にした。
中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
菅原正明1988「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
石井啓、福本浩子編2005備前歴史フォーラム資料集『備前焼研究最前線』Ⅱ～備前焼、その歴史、今まで何がわかつて、何がわからないのか～備前市歴史民族資料館・備前市教育委員会
上田秀雄1982「14～16世紀の青磁器碗の分類について」『貿易陶磁器研究』No.2 日本貿易陶磁器研究会
勝田邦夫・阿部剛治1983「若江遺跡発掘調査報告書」I 遺構編 東大阪市遺跡保護調査会
福永信雄1993「若江遺跡第38次発掘調査報告書」財團法人東大阪市文化財協会
千喜良淳2002「中・南河内における土師器皿の変遷」『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会

目 次

カラー図版1

1. 06-1-1 調査区第5面全景（東から） 2. 06-1-1 調査区第4面全景（西から）

カラー図版2

1. 出土した陶磁器類 2. 19埋植 出出土漆器

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第0層 第1層 第2層 第3層 第4層 第5層	
第2節 遺構と遺物	11
1. 現地表面	11
2. 第1調査区 盛土と第1面	11
3. 第1調査区 第1層と第2面	14
4. 第1調査区 第2層と第3面	14
14窪地 15溝 17溝 18溝 16井戸	
5. 第1調査区 第3層と第4面	19
19埋植 60溝 20土坑と周辺のピット 25ピット 30土坑 35ピット	
37ピット 40ピット 53溝 61ピット	
6. 第1調査区 第4-2面	26
87土坑	
7. 第1調査区 第4層と第5面	29
80溝 80溝〔横〕 14溝 83土坑 第5面検出のピットと土坑 123ピット	
8. 第1調査区 第5-1層と第5-2面	44
150ピット 155土坑	
9. 第2調査区 遺構面	44
172土坑	

第4章 花屋敷遺跡06-1発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析	45
はじめ	45
第1節 試料	46
第2節 分析方法	46
1. 硅藻分析	46
2. 花粉分析	47
3. 植物珪酸体分析	47
第3節 結果	48
1. 硅藻分析	48
2. 花粉分析	51
3. 植物珪酸体分析	53
第4節 考察	53
1. 硅藻化石群集からみた古水文環境	53
2. 調査区およびその周辺の古植生	54
第5章まとめ	59
第1節 遺構の変遷	59
第2節 出土した木簡と花屋敷	61

挿図目次

第1図 花屋敷遺跡位置図	1
第2図 調査区位置図	2
第3図 調査区地区割図	2
第4図 河内低地地形分類図	5
第5図 花屋敷遺跡周辺の土地条件図	5
第6図 花屋敷遺跡周辺の遺跡分布図	7
第7図 基本層序	10
第8図 06-1-1調査区第1面全体図	11
第9図 廃土出土遺物	11
第10図 06-1-1調査区第2面全体図	12
第11図 06-1-1調査区第2層出土遺物	12
第12図 06-1-1調査区第3面全体図	13
第13図 06-1-1調査区第3面検出遺構断面図	15
第14図 14窪地出土遺物	16
第15図 15溝出土遺物	16
第16図 17溝出土遺物	16
第17図 16井戸出土陶磁器	16

第18図	16井戸出土金属製品	17
第19図	06-1-1 調査区第3層出土遺物	17
第20図	06-1-1 調査区第4面全体図	18
第21図	19埋桶〔貯水施設〕・60溝〔導水施設〕平・断面図	19
第22図	19埋桶〔貯水施設〕平・断面図(左) 平・立面図(右)	20
第23図	19埋桶底遺物出土状況	21
第24図	19埋桶側板	22
第25図	19埋桶〔貯水施設〕(上)・60溝〔導水施設〕(下) 出土遺物	23
第26図	20土坑と周辺のピット平・断面図	25
第27図	20土坑出土土師器皿	25
第28図	06-1-1 調査区第4面検出遺構	26
第29図	37ピット平・断面図	26
第30図	14溝(下層)出土遺物	27
第31図	06-1-1 調査区第4面検出遺構出土遺物	27
第32図	06-1-1 調査区第4-2面全体図	28
第33図	06-1-1 調査区第4層出土遺物	28
第34図	87土坑、108ピット平・立面図	29
第35図	87土坑出土板材	29
第36図	06-1-1 調査区第5面全体図	30
第37図	80溝断面図	31
第38図	80溝〔欄〕板平・立面図	31
第39図	80溝出土遺物①	32
第40図	80溝出土遺物②(上層～下層)	33
第41図	80溝出土遺物③(最下層)	34
第42図	80溝出土木製品①	35
第43図	80溝出土木製品②	36
第44図	80溝出土木製品③(上層～下層)	37
第45図	80溝出土木製品④(最下層)	38
第46図	80溝出土木製品⑤(最下層)	39
第47図	80溝出土木製品⑥(最下層)	40
第48図	06-1-1 調査区第5面検出柱穴の残る柱穴	41
第49図	06-1-1 調査区第5面検出遺構出土遺物	41
第50図	06-1-1 調査区第5層検出遺物	41
第51図	06-1-1 調査区第5-2面全体図	42
第52図	06-1-1 調査区第5-2面検出遺構出土遺物	42
第53図	06-1-2 調査区全体図	43
第54図	花屋敷遺跡の位置	45
第55図	花屋敷遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡	45

第56図 河内平野とその周辺の地形	46
第57図 80溝分析試料採取位置	47
第58図 主要珪藻化石群集の層位分布	51
第59図 花粉化石群集の層位分布	53
第60図 植物珪酸体含量の層位分布	53
第61図 調査区周辺の字名と主要遺構模式図	60

写真目次

写真 1 60溝竹製導水管総目部分	21
写真 2 珪藻化石	56
写真 3 花粉化石	57
写真 4 植物珪酸体	58

表 目 次

表 1 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群	48
表 2 珪藻分析結果（1）	49
珪藻分析結果（2）	50
表 3 花粉分析結果	52
表 4 植物珪酸体含量	53

写真図版目次

図版 1 06-1-1 調査区 第1面（上） 第2面（下）	
1. 第1面全景（西から）	2. 第2面全景（東から）
図版 2 06-1-1 調査区 第3面	
1. 第3面全景（東から）	2. 第3面全景（西から）
図版 3 06-1-1 調査区 第4面	
1. 第4面全景（東から）	2. 第4面全景（西から）
図版 4 06-1-1 調査区 第4面	
1. 20土坑遺物出土状況（北から）	2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（南西から）

図版5 06-1-1 調査区 第4面

1. 60溝竹製導水管と土師器皿54出土状況（北から） 2. 60溝竹製導水管検出状況（東から）
3. 19埋桶検出状況 4. 19埋桶漆器椀出土状況
5. 19埋桶取水口部 6. 19埋桶籠出土状況

図版6 06-1-1 調査区 第4面

1. 19埋桶半截状況と60溝より延びる竹製導水管（北から） 2. 19埋桶側板とタガ（北から）
3. 19埋桶底板除去後（北から）

図版7 06-1-1 調査区 第4面

1. 19埋桶出土籠（クリーニング後） 2. 19埋桶出土籠網目（部分写真）
3. 19埋桶上部の籠除去後、遺物出土状況 4. 19埋桶底板
5. 第4-2面全景（南西から） 6. 87土坑、108ピット（北から）

図版8 06-1-1 調査区 第5面

1. 第5面全景（西から） 2. 第5面全景（東から）

図版9 06-1-1 調査区 第5面

1. 80溝〔横〕（左：南から 右上：部分 右下：東から） 2. 80溝断面（東から）
3. 第5-2面全景（南東から）

図版10 06-1-1 調査区 第5面（上・中）、06-1-2 調査区（下）

1. 118柱穴（北から） 2. 125柱穴（北から） 3. 133柱穴（北から）
4. 134柱穴（南から） 5. 135柱穴（南から） 6. 148柱穴（南から）
7. 06-1-2 調査区全景（西から） 8. 172土坑（西から）

図版11 06-1-1 調査区 出土遺物1

1. 第2層出土遺物 2. 14窪地（第3面）出土遺物
3. 15溝（第3面）出土遺物 4. 16井戸（第3面）出土遺物
5. 第3層出土遺物

図版12 06-1-1 調査区 出土遺物2

1. 20土坑（第4面）出土土師器皿
2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（第4面）出土遺物

図版13 06-1-1 調査区 出土遺物3

1. 第4層出土遺物 2. 80溝（第5面）出土遺物1

図版14 06-1-1 調査区 出土遺物4

- 80溝（第5面）出土遺物2

図版15 06-1-1 調査区 出土遺物5

1. 80溝〔中層〕（第5面）出土遺物 2. 80溝〔最下層〕（第5面）出土遺物
3. 第5'層出土遺物

図版16 06-1-1 調査区 出土遺物6

1. 80溝（第5面）出土土師器皿 2. 80溝〔最下層〕（第5面）出土土師器皿

図版17 06-1-1 調査区 出土遺物7

- 80溝（第5面）出土漆器

図版18 06-1-1 調査区 出土遺物 8

1. 80溝〔最下層〕(第5面) 出土木筒 2. 80溝〔下層〕(第5面) 出土木筒

図版19 06-1-1 調査区 出土遺物 9

50溝(第4面)・60溝(第4面)・80溝(第5面)・150ピット(第5-2面) 出土木製品

図版20 06-1-1 調査区 出土遺物 10

1. 19埋桶〔貯水施設〕(第4面) 鋼板 2. 87土坑(第4-2面) 碇板

3. 80溝〔最下層〕(第5面) 出土木製品

図版21 06-1-1 調査区 出土遺物 11

1. 80溝〔最下層〕(第5面) 出土木製品 2. 80溝〔横〕板列(第5面) 構成木製品

図版22 06-1-1 調査区 出土遺物 12

1. 柱根・杭 2. 出土鉛滓

遺物 觀察表

①土器・陶磁器・土製品類	63
②瓦	66
③木製品	66
④漆器類	68
⑤金属器・石器・鉛滓類	68
⑥柱材	68

遺物出土遺構一覧

遺物出土遺構一覧(1)～(4)	69～72
-----------------------	-------

報告書抄録

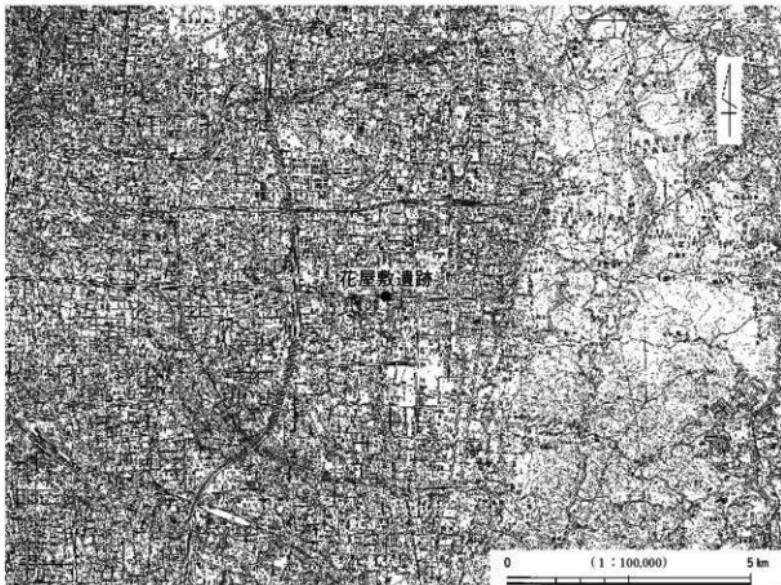
第1章 調査の経緯と方法

第1節 調査の経緯

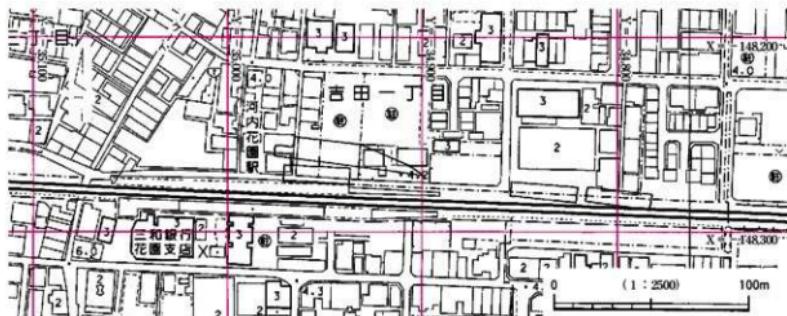
近鉄河内花園駅周辺は、古くから商店や住宅地が建ち並ぶ賑やかな街であったが、道路も狭く、交通や公共施設が未整備であることなど、防災面や生活環境面での都市基盤整備が急がれる状況となった。そこで、これらの諸問題の抜本的解決を図るために、都市計画道路大阪瓢箪山線及び花園駅前東西線の整備による交通体系を改善するとともに、安全・快適な都市型住宅の供給と駅前にふさわしい商業・業務施設の立地を図る、都市計画、河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業が計画された。

事業は河内花園駅前地区再開発組合のもと平成16年4月に施行されることになった。すでに東大阪市では、再開発事業として、近鉄奈良線の連続立体交差化事業とあわせて平成8年には近鉄布施駅北口、平成15年に若江岩田駅前地区を整備しており、本事業はこれらに続く事業である。^{〔注1〕}

財團法人大阪府文化財センターでは、平成17年度に上記の近鉄奈良線の連続立体交差化事業に伴い、当再開発地区周辺を花園遺跡隣接地として遺跡の有無、広がりを確かめる確認調査を実施した。この調査成果において、中世段階の造構、遺物が確認された。また、東大阪市教育委員会は同年度に当再開発地区内および都市計画道路大阪瓢箪山線地区内において試掘調査を実施し、同様に、中世の遺物の出土と包含層を確認した。



第1図 花屋敷遺跡位置図



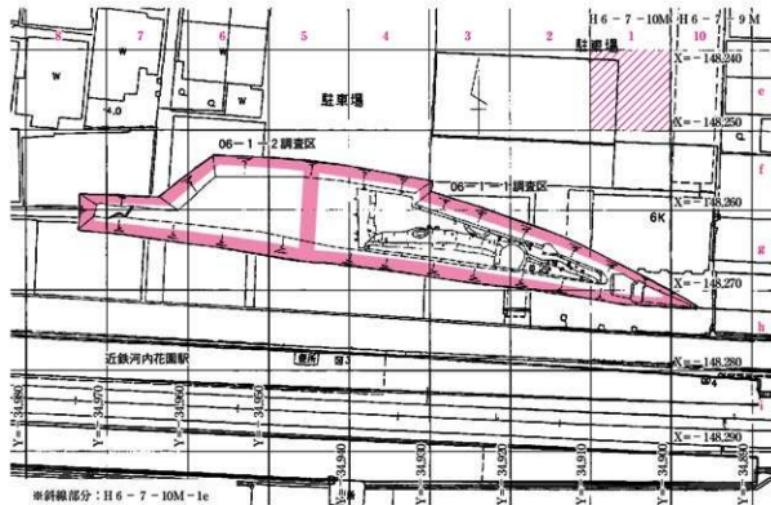
第2図 調査区位置図

そこで、河内花園駅前地区市街地再開発組合は大阪府教育委員会と協議を重ね、財团法人大阪府文化財センターに発掘調査を依頼する運びとなった。

なお、当地は今まで埋蔵文化財の包蔵地として周知されてこなかった。そこで、新たに遺跡名がつけられることになり、東大阪市教育委員会において、当地の字名により、花屋敷遺跡と命名された。

当センターは河内花園駅前地区市街地再開発組合と「河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う花屋敷遺跡発掘調査」(「花屋敷遺跡06-2」)の委託契約を締結し、平成18年5月12日、花屋敷遺跡の調査に着手し、平成18年7月31日に終了した。

遺物整理及び報告書作成は発掘調査終了後引き続き行い、平成19年3月30日に終了した。



第3図 調査区地区割図

また、当センターでは本調査と同時に、近畿日本鉄道株式会社と「近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査」の委託契約を締結し、本書が報告する調査区近接地の発掘調査を行い、同様に整理の後、報告書『花屋敷遺跡』Ⅱを刊行した。

第2節 調査の方法

調査地は近鉄奈良線河内花園駅の北側に隣接する。都市計画道路大阪瓢箪山線予定地内である。調査前の地目は住宅地、商店、工場、モーターブール、道路などであった。調査の直前にはこれらの構造物は取り壊され、工事用車両を通すために、一部には厚さ30cm程度で碎石も敷かれていた。

地表面の面積で約664m²、東西に長く約67m、南北方向の幅は最大で約12mを測る。東端が尖り、西側に約5m×10mの張り出し部を持つ。調査は工程の都合にて調査区を東西に約2：1の割合で2つの地区に分けて行った。調査マニュアルにしたがい、東側を06-1-1調査区、西側を06-1-2調査区と命名した。調査区の配置は第2図の通りである。なお、当報告では調査区ごとに分けて本文の記述を行った。

調査は、06-1-1調査区より、機械掘削にて地表面を掘削することから開始した。機械掘削では、事前のデータを基に、現地表から1.0m前後の盛土を、機械によって掘削した。機械掘削終了後は、包含層、遺構面に応じて、人力掘削を行った。

調査区全体の土の堆積状況を把握するための断面は、調査区の幅が狭いこともあり、南北の法面を利用し、東西方向の堆積を確認した。それ以外は必要に応じて断面観察用のアゼを設定することとした。

06-1-1調査区の調査を終了し、埋め戻した後、06-1-2調査区の機械掘削に入ったが、当地区のはほとんどが、近現代の搅乱にて削平を受け、西端の張り出し部のみにかろうじて自然な堆積が認められるだけであった。調査区の堆積状況を把握する断面観察は張り出し部の南側の法面を利用した。

測量については、調査区周辺に3級基準点を3点と4級基準点を2点設けた。これらの基準点をもとに、標定点測量を行い、合計3回のクレーン撮影と6回の高所作業車による撮影を行った。測量の基準は世界測地系によった。また、航空測量以外にも必要に応じてこれらの基準点をもとに平板などの測量作業を行った。

遺物の取り上げの際などの地区名称は、国土座標系を基に作成した当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に明記された地区割りの名称（第3図）を使用している。

遺構番号は現地調査の際に付与した番号をそのまま使用している。遺構番号の付け方は凡例に示した通りである。

注1) 「東大阪市都市開発室ホームページ」、「河内花園駅前地区市街地再開発組合のホームページ」を参照した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

花屋敷遺跡は大阪府東部、東大阪市のほぼ中央部に位置する吉田に所在する。

当遺跡は平成11年度から開始された当センターによる近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う確認調査によって平成17年に新たに周知された。

埋蔵文化財包蔵地の密度が比較的高い東大阪市域ではあるが、市の東部、生駒山地西麓に展開する遺跡群と、瓜生堂遺跡はじめ市の中心部や西寄りに位置する、通称瓜生堂遺跡群の間に挟まれた当地域は、遺跡の空白地帯となっていた。それが今回、少し大仰に言うならば、ようやく地域史に寄与する考古学的な資料を得ることができたといえよう。

当遺跡の所在する河内平野は、繩文海進によって最大となった河内湾が、旧大和川や旧淀川の水系による土砂の運搬、堆積によりしだいに陸化が進み、河内潟、河内湖を経て平野が形成されたことは良く知られている。最近の研究では、当遺跡周辺は河内平野の中でも、特に沖積平野面三角州帯Ibと地形分類され、主に弥生時代後期末から古墳時代初頭に堆積した地域と考えられている。

遺跡は近畿日本鉄道奈良線河内花園駅の北側に隣接し、商店や住宅の立ち並ぶ河内花園駅前の市街地として活況を呈している。現地表面は標高でT.P A0m前後を測り、平坦な地形である。

遺跡の西端部は旧大和川の流路の一つである玉串川が吉田川と菱江川とに分岐する箇所に当たる。今は両河川とも小さな用水路や暗渠に姿を変え、宝永元（1704）年の大和川の付け替え以前に河内平野に洪水を幾度となくもたらした大河としての面影はないが、これらの部位は旧河道の跡及び自然堤防として、現在、周辺部より1m～2m程高くなっている。

第2節 歴史的環境

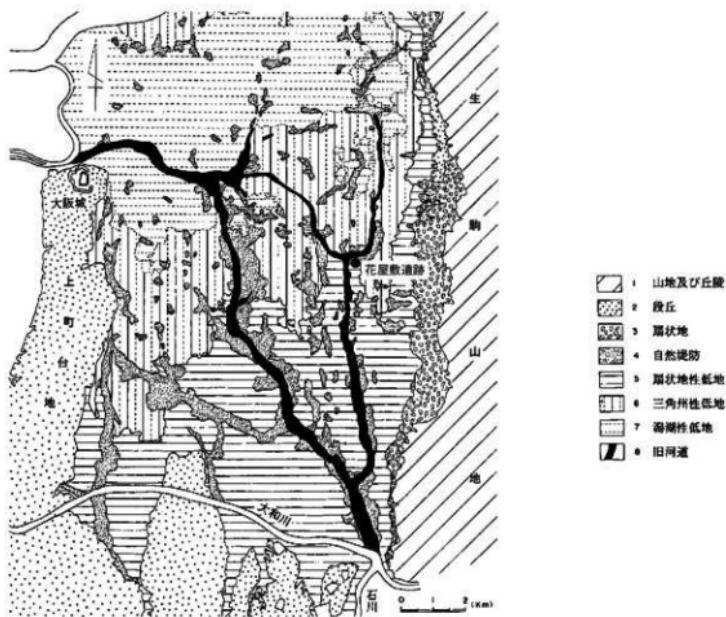
周辺の遺跡に目を向けると、弥生時代から古墳時代前期にかけての著名な遺跡を多くみとめることができる。花屋敷遺跡の西約2.0kmには、マウンドを残す弥生時代中期の良好な方形周溝墓が検出されたことで有名な瓜生堂遺跡、その東側には隣接するように位置する、弥生時代前期の集落・水田遺構が検出された若江・若江北遺跡が存在する。

また、当遺跡の東南約1.7kmには、弥生時代前期から近現代まで、幾重にも水田遺構がおり重なることで有名な池島・福万寺遺跡がある。

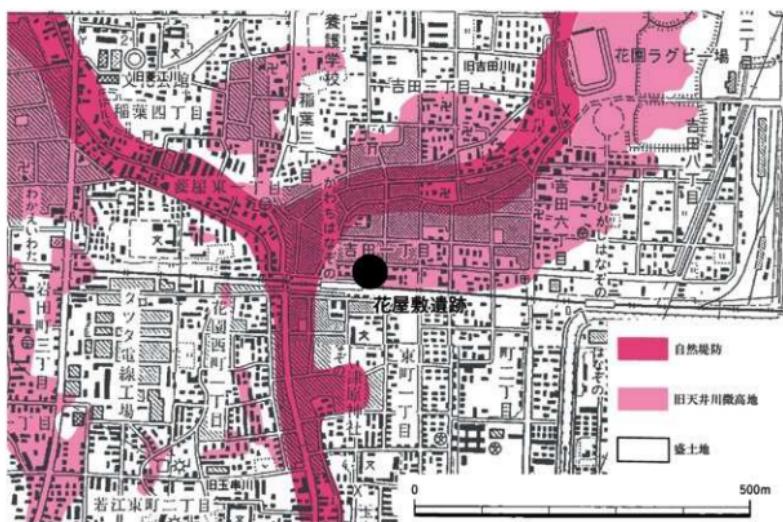
真北約0.6kmには弥生時代前期の稻葉遺跡もあり、弥生時代に存在した河内潟やそこに注ぐ河川周辺を生活の場とした当時の人々の足跡をたどることができる。

繩文時代前期の海進によってできた河内湾は、そこへ流れ込む河川による土砂の堆積で次第に埋まり、安定した平野へと変遷を遂げることとなる。繩文時代は日下遺跡、神並遺跡など、生駒山地西麓域が人々の生活の拠点であったが、この平野部へ生活域や生産域を展開させるようになり、弥生時代中期の遺跡が増加することになる。

弥生時代の後期には洪水の影響などによりこれらの遺跡は縮小し、古墳時代を迎える。古墳時代の集落は洪水を避けるべく、河川の自然堤防上に展開する様相を見せる。



第4図 河内低地地形分類図



第5図 花屋敷遺跡周辺の土地条件図

意岐部遺跡からは古墳時代後期の遺物が出土している。西岩田遺跡では、古墳時代初めから後期の集落を検出している。また、池島・福万寺遺跡においても5世紀から6世紀の集落が調査されている。古墳時代の河内平野部は河川による堆積活動の影響を受け、たえず洪水の危険にさらされ河道の位置も変化するため、居住地・耕作地いずれにおいても、基盤とするには不安定な土地であったようである。そのためか、当地周辺の平野部には大型の古墳は築かれず、目立った群集墳も営まれていない。生駒山西麓において、山畠古墳群・客坊・花草山古墳群のような後期群集墳が6世紀から7世紀にかけて形成されるのは対照的である。ただし、最近の調査では、平野部においても、巨摩庵寺遺跡にて古墳が検出され、人物埴輪・水鳥形埴輪などが出土している。そのほか、岩田遺跡では円筒埴輪が出土し、石田神社境内付近に古墳があったという伝承もあり、埋没古墳の存在を示唆する。今後の調査の進展によって、当地周辺平野部の古墳造営の状況が明らかになる可能性がある。

古代には瓜生堂遺跡の中央部で8世紀を主とした集落跡が、西部や北東部で9世紀以降の集落が確認されている。また、岩田遺跡では8世紀中頃から10世紀にかけての集落が検出されている。当地からは、施釉陶器・製塙土器・円面鏡・貨錢・帶金具（巡方）・墨書土器・製塙土器などのほか、唐草文軒平瓦が出土するが、この瓦が遺跡の南東約1kmに位置する若江遺跡の出土瓦に類似することを根拠に、この集落は若江寺あるいは若江遺跡と関係のある官人の居住した集落と考えられている。

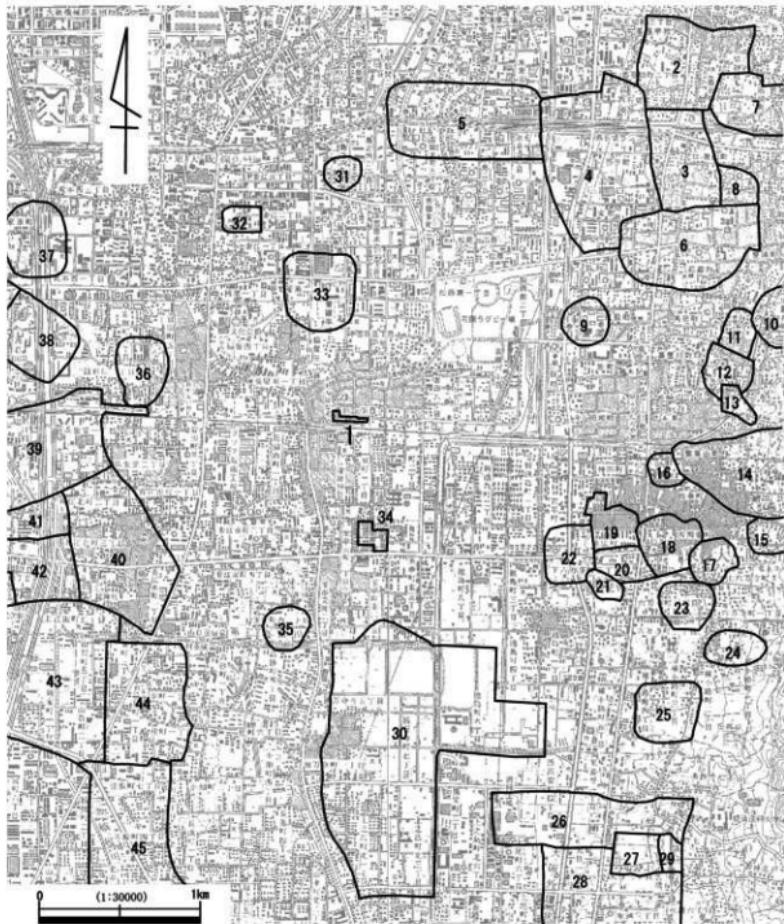
若江寺は出土する素弁蓮華文軒丸瓦から、飛鳥時代後期頃の創建と考えられている。周辺では、最も古い寺院である。遺構は確認されていないが、川原寺式に類似する瓦の存在、後の奈良時代の瓦に「足得」「中臣」のスタンプが押された恭仁京式文字瓦・平城京・恭仁京との同范の軒平瓦の存在により、中央政権との強力な関係を示唆する向きもある。平安時代には宇治平等院の末寺となっている。

このように、古代の若江周辺は当地の政治的な中核を担ったと注目されており、以降中世の若江城に引き継がれて行く。ほかに、主な古代寺院には生駒山西麓にて、河内の郡寺と考えられる河内寺・物部氏の氏寺とも考えられる法通寺がある。

古代後半から中世に目を向けると、花屋敷遺跡の西約1.2kmに位置する、瓜生堂遺跡の東端では、13世紀を最盛期とする12世紀から15世紀にかけての集落跡が見つかっている。その瓜生堂遺跡の北に接する岩田遺跡においても12世紀前半から15世紀中頃まで存続したと考えられる集落跡を検出している。当集落は13世紀の中・後半頃から溝で区画されだすという。ただし、瓜生堂遺跡と岩田遺跡の中世集落は隣接するが、区画溝の変遷など、細部において齟齬をきたすきらいがあり、今後の検討を要する。

そのほか、周辺では、12世紀後半から15世紀にかけての集落が、巨摩庵寺遺跡にて見つかっている。
水走遺跡は、花屋敷遺跡の北東約2.0kmに位置する。旧玉串川の支流、旧吉田川沿いの遺跡である。発掘された旧吉田川では、12世紀後半の堤防、13世紀の祭祀遺構、およびそれを管理したであろう人々の集落が見つかっている。当集落は中世前期、中河内地方一円に力を持った水走氏みずはせが開発に係わったと考えられている遺跡である。同氏は、中臣氏の末裔である平岡連を祖とし、周辺の在地の武士団を束ねた氏族である。同氏は、河内一宮平（枚）岡神社の神職を兼ね、近在の觀音寺の別当となつた。また、皇領である大江御厨の管理と警護も受け持ち、当地域の社寺に影響を与えた。旧大和川の支流の河川や深野池などの湖沼における水運権や漁業権を掌握した有力な在地領主であった。南北朝の内乱では楠木正成に従い南朝方となるが降伏し、以後河内国守護となつた畠山氏の臣下として中世を生き延びている。

生駒山西麓部には、鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・鬼塚遺跡・神並遺跡など中世の集落跡が集中する。当地は南北に走る東高野街道、暗峠ほか奈良・大阪を結ぶ諸街道の交差する地で、先の水走遺跡の地と同



1	花屋敷遺跡	13	河内寺跡	25	馬場川遺跡	37	新家遺跡
2	植附遺跡	14	山畠古墳群	26	大竹西遺跡	38	西岩田遺跡
3	西ノ辻遺跡	15	花草山古墳群	27	心合寺跡	39	瓜生堂遺跡
4	鬼虎川遺跡	16	市尻遺跡	28	太田川遺跡	40	若江遺跡
5	水走遺跡	17	上六万寺遺跡	29	〔國史〕心合寺山古墳	41	巨摩廢寺遺跡
6	鬼塚遺跡	18	繩手遺跡	30	池島・福万寺遺跡	42	若江北遺跡
7	神並遺跡	19	五合田遺跡	31	吉田遺跡	43	山賀遺跡
8	瀬田廃寺	20	段上遺跡	32	菱江寺跡	44	西郡廃寺遺跡
9	鶴立遺跡	21	下六万寺遺跡	33	稻葉遺跡	45	萱振遺跡
10	出雲井遺跡群	22	北島池遺跡	34	花園遺跡		
11	狐塚遺跡	23	船山遺跡	35	玉櫛遺跡		
12	皿池遺跡	24	半堂遺跡	36	岩田遺跡		

第6図 花屋敷遺跡周辺の遺跡分布図

様、旧大和川分流や深井池を利用した水上交通の発達した場所でもあったと考えられ、おのずと集落が形成され、発展していったものと思われる。これらの遺跡はほぼ連続する遺跡群であり、奈良、平安時代から集落が認められる地域である。これらの地域では神並遺跡、西ノ辻遺跡の地を中心に、集落が断続的に展開し、場所を移動させながら、中世、さらに一部は近世へ続くものと思われる。

南北朝の内乱をへて、畠山氏は守護職として河内に権勢を振ることになるが、河内国支配における政治的な拠点として築かれたのが若江城である。14世紀末、畠山義深もしくは畠山基国が、守護代遊佐氏に築かせた城とされるが、詳細は不明である。しばらくは河内国守護所として機能するが、文明9(1477)年に遊佐氏は畠山義就により同城を追放され、河内国守護所も義就により高屋城へ移される。

さらに、空白期間を経て、織田信長は永禄11(1568)年に入洛の後、河内国北半国とともに同城を三好義継に与えたものの、天正元(1573)年には義継を滅ぼし、新たに義継の家臣らに城を預けている。さらに信長は大坂の石山本願寺攻めの拠点として当城を用いている。本願寺との和解後はその役目を終え、天正8年頃に廃城となったようである。

発掘調査では、数地点で信長時代であろうと思われる城の関係遺構として土塁、堀跡や、井戸、礎石建物などが見つかっている。堀の中には敵兵の進入を防ぐ逆茂木を配する箇所も検出されている。若江城の廃絶後、中河内の中心は八尾に移り、当地の政治的な求心性は弱まる事となる。

江戸時代に入ると、玉串川など、旧大和川の分流を利用して水運が発達し、剣先船による物資の運搬が頻繁に行われた。当花屋敷遺跡の北に接していた近世の旧吉田村は、吉田川を挟み南北に分かれて位置する村であるが、市場という字名が残り、古い町並みの中に、現在も大念仏寺の末寺である西昌寺や春日社がある。また、遺跡の0.3km程南に位置する玉串の地には式内社津原神社が鎮座するが、当地も近世に旧市場村として登場している。これらの地が河川を利用した物資の集積地として繁栄したことは容易に推察できる。もっとも、玉串周辺は、平安時代には宇治平等院の領地、玉串庄であった可能性が高く、鎌倉時代には、楠木氏が活躍した拠点の一つと考えられている。当地は、古代・中世から交通の要衝で商業も盛んであったことが窺える。

近代になると、大正3(1914)年には近鉄奈良線が開通する。花屋敷遺跡の地も花園駅の駅前として商店街が発達し、今日に至るが、今後も、近鉄奈良線の高架及びそれに伴う再開発により新たな発展を遂げていこうとしている。

※河内平野の形成過程および上述の遺跡についての解説、報告は枚挙に暇なく、下記の参考文献のほか、各遺跡に関する発掘調査報告書などを参照した。

【参考文献】

- 高橋学1991「河内平野の地形環境分析 I - 河内平野の環境分析に関する基礎考察 - 」「池島・福万寺遺跡発掘調査概報」- 89 - 1 ~ 6 調査区の概要 - 財团法人大阪文化財センター
- 原秀植1987「河内低地の地形分類」「河内平野遺跡群の動態」I 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - プロローグ編 - 大阪府教育委員会・財团法人大阪文化財センター
- 布施市史編纂委員会編1962「布施市史」第1巻 布施市役所
- 東大阪市教育委員会2003「東大阪市の歴史と文化財」- わが街再発見 - 改訂版
- 藤井直正1983「東大阪の歴史」 松林社
- 福永信雄2006「若江寺・若江集落と若江城」(1617会2006年10月例会資料)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

以下に、当調査地にて構成される基盤となる層序を記す。各層は基盤となる面の番号を踏襲するようについている。なお、各層中より出土した遺物の詳細は「第2節遺構と遺物」において記述している。

第0層：地表面（第0面）から第1面に至る間の層を当報告では第0層とした。近代以降の客土、搅乱層である。構造物を除去した際に最近敷かれた上部のパラス層と、粗砂～シルトに多量の廃棄物が混ざった搅乱層で形成されている。地表面（T.P.4.2m）前後から1m強（T.P.3.2m程度）の深さまでが、当層である。ただし、調査地の中央部から西側、つまり、第1調査区の西端と第2調査区の大半は、搅乱による削平が特に激しかった。地表面から2m程度まで掘削したが、さらに下位に搅乱が続いた。よって、これらの地域には遺物包含層、遺構面が全く残っていないかった。

第1層：T.P.3.1m前後、層の厚みは10cm～30cmを測る。第1面の基盤となる層である。褐灰色10YRA/1粗砂混シルトほかで形成される。部分的に、上部の搅乱により削平を受けている。わずかではあるが、近世陶磁器や瓦片が出土している。当層の上下の面が耕作面と考えられるので、近世もしくはそれ以前に人為的に形成された耕作土と思われる。

第2層：T.P.3.0m前後、層の厚みは10cm～30cmを測る。第2面の基盤となる層である。オリーブ灰色2.5GY5/1粗砂・礫混シルトほかで形成される。部分的に細かく分層される遺物は、刷毛目唐津碗などの近世の陶磁器、中世の土師器や瓦質土器、土製鉢などが出土している。下位の第3面検出の16戸戸から近世陶磁器やキセルが出土している。近世段階における人為的な堆積、耕作土と思われる。

第3層：T.P.2.7m前後、層の厚みは10cm～20cmを測る。第3面の基盤の層である。灰オリーブ色5Y5/2粗砂混シルトほかで形成される。中世の土師質土器、瓦質土器、瓦、陶磁器などが出土した。中世から近世にかけての堆積層と思われる。

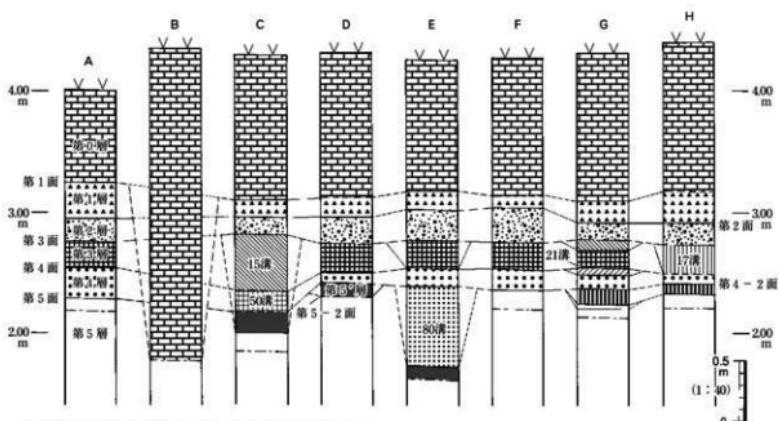
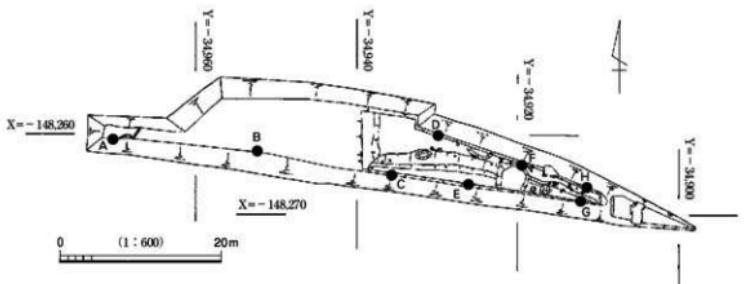
第4層：T.P.2.5m前後、層の厚みは10cm～20cmを測る。第4面の基盤の層である。灰色7.5Y5/1シルト混粗砂ほかで形成される。中世の土師質土器、瓦質土器、瓦、陶磁器などが出土した。

調査区東端部において第5層との間に部分的に間層がみられ、その層をはずすと、新たに遺構面（第4～2面）を検出した。

第5層：T.P.2.3m前後、第5面の基盤の層である。灰色10Y6/1粗砂・礫ほかで形成される。基本的に当層以下には遺物は包含されないが、一部、06-1-1調査区の西北部に遺物を包含する層（第5'層）が見られ、部分的に、下位から新たに面を検出した（第5-2面）。この層、灰色7.5Y5/1粗砂混シルト中より中世の土師器皿などが出土した。

なお、柱状図（第7図）では第4-2層と第5'層とが同一層の様にも見て取れるが、第4-2層の除去後に80溝が検出されていることと、第5面で検出した80溝が第5'層および、第5-2面の遺構、136土坑を削平しているので、層位の矛盾はない。

第1層から第5層の各層は一様にグライ化を受け、灰色、青灰色と化し、土質も粗砂～シルトで構成され、沖積低湿地の様相を呈している。また、各層はほぼ水平に堆積しているが、総じて調査区の中央部や東部位（D地点近辺）が高く、そこから緩やかに東西方向に向かい傾斜している。中世の遺構面

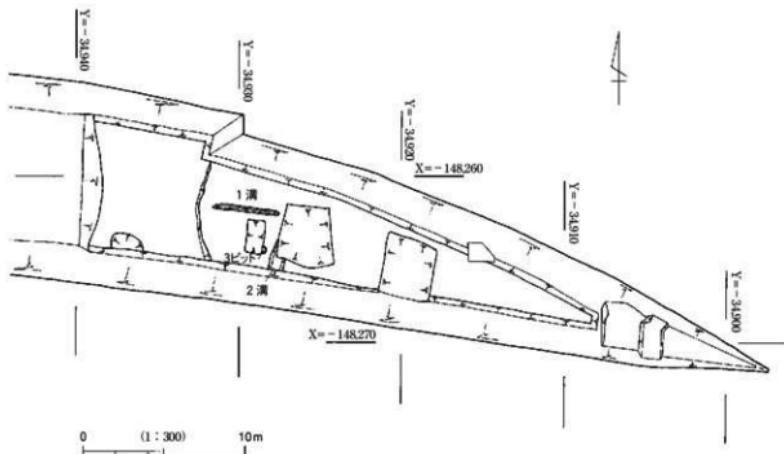


※破綻部分は上位の造構などにより、削平を受けているライン

(縮尺 1/20)

第0層：客土、擾乱	第5層：灰色75Y5/1粗砂混シルト
第1層：褐色灰色10YR4/1粗砂シルトほか	15層：暗緑灰色5GY4/1粗砂混シルトほか
第2層：オリーブ灰色25GY5/1粗砂・繊混シルトほか	17層：暗緑灰色5G4/1粗砂～細砂混シルトほか
第3層：灰オリーブ色5Y5/2粗砂混シルトほか	21層：灰色10Y4/1粗砂混シルトほか（炭を含む）
第4層：灰色75Y5/1シルト混粗砂ほか	50層：褐色5YR4/1纏～粗砂混シルトほか
第4～5層：黄灰色25Y4/1粗砂混シルト	80層：灰色5Y6/1粘土と細砂の互層 (ラミナ顕著にみられる)ほか
第5層：灰色10Y6/1纏～粗砂ほか（無遺物層）	

第7図 基本層序



第8図 06-1-1 調査区第1面全体図

である第5面を例に取ると、東端（H地点近辺）とは比高差は約15cmを測る。

また、第2調査区にあたる西側は、搅乱が激しく、その大半が削平を受けているため、その詳細は明らかではないが、西端部（A地点近辺）も10cm程度低くなっている。

当調査区の西側約70m先には、江戸時代以前の旧吉田川の旧河道や自然堤防であったことを示す、比高差が2m程度の急激な高まりが南北方向に帯状に認められるが、当調査区の範囲においては、これと呼応するような極端な地層の隆起は認められない。

むしろ、滯水、水はけの悪さを示すグライト化の強い土質や、若干凹凸を持ちながらも、全体的に東側へ地形が傾斜するさまは、当地が旧吉田川により形成された自然堤防の後背湿地であったことを示すものと思われる。

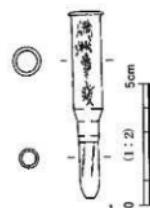
第2節 遺構と遺物

1. 現地表面

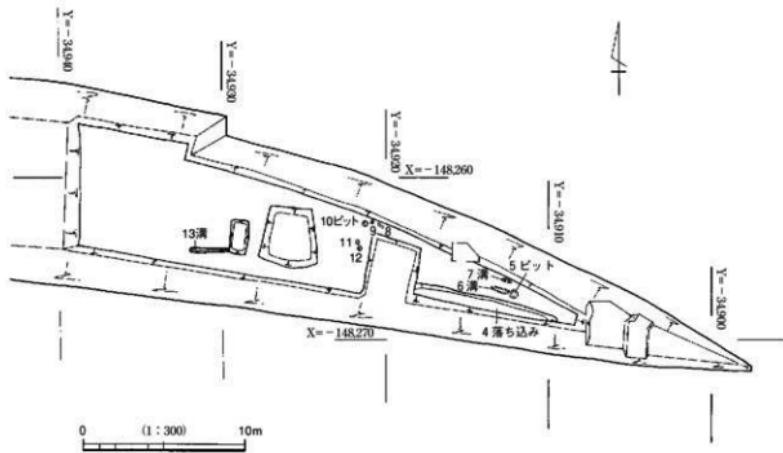
第0面とした、現地表面はT.P.4.0m～4.2m前後を測る。調査以前は住宅地、工場、モーターブール、道路などとして使用されていた。調査直前には、構築物は除去され、一部には厚さ70cmほどで碎石が敷かれ、更地と化していた。0.2m程度の比高差の中で若干の凹凸はあるが、調査区全体としては、東側がやや高く、西側が低くなっている。

2. 第1調査区 盛土と第1面（第8・9図 図版1）

基盤となる0層は、近代以降の盛土、搅乱であり、先述の通り機械掘削にて除去しているが、廃土から陶磁器、下駄、ガラス瓶などの生活用品が散見された。興味深いものとして太平洋戦争以前の銃の薬莢が見つかっている。「満州事変」の文字が刻まれており、当時の記念品であると思われる。近年、近代の戦争関係



第9図 廃土
出土遺物



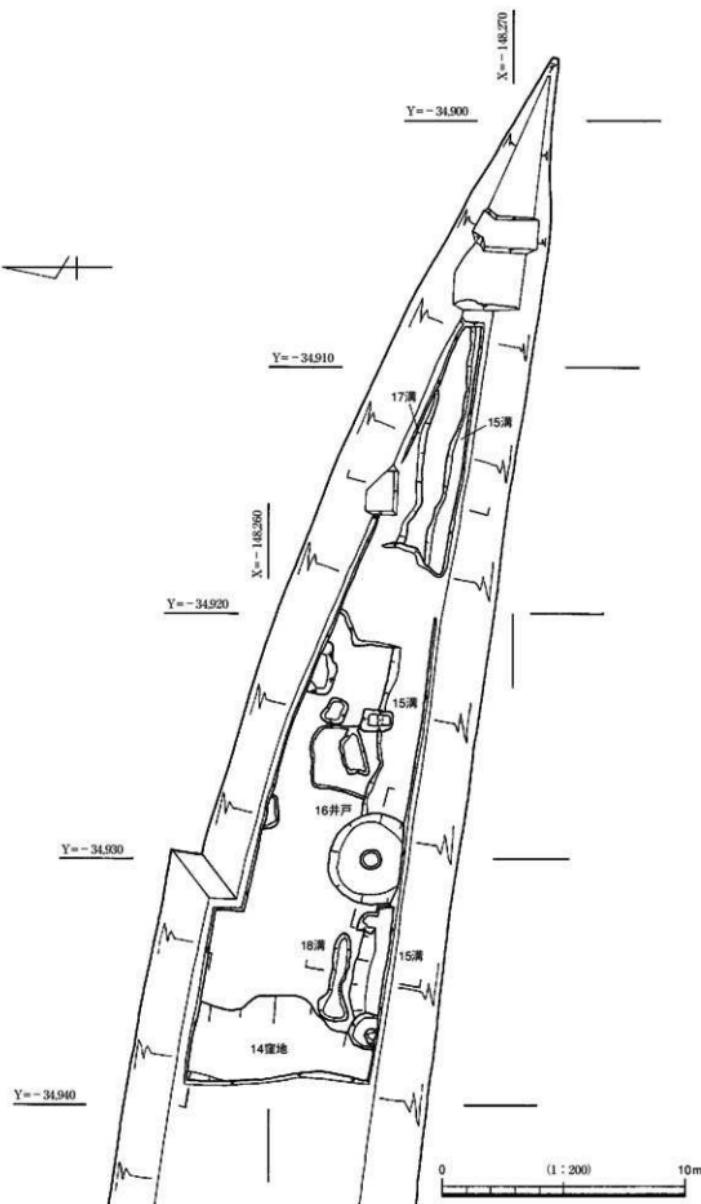
第10図 06-1-1 調査区第2面全体図

の遺物が注目を浴びることも少なくないので、ここに図化した。

第1面は0層を除去した面である。T.P.3.15m前後を測る。ほぼ平坦な造構面である。若干の勧溝の痕跡などと思われる遺構と土坑が散見されただけであった。また、東西方向に延びる4落ち込みを検出しているが、下位の面（第2面）には同じ位置に15溝が存在する。4落ち込みは15溝の最終段階を表しているとも考えられる。当初、基盤となる第1層に中世の遺物を包含するということで、当面を精査したが、当面直上と第1層中に近世の遺物が含まれることがわかった。よって、近世以降の耕作面と考えられる。



第11図 06-1-1 調査区第2層出土遺物



第12図 06-1-1 調査区第3面全体図

3. 第1調査区 第1層と第2面（第10図 図版1）

第1層を除去した面である。T.P.3.0m前後を測る。ほぼ平坦な遺構面である。第1面と同じく耕作に関係すると思われる遺構が散見されただけである。遺構からは遺物は出土していないが、当面を挟む第1層および第2層中で近世の波佐見焼などの遺物が出土しているので、当該期の耕作面と考えられる。

4. 第1調査区 第2層と第3面（第11・12図 図版2・11）

第2層を除去した面である。T.P.2.8m前後を測る。溝3条、井戸1基、窪地1箇所を検出した。

第2層および第3面直上の遺物は、その大半が中世の遺物で占められるが、近世の唐津焼などが若干出土している。第11図には、当層より出土した各時代の遺物を図化した。中でも4の須恵器杯身や8の土師器把手は古代に遡る遺物であるが、各層において古墳時代、古代の遺物も少しあり。近隣にこれらの跡が存在する可能性を示唆するものと考える。10は中世の壺であろう。また、中世の遺物でも7の中国製青花皿や、11の瀬戸焼鉢のように中世の後半に属する遺物も少なくない。

14窪地（第13・14図 図版11）

調査区の西側に位置する。下面の第5面で検出された14溝が埋没する過程でできた窪地である。不定形ではあるが、南北に長くN-11° -Wを取る。長さ7.30m、幅は最大で3.45m検出した。遺構の西の肩は、調査地の西部を大きく削平する擾乱に削られており、これは、下部の14溝も同様である。北側は調査区外へ続き、南側は擾乱で乱されているため、詳細は不明であるが、下位の14溝と連動すると考えると、調査区の南端で一応収束すると思われる。

前述のように、先行する中世の溝（14溝）が埋まる過程での窪地であることから、遺構としての土砂の堆積はさらに下位へと続く。堆積物は灰色7.5Y4/1シルト混粗砂を中心であり、下位の溝の堆積の粘性の土壤とは大きく土質は異なる。また、深さも0.25m程度と浅く、当面の時期では溝としての機能は失われていたと思われる、単なる窪地としてとらえた。

出土した遺物は概して、下位出土の遺物と近似しており、大半が、窪地が埋没した時期の遺物ではないと思われる。当初、遺構の埋土が連続することから、一部下層まで掘削している。それゆえ、出土する遺物は下位の溝の遺物を少なからず含むと考えられる。中には、14の東播系須恵器練鉢や15の備前焼鉢のように古い時代の傾向を示す遺物もある。わずかに土師器皿12が16世紀頃の所産と思われ、当該期といえるものであろうと思われる。

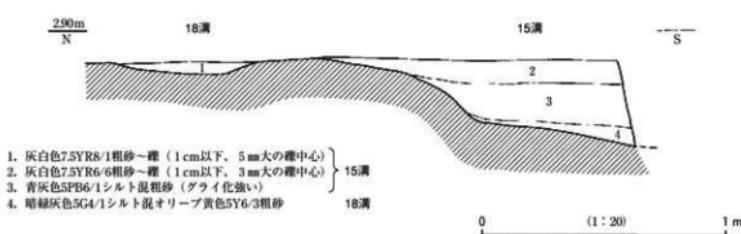
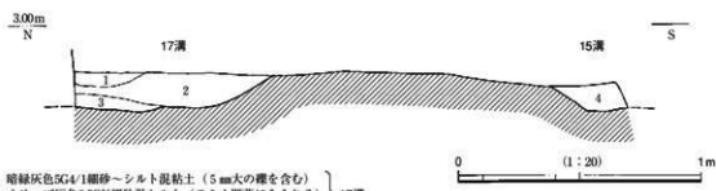
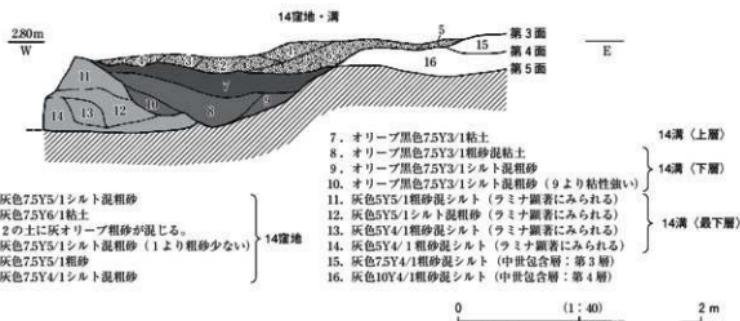
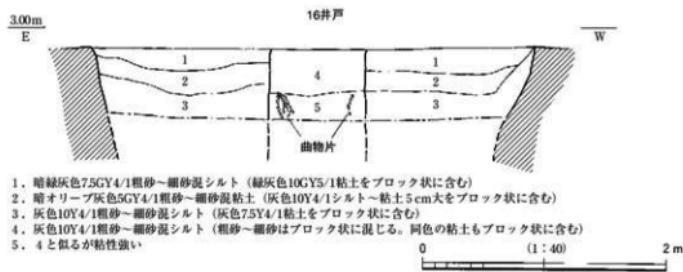
15溝（第13・15図 図版11）

調査区の南端を東西に直線で延びる溝である。E-12° -Sをとる。検出した幅は1.90mであるが、南側の肩は調査区外となる。長さは29.00m検出されているが、東側は調査区外へ延びる。西側の端は擾乱によって破壊されてはいるが、14窪地と隣接することから、その手前で収束するものと思われる。深さは0.4m程度を測る。埋土は暗オリーブ灰色2.5GY4/1粗砂～細砂混粘土などであり、特に、中位から上部は多量の砂で覆わされていた。よって、当溝は洪水などの営力により、一気に埋没したと考えられる。

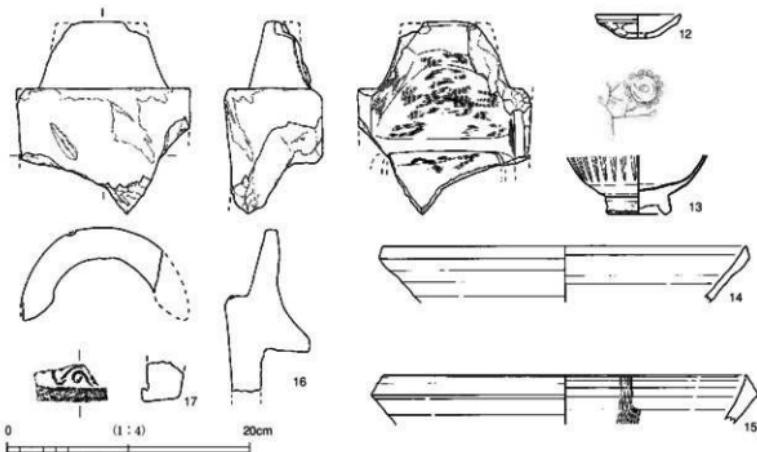
土師器皿、瓦質土器など中世の遺物が出土しているが、24の備前焼鉢のように下位の層や遺構から出土する遺物と類似するものが多い。それでも22の京都産模倣であろう土師器皿、25の瓦質鉢のように15世紀後半に属する遺物もある。

17溝（第13・16図）

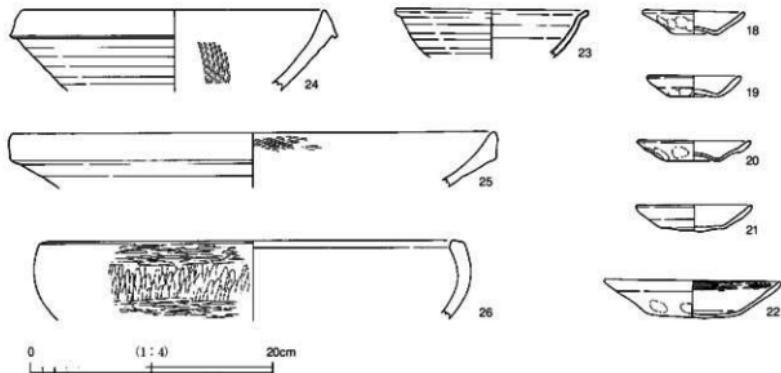
調査区の東北部を東西に延びる溝である。15溝に平行して走る。残長6.50m、幅0.80m、深さ0.16mを測る。埋土にはラミナが顕著にみられるオリーブ灰色2.5GY4/1細砂混シルトがはいる。北の肩は調査



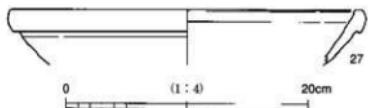
第13図 06-1-1 調査区第3面検出構造断面図



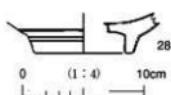
第14図 14窯地出土遺物



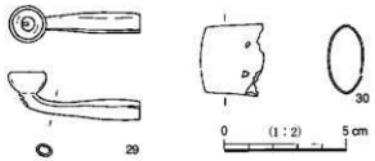
第15図 15溝出土遺物



第16図 17溝出土遺物



第17図 16井戸出土陶磁器



第18図 16井戸出土金属製品

と同時期の遺物が多い。この溝も埋没する際に下層の遺物を巻き込んでいるのであろう。

18溝（第13図）

15溝の北に接するように平行して走る長さ3.60m、幅0.57m、深さ0.50mの溝である。浅く、短い土坑ととらえてもよいであろう。遺物は出土していない。堆積には粒の粗い粗砂が多いことから、溝15と同じく、一気に埋まったと思われる。

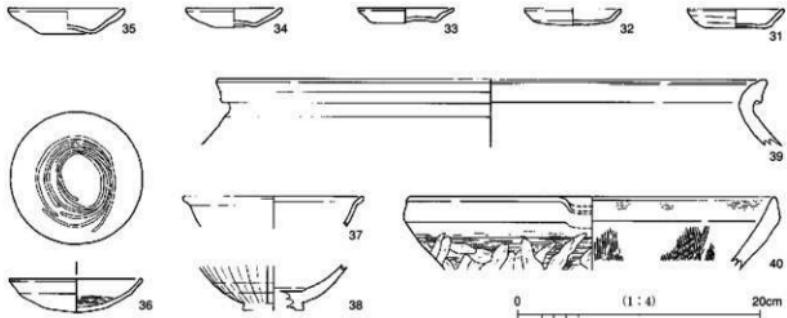
16井戸（第13・17・18図 図版11）

調査区の南側中央よりやや西に位置する。15溝や第4面の50溝、第5面の80溝を切っている。直径3.70mを測る。粘土をブロック状に含む灰色10YR4/1粗砂-細砂混シルトほかが堆積する。中央に直径0.80mの変色部が柱状に認められる。ここに井筒をすえていた。実際、この変色部位にそって、井筒の断片である曲物や竹のタガの残片が出土している。掘方の大きさの割には、井筒は小さいが、当地的土質が軟弱であるため、井戸掘削時に崩落の危険を避けるために、はじめに大きく開口したのであろう。最終的に80溝の底T.P.2.0m程、深さにして1m程度まで掘削したが、遺構はさらに下方へ続いた。

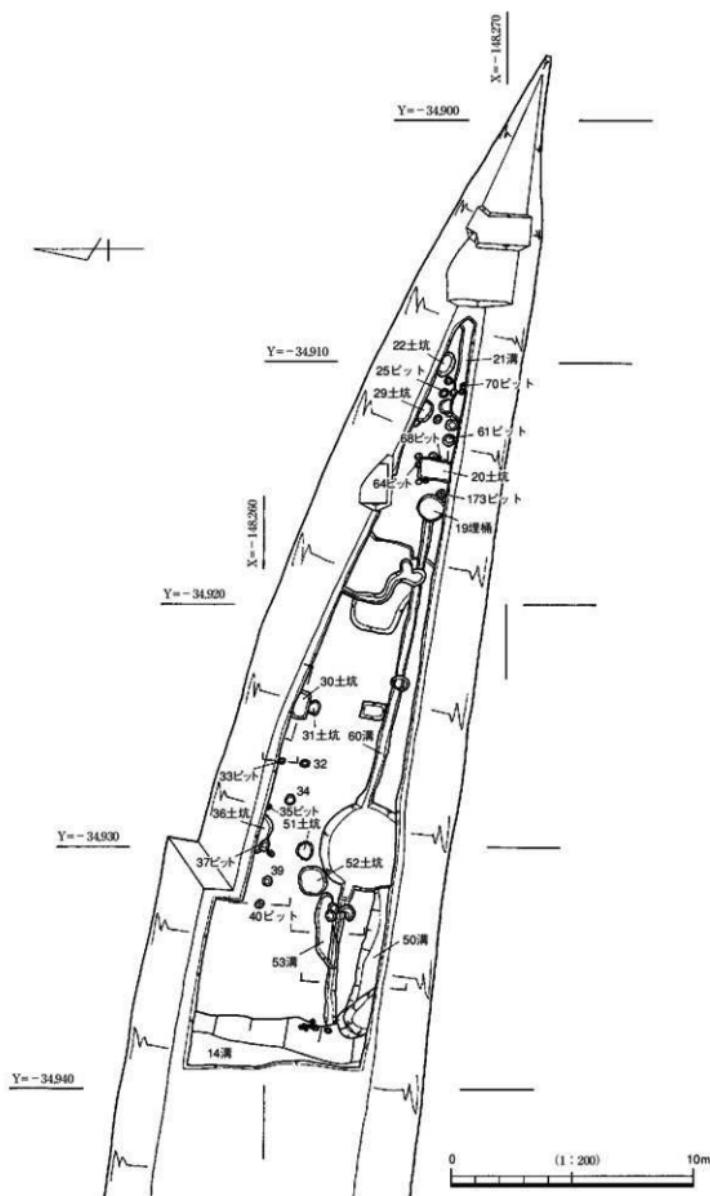
瓦類や中世の遺物も出土しているが、29のキセルの火口部分、30の刀の鞘尻が出土している。また、青磁染付椀28が出土しており、ほかの同面の遺構よりは新しく、18世紀中葉以降の遺構であろう。

16井戸が18世紀の中葉とすると、そのほかの遺構とは時期的に開きがあり、第3面の検出ではあるが、第2層の構築に際し、同遺構の切り込まれた面が飛ばされた可能性が高い。

第3面は当該期の遺物として認知できるものは少なく、当遺構面の時期決定をするのは難しい。



第19図 06-1-1 調査区第3層出土遺物



第20図 06-1-1 調査区第4面全体図

5. 第1調査区 第3層と第4面

(第19・20図 図版3・11)

第4面はT.P. 2.5m前後を測る。若干中央部が高く東西が低い。土坑、溝、柱穴と杭を多数検出した。

また、第3層や第4面直上からは土師器皿や瓦器碗、土師質や瓦質の羽釜、鉢、常滑焼窯、瓦などが出土している。土師器皿は下記60溝の説明にて述べるd類が多い。38は龍泉窯系の中国製青磁碗である。39は信楽焼窯である。瓦器碗は和泉型のIV-3~4である。時期幅があるが、14世紀中頃から15世紀後半の遺物が多いと思われる。

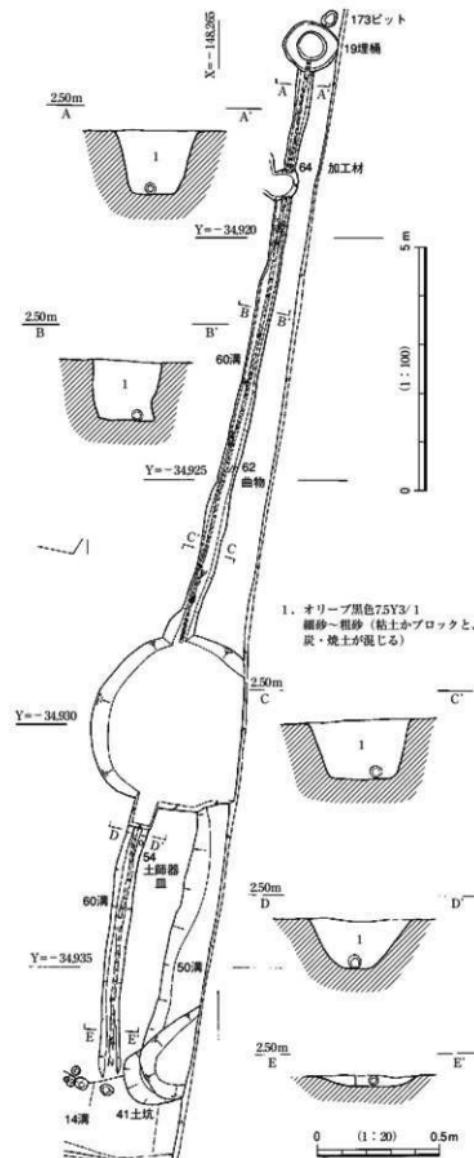
19埋桶（貯水施設）

(第21~25図 図版4~7・12・20)

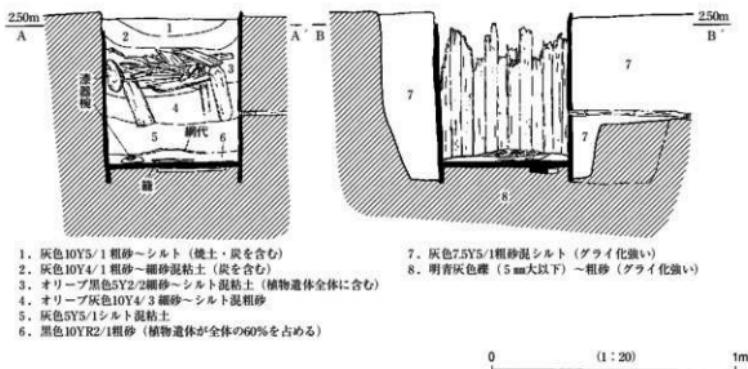
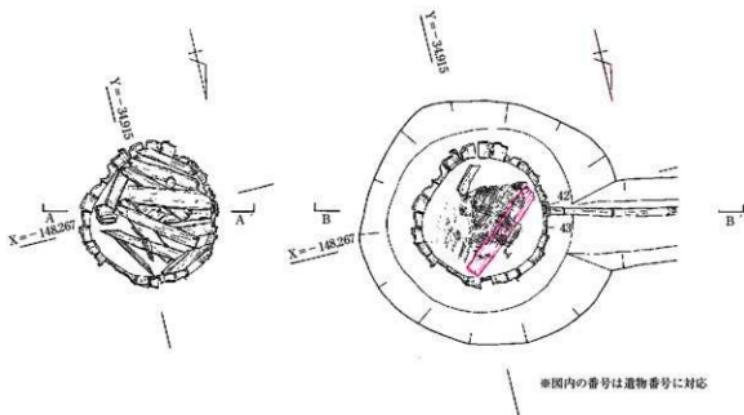
調査区の東南側に位置する。直径0.55mを測る。側板27枚で桶枠が構成されていた。調査当初は単に地下より水をくみ上げる井戸であろうと考えていたが、底板が見つかり、さらには、側板の一枚(42)に直径6cm弱の穴があけられており、ここから以下に述べる60溝に埋設されていた竹筒と結合していることが分かった。結桶を使用した貯水施設であることが判明した。底までの深さは0.7m程度である。このような結構は中世では各所で見られ、当遺跡の近隣の瓜生堂遺跡などでも、桶底の無い井戸として使用されているが、このような導水用の竹管を伴う施設は近世段階に多いようである。中世の遺構としては珍しいといえる。ただし、構造は単純であり、今後も見つかる可能性はあると考えられる。

桶内に堆積した土は6層に分かれるが、基本の土質は細砂シルトである。

埋土の上方には破断された側板の上



第21図 19埋桶（貯水施設）・60溝（導水施設）平・断面図

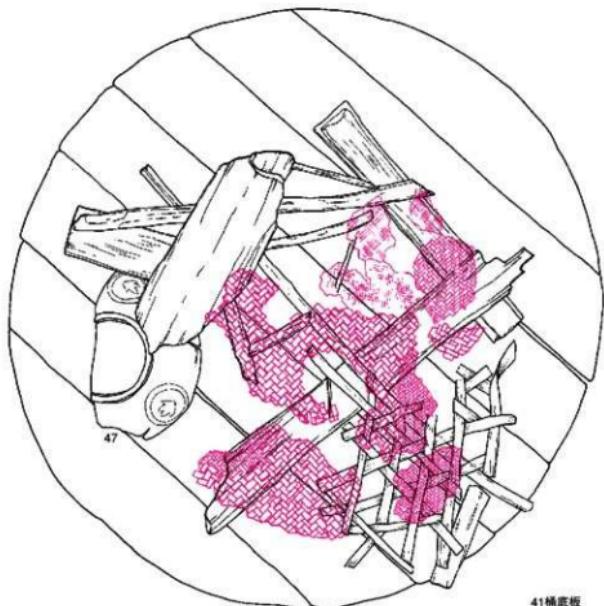


第22図 19埋桶（貯水施設）平・断面図（左）平・立面図（右）

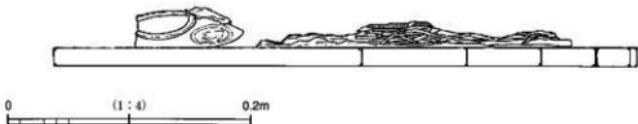
部が内側に落ちていた。これらの板は残長30cm前後であることから、上部は検出面よりさらに0.3m程度は延びると思われる。堀方の土は、周りよりグライ化が強く、灰色7.5YR5/1粗砂混シルトである。また、19埋桶の中からは土師器皿、瓦質羽釜が出土している。45は京都産模倣の土師器皿であろう。ほかに、桶にへばりつく形で漆塗椀48と、桶の底から漆塗椀47が出土している。桶底からは、網代製品も出土している。網代製品は網目の違いと重なり具合から見て4点は存在したと考えられる。いずれも竹籠であろう。導水管とは別に、井戸息抜きの竹であろうか、直立した形での竹筒も存在した。漆器椀、瓦質羽釜の形状からみて15世紀前半の遺構と思われる。

60溝〔導水施設〕(第21・25図 図版4~6・12・19)

調査区の南部に位置する。東西方向に直線で延びる。途中16井戸により削平を受け、東西に断ち切ら



図内の番号は遺物番号に対応



第23図 19埋桶底遺物出土状況

れているが、これを復元すると、14溝南端近辺から発し、西側の19埋桶に取り付くこととなる。長さ18.00m、幅0.50m、深さ0.25mである。溝の内部の埋土を除くと竹筒が検出された。竹筒はながらかに西側から東側に傾斜する。水を流すために竹筒の節はつぶされ、竹同士のつなぎは、ジョイントの特別な施設ではなく、片方の竹をそのままもう一方に差し込まれているだけである。竹は埋設され、暗渠

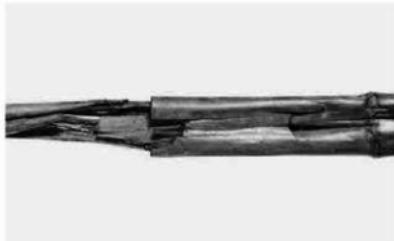


写真1 60溝 竹製導水管継目部分



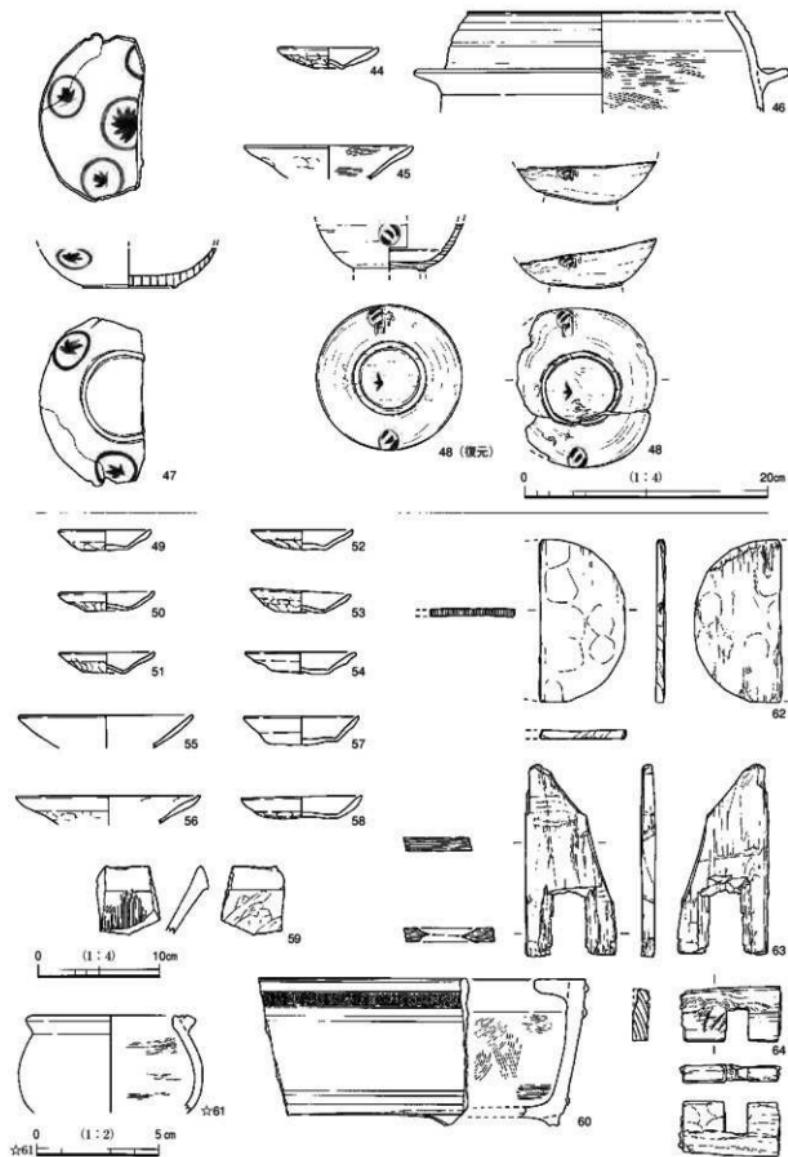
42



43

0 (1 : 4) 20cm

第24図 19埋桶側板



第25図 19埋桶〔貯水施設〕出土遺物（上）・60溝〔導水施設〕（下）

となって使用されていたものと思われる。14溝の手前で当溝は終わり、竹筒も削られていたが、恐らく、当溝から引き込まれた水を19埋桶に溜めたのであろう。60溝は19埋桶と共に、何か宗教的な施設であろうか。

遺物には当遺跡通有に見られる中世の土器のほか、曲物、「コ」の字状に加工された木製品63、64が出土している。64は導水管となっている竹筒を上から押さえつけて固定していた。63は原位置をとどめない浮いた形で検出したが、同様に使用された板と思われる。

なお、19埋桶・60溝から下記の20土坑（a～c類）とは異なる土師器皿が出土しており、小型をd類、大型をD類とした。d類は口径8.0cm前後、器高は2.0cm前後でやや高い。底部は狭く、体部は指押さえにて外反するが、口縁部は内傾気味におさまる。なお、d類、D類ともに、土師器皿の底部は「平底」、「全体にやや上げ底」、「中央が少し窪む」、「中央が強く窪む。」の4種類（枝番号1～4）に細分している。D類は口径9.0cm前後を測り、底部の面積も広い。器の調整はd類に似る。

20土坑と周辺のピット（第26・27図 図版4・12）

20土坑は19埋桶の東に接する。長方形のプランを呈する。長辺1.25m以上、短辺0.80m、深さ0.40mを測る。埋土には焼土や炭を含む粗砂混シルトである。当土坑からは集積した土師器皿が多数完形で出土している。白磁と瓦の破片を除き当土坑出土の遺物は全て土師器皿である。また、焼土を含む柱穴が20土坑を取り囲む形で7基、62～68ピットを検出した。ピットの形状は、直径0.14m～0.23m、深さは0.13m～0.23mを測る。63ピットは根石を伴い、柱も遺存していた。68ピットは直径0.14m、深さ0.13mを測る。埋土には灰色5Y5/1炭混シルトが入る。

当初、土師器皿が密集する長方形のプランの外側に炭、焼土層が幅0.2m程度で帯状に取り巻くので、土壤墓の掘方と棺の関係を想定したが、炭、焼土を取り除くとこのようなピット類が検出された。19埋桶・60溝と同様、何か宗教的な施設であろうか。

出土した土師器皿を大きく3種に分けてみた。a類（65～70）は、横ナデを施し、指圧痕が残らず、底部は平たく、口縁端部は歪み、丸くおさまる。体部はやや内弯気味に立ち上がる。口径は7.3cm前後を測る。焼成の色調はにぶい橙色が中心である。b類（71～80）は、a類に近いが、体部はやや外反し、口縁端部は尖り気味におさまる。口径は7.5cm前後を測る。焼成の色調はにぶい黄橙色が中心である。c類（81～87）の底部はやや持ち上がり、指圧により体部は外反する。なでて仕上げるが、指圧跡も明瞭に残る。口縁端部はつまみあげ状におさまる。口径は7.7cm前後を測る。焼成の色調は灰黄色が中心である。a類、b類、c類の順に新しい様相をもつと思われる。なお、88は下記に述べる第5面の80溝などに見られるE類に近似し、破碎された遺物でもあることから、下層から巻き込んだ遺物と考えられる。形状の確かな遺物が土師器皿のみで時期を確定し難いが15世紀中頃の遺構であろうか。

25ピット（第31図）

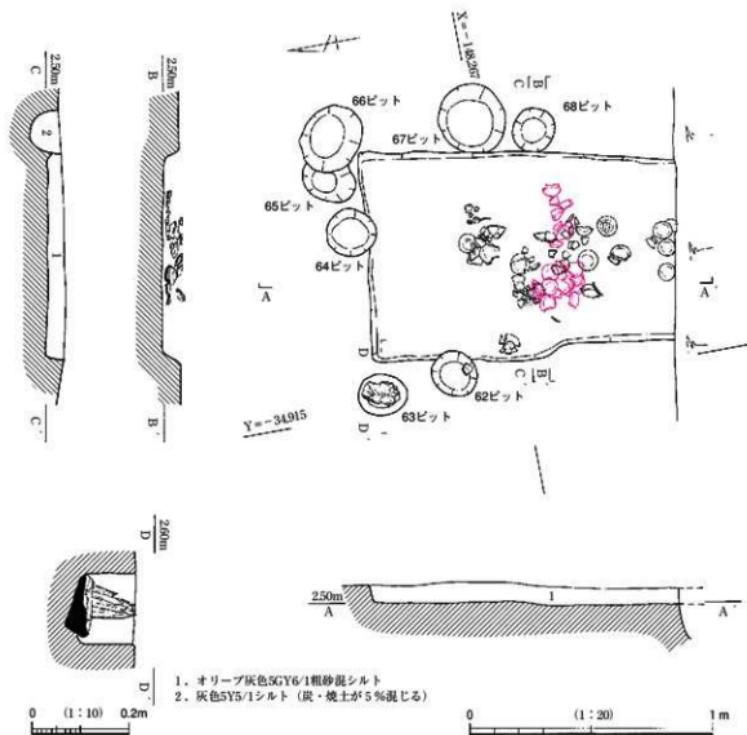
調査区の東端に位置する。直径0.30m、深さ0.05mを測る。図化した土師器皿95が一点出土している。

30土坑（第28・31図）

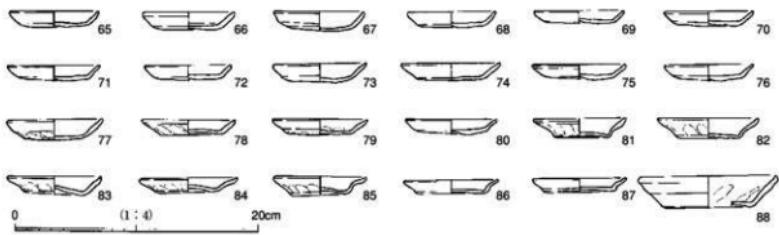
調査区中央北端に位置する。長軸を東西にとる隅丸方形の土坑であるが北は側溝により若干欠損している。長軸1.10m、短軸0.65m以上、深さ0.22mを測る。埋土には黒褐色2.5Y3/1粘土が入る。上方には鉄分が多く、遺構の口は広がる。遺物は図化した96の瓦器碗と土師器皿の細片が3点出土している。

35ピット（第31図）

30土坑の西に位置する。直径0.25m、深さ0.05mを測るピットである。埋土にはオリーブ黒色10Y3/1



第26図 20土坑と周辺のピット平・断面図

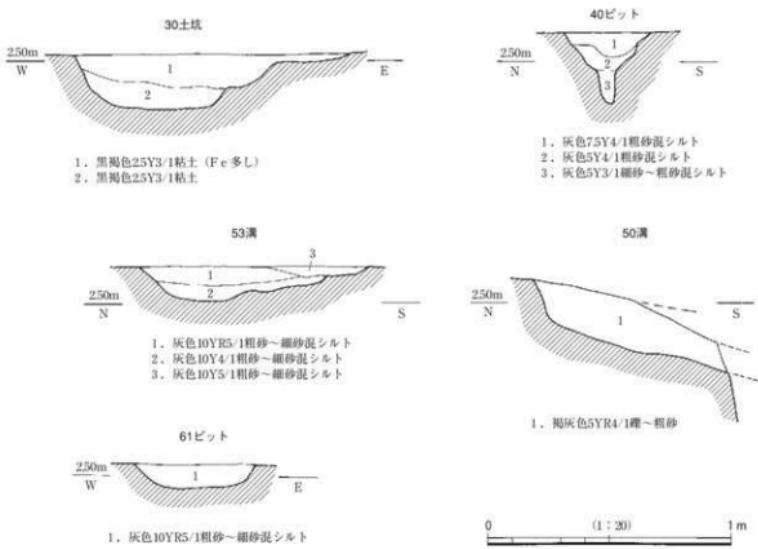


第27図 20土坑出土土器皿

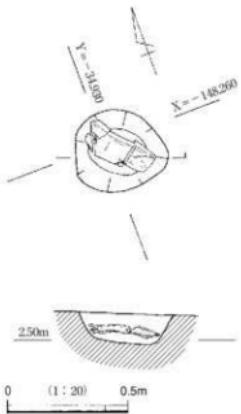
砂混シルトが入る。図化した瓦器碗97が出土している。

37ピット (第29図)

調査区西北端に位置する。直径0.40m、深さ0.12m、深さ0.12mを測る。埋土にはオリーブ黒色10Y3/1砂混シルトが入る。柱の根石のかわりに常滑焼窯の体部の細片が使用されていた。



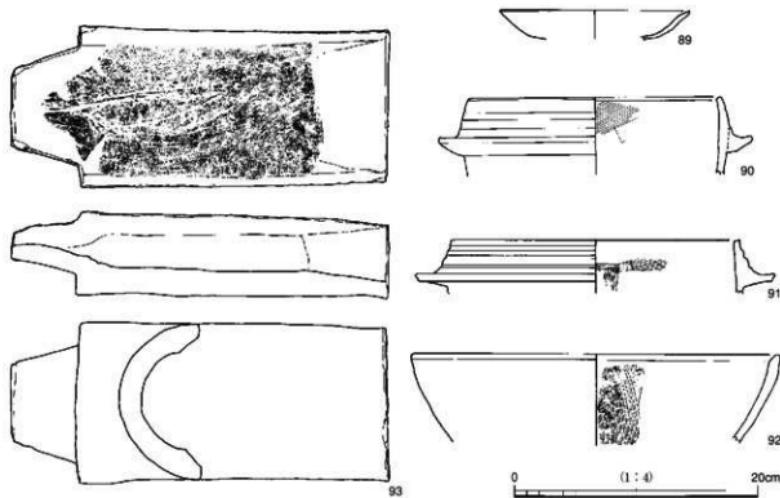
第28図 06-1-1 調査区第4面検出遺構



第29図 37ピット平・断面図

6. 第1調査区 第4-2面 (第32図 図版7)

東端部分で5面に至るまでもう1面、第4-2面を検出した。T.P.2.4m前後を測る。この面にはピットが多く見られ、88、89ピットなど柱根を残すものもあった。また、87土坑というやや異質な遺構



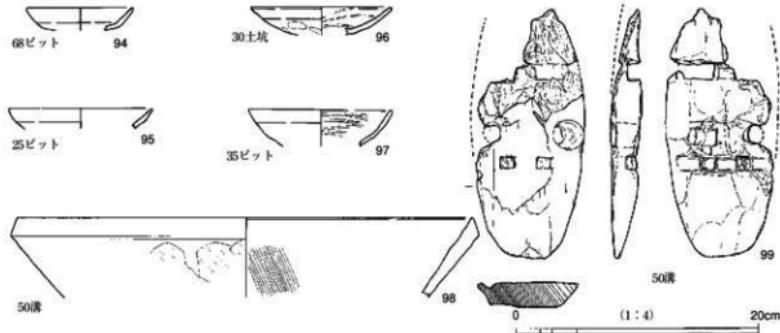
第30図 14溝(下層)出土遺物

が見つかっている。なお、当面の下層は第4 - 2層であるが、瓦類が出土している。

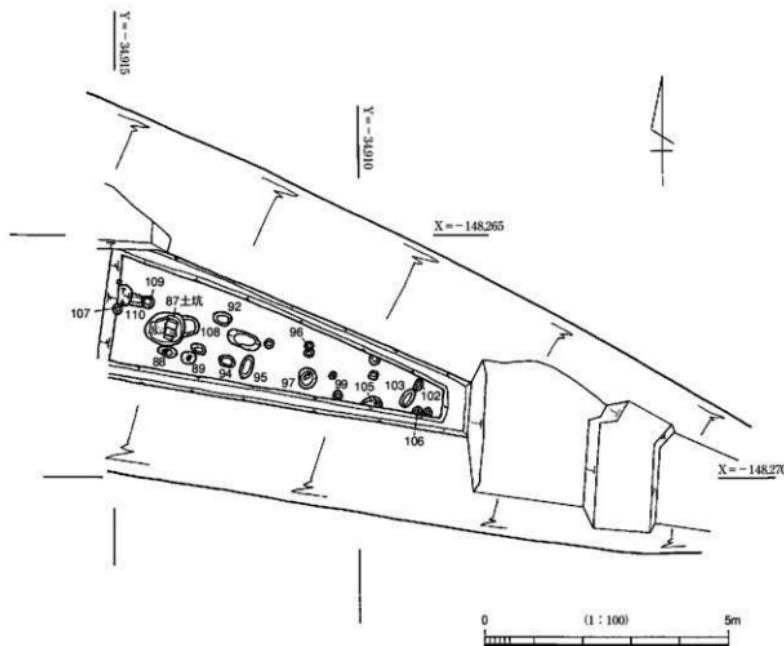
87土坑 (第34・35図 図版7・20)

上面の20土坑の東に接する位置に当たる。隅丸方形の遺構である。柱穴と考えられるが、以下に記す特異性を持つので、土坑とした。長軸0.74m、短軸0.54m、深さ0.18mを測る。埋土には黒褐色7.5Y4/1炭、焼土を含む砂混シルトが入る。108ピットを切る。四角い礎石の上にさらに礎板が使用されていた。この板は4枚(115~119)に分かれているが、もとは1枚のコウヤマキの板である。その上に柱材を据えたであろう、やや異質な遺構である。土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜片が出土している。

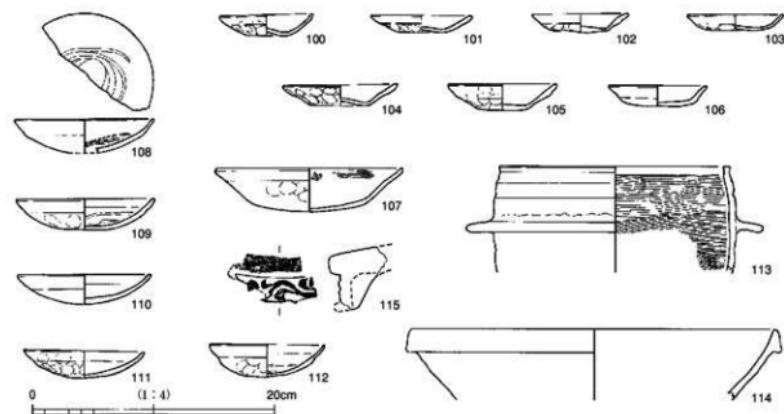
上部の遺構である20土坑の下近くにて検出していることや、特異な構造を持つことから考え、この遺構も宗教行為に関する施設の跡であるのかもしれない。



第31図 06-1-1調査区第4面検出遺構出土遺物



第32図 06-1-1 調査区第4-2面全体図



第33図 06-1-1 調査区第4層出土遺物

7. 第1調査区 第4層と第5層

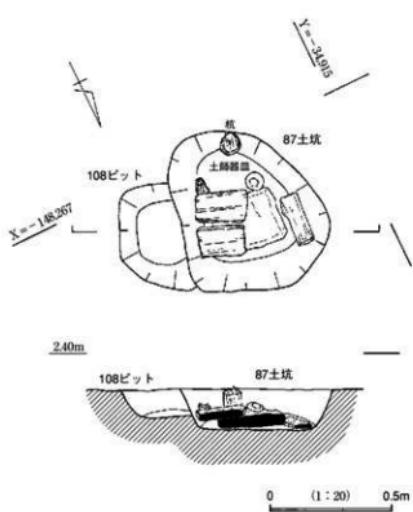
(第33・36図 図版8・13)

第5層はT.P.2.2m~2.4m程度を測る。調査区の西端が高く、東へ低くなる。土坑と溝、柱穴、杭等を検出した。特に調査区の南側に位置する80溝は第5層の調査範囲内、半分以上を占めている。

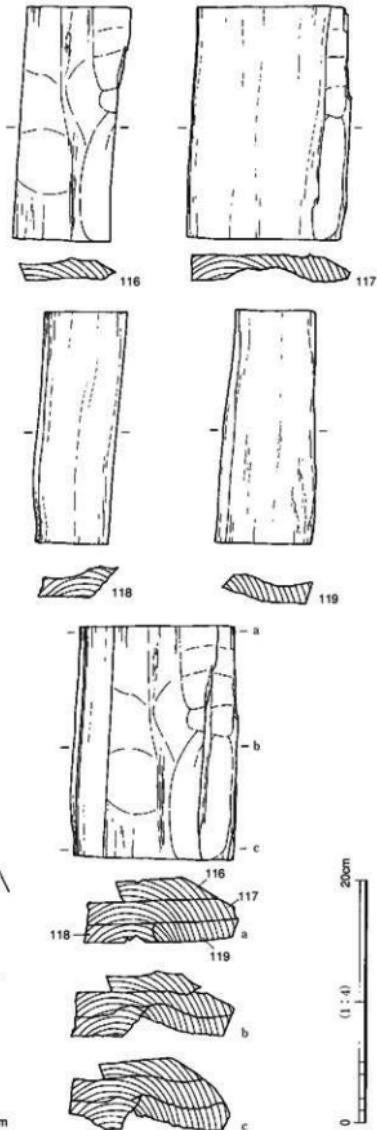
第4層および第5層直上の遺物は、その大半が中世の遺物で占められる。主な遺物として、土師器皿や瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質鉢、常滑焼甕、備前焼甕、東播系須恵器練鉢、瓦などが出土している。瓦器には108~112の和泉型IV-3~5、107のように京都産模倣したと思われる土師器皿、113のように口縁部の直立する瓦質羽釜、114のような東播系須恵器練鉢がある。14世紀~15世紀前半頃の遺物が多い。

80溝 (第37~47図 図版9・13~21)

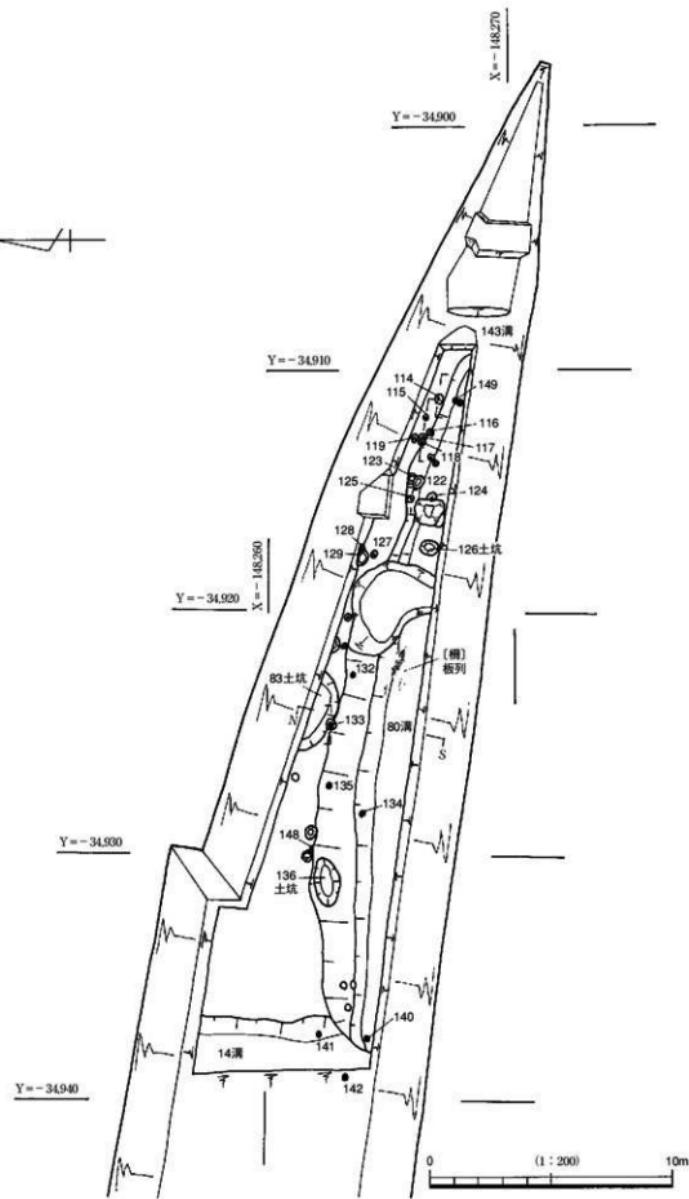
長さ29.0m以上、幅3.6m以上、深さ0.78mの大きな溝である。東西方向に走る。南側の溝



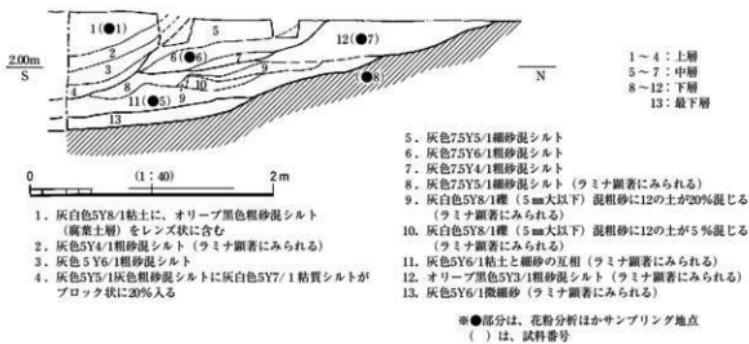
第34図 87土坑、108ピット平・立面図



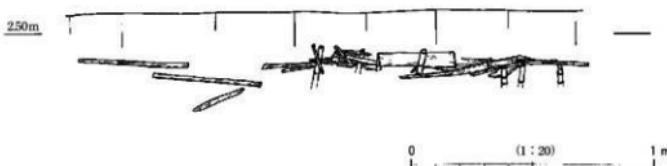
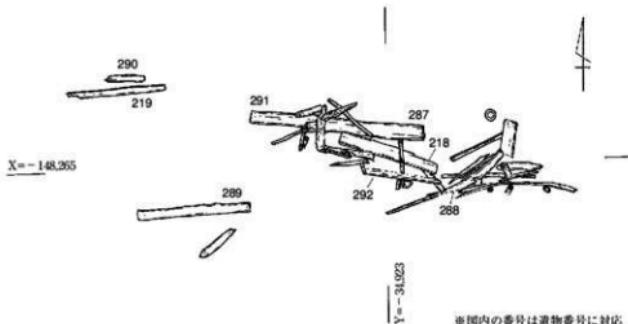
第35図 87土坑出土板材



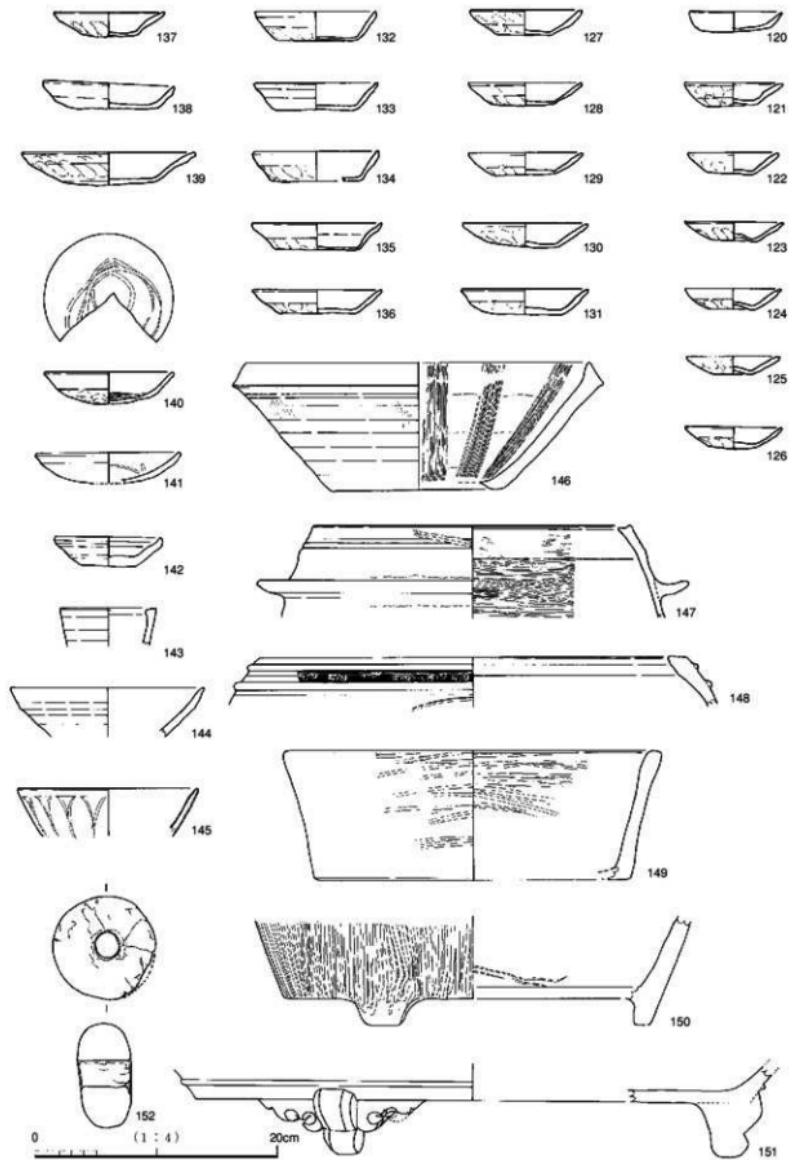
第36図 06-1-1 調査区第5面全体図



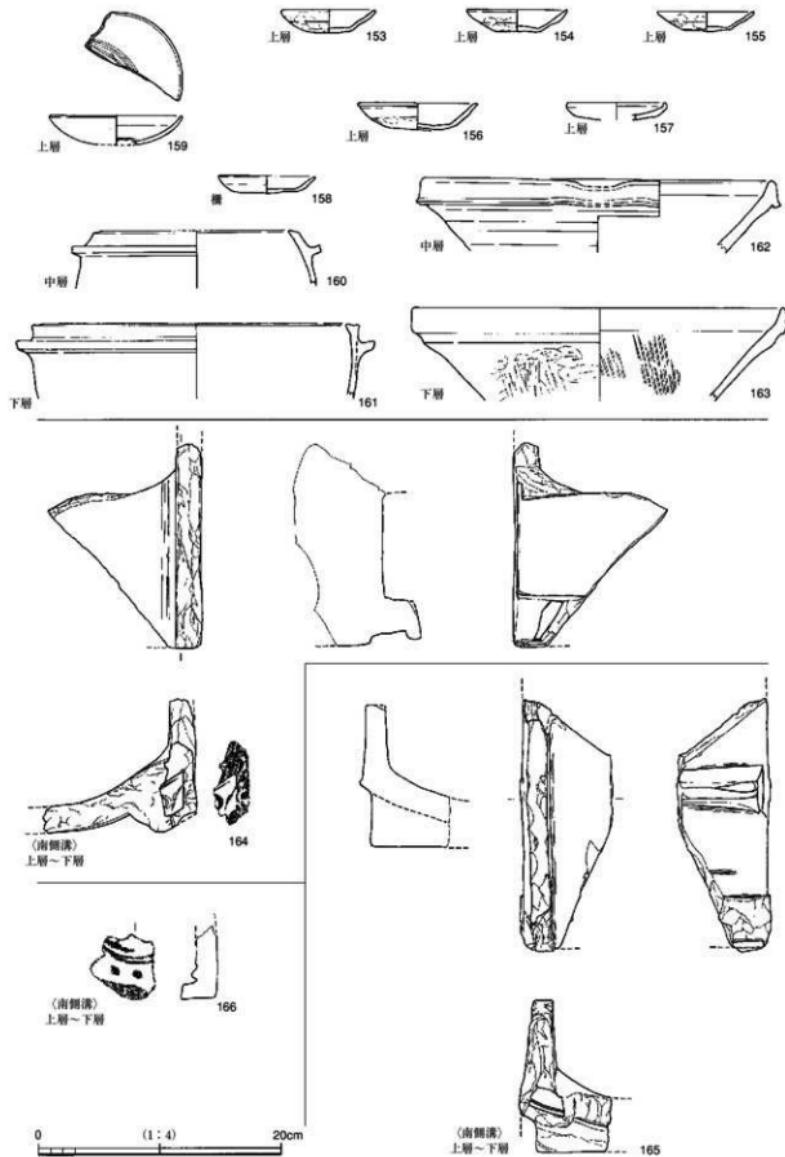
第37図 80溝断面図



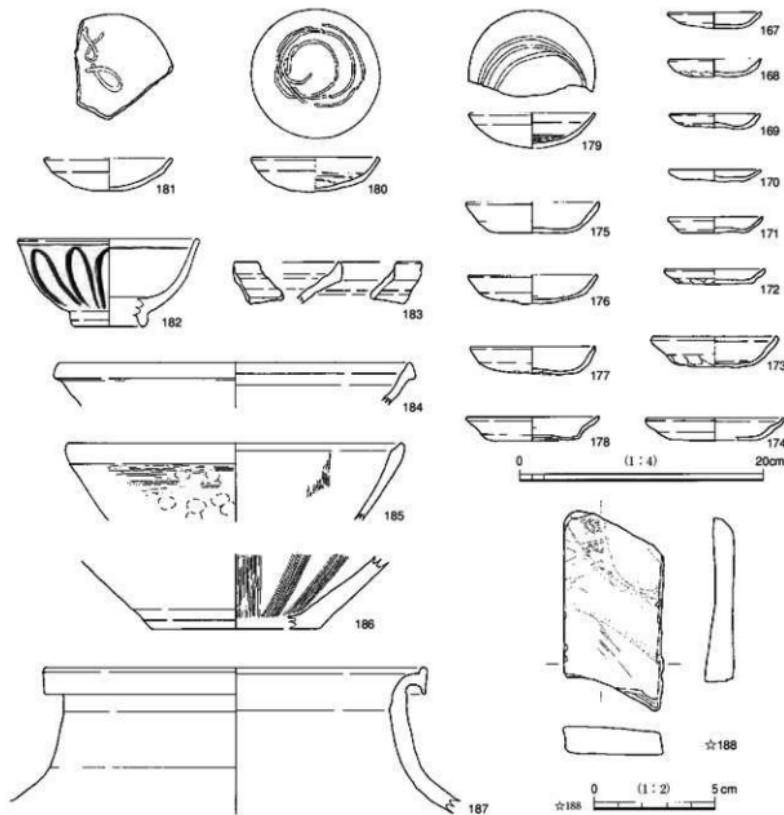
第38図 80溝〔柵〕板列平・立面図



第39図 80満出土遺物①



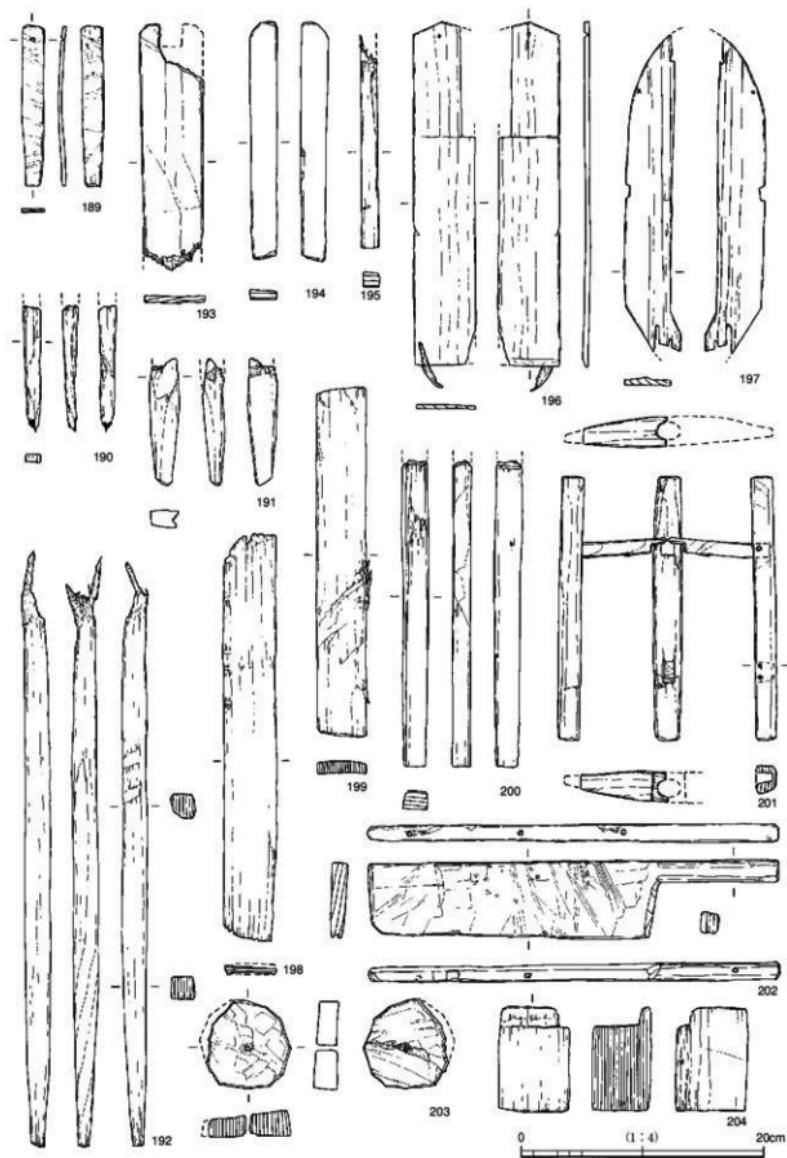
第40図 80溝出土遺物②〈上層～下層〉



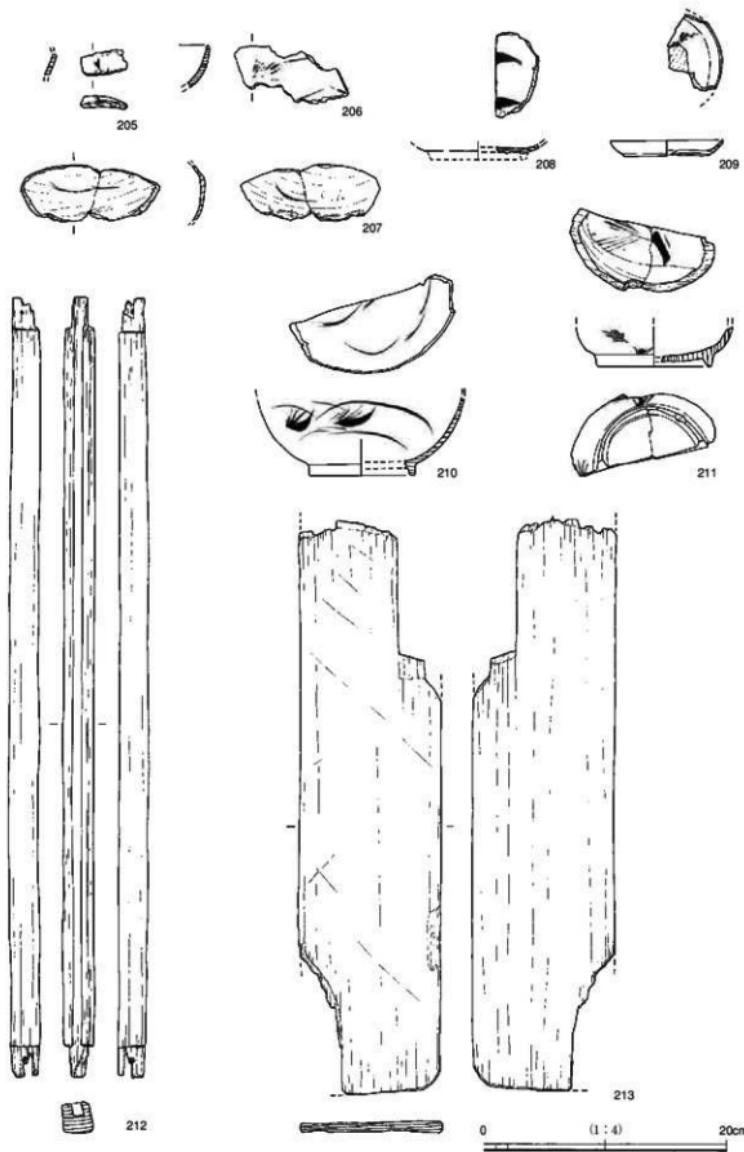
第41図 80溝出土遺物③〈最下層〉

の肩は調査区外となる。西端は搅乱を受けているが、14溝に取り次ぎ、溝全体の平面形としては、「L」字を呈するものと思われる。埋土は溝の中央部分が最も深い。この深部を中心に、なだらかに東西に傾斜している。中層以下は細かいラミナが認められた。下層では、植物遺体も顕著に見られた。最下層は微細砂層で湧水が激しかった。潜水していたか、弱い流れがあったのであろう。

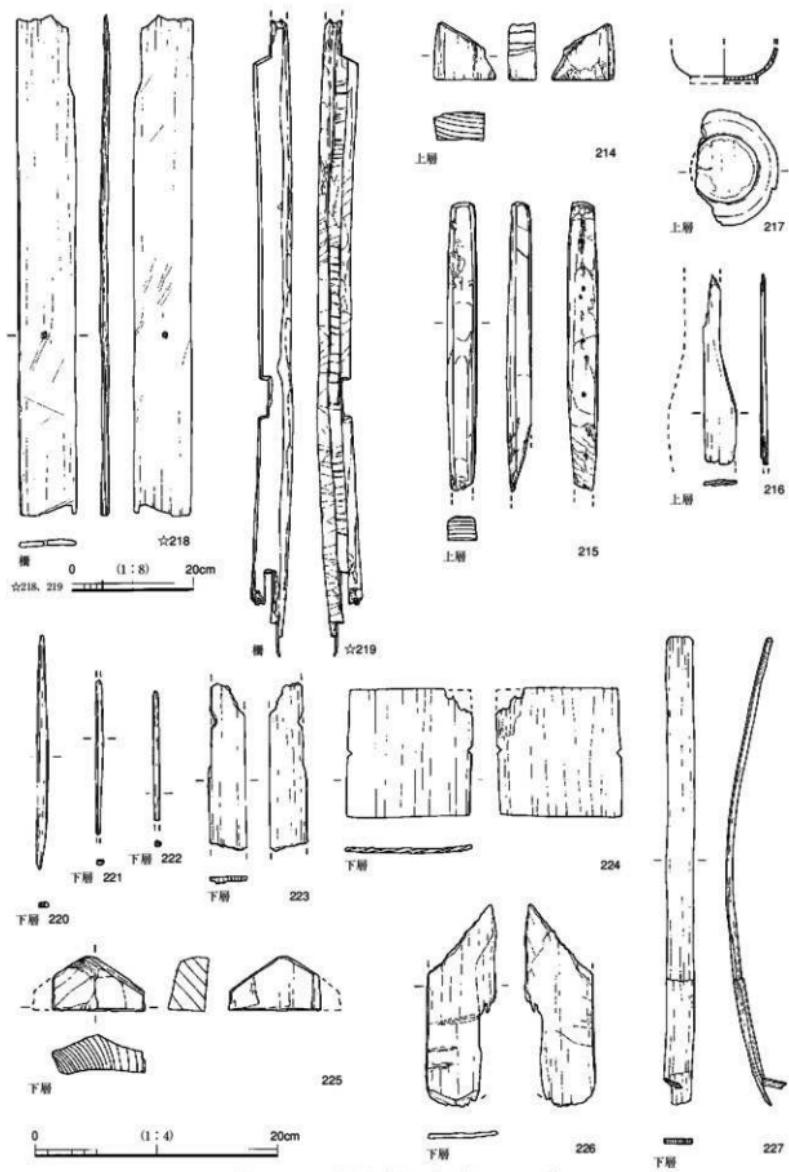
第5面で検出した遺構に含まれる遺物も大半はこの80溝から出土している。中世の土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質壺・羽釜、備前焼捕鉢、常滑焼甕・鉢、東播系須恵器練鉢、中国製青磁碗など13世紀後半から14世紀末頃の遺物が出土している。このような多くの土器、陶磁器と共に木製品の出土量も少なくない。残念ながら、その多くは、部分的な部材のみで、本来の用途を推察するに難しいものもある。しかし、201の糸巻きなどの織機部材、草履254、下駄255などの履物、漆器椀など用途の判るものもある。毬杖の櫛266も見つかった。特に目を引くのが、木簡が2点出土していることである。「西方源三上」と



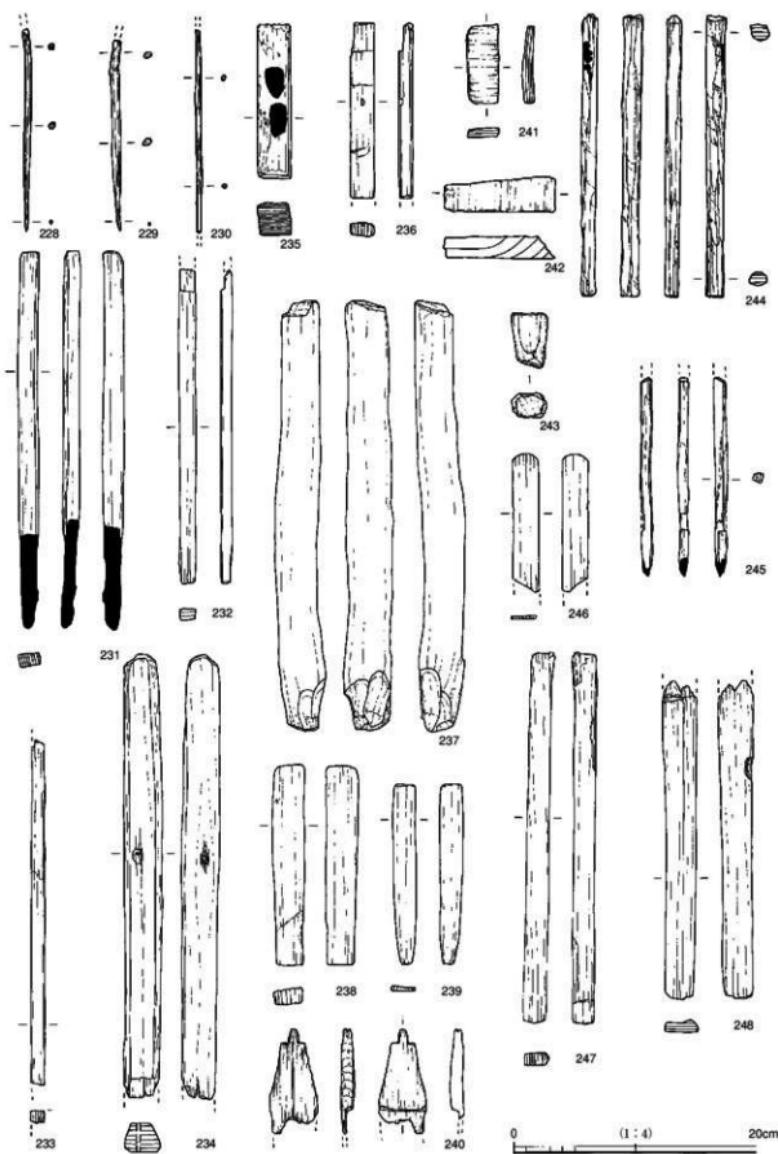
第42図 80溝出土木製品①



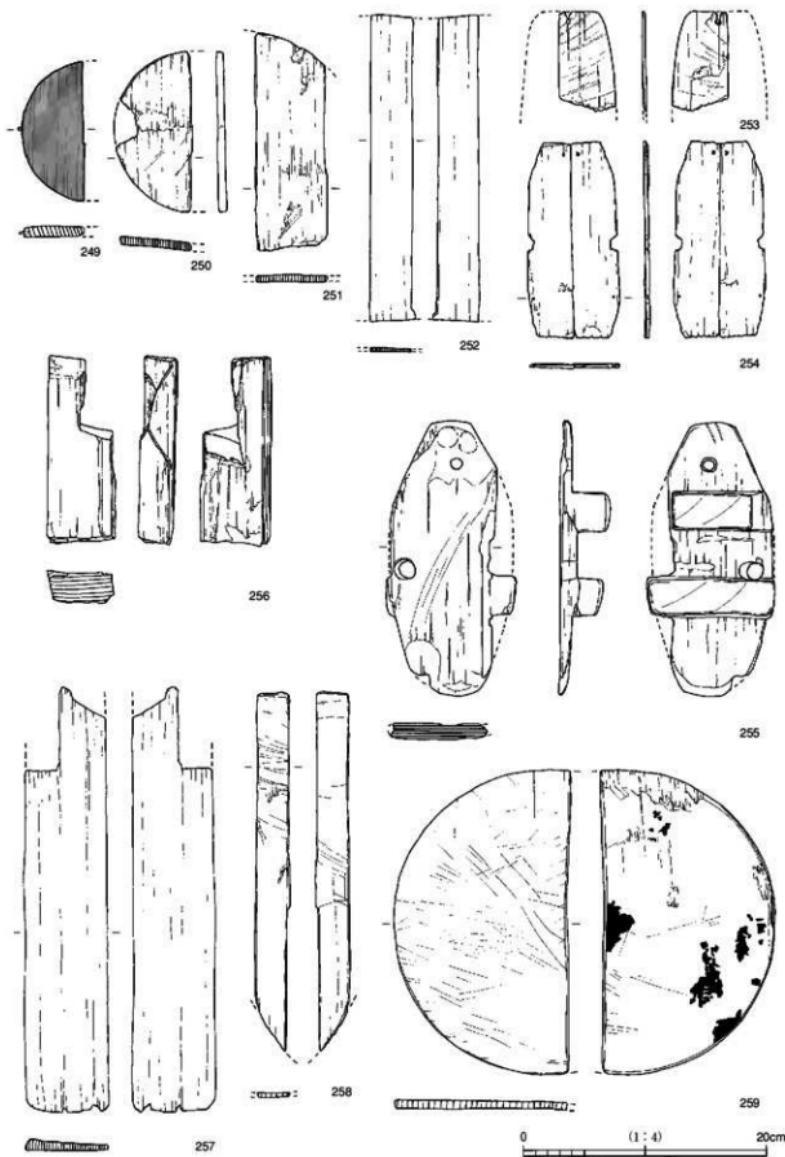
第43図 80溝出土木製品②



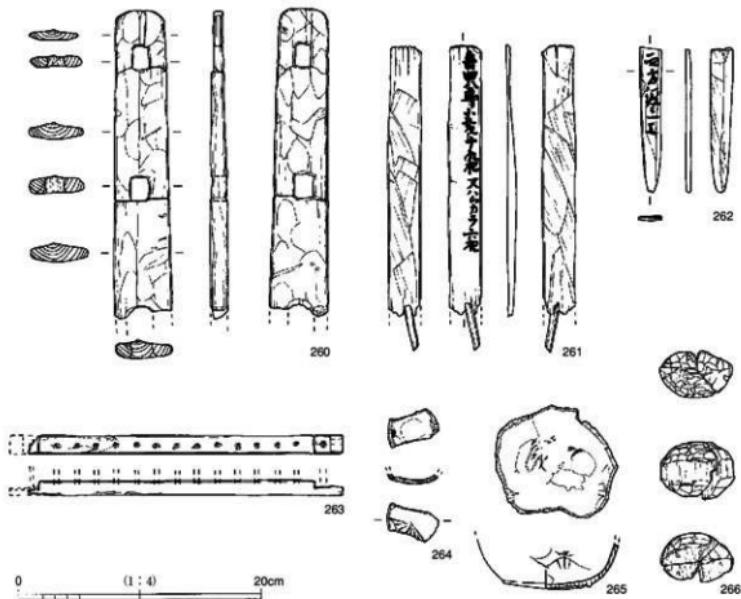
第44図 80溝出土木製品③〈上層～下層〉



第45図 80溝出土木製品④〈最下層〉



第46図 80溝出土木製品⑤〈最下層〉



第47図 80溝出土木製品⑥〈最下層〉

墨書きされた付札と「□田八郎小麦十九把 又ハ□（李カ）カラ六把」と墨書きされた借用に関する札と思われる木筒である。

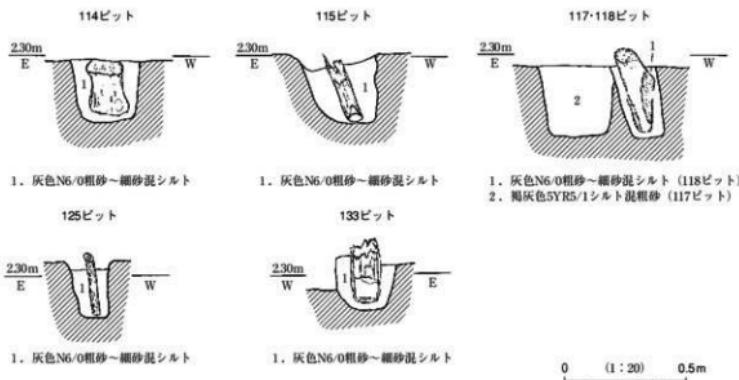
溝の中央近くの深部（第37図の断面を図示したあたり）近辺のみではあるが、遺物を上層、中層、下層、最下層と掘り分けることができた。特に下層、最下層から出土した遺物が多く、特に、主要な土師器皿の形については、最下層出土の資料とそれ以外の資料との間で差異が認められた。

上層部出土の土師器皿は、d類（153～156）が目につく。

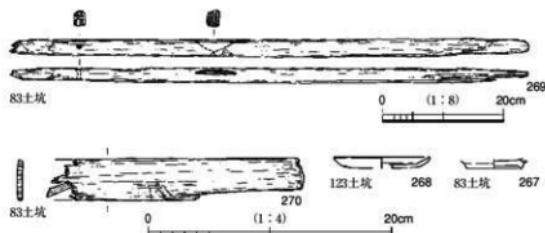
最下層に見られる土師器皿は、小型のe類（167～172）と大型のE類（173～177）とに分けたが、いずれも、底部が広く平たく、内弯ぎみに立ち上がる。口縁部はつまみあがり、尖り気味におさまる。また、F類は、底部が広く平たく、体部との境が明瞭であり、体部が斜めまっすぐに立ち上がるが、口縁端部は上方に延び、尖り気味におさまる。E類、F類共に口径10.5cm前後、器高2.3cm前後を測る。e類、E類は体部が内弯気味となるものが多いが、外反する器種もある。土師器皿以外では185の瓦質擂鉢や179～181の瓦器椀のように上層にても最下層にてもあまり形態に変化のない器種も認められる。

調査時において、うまく取り分けることはできなかったが、80溝には上層の第4面や60溝にもみられるD-1類（127～130）やF類（132～136、178）も上層から下層を中心に出土している。特にF類は80溝の各層から出土するようである。

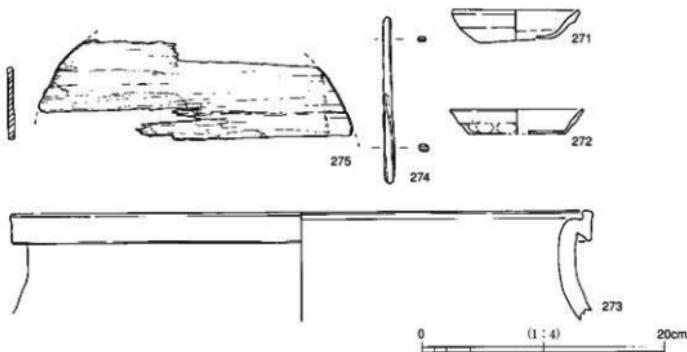
なお、80溝は、第5面の遺構としてとらえてはいるが、第4面の初期段階まで存在していたと考える方がよいと思われる。



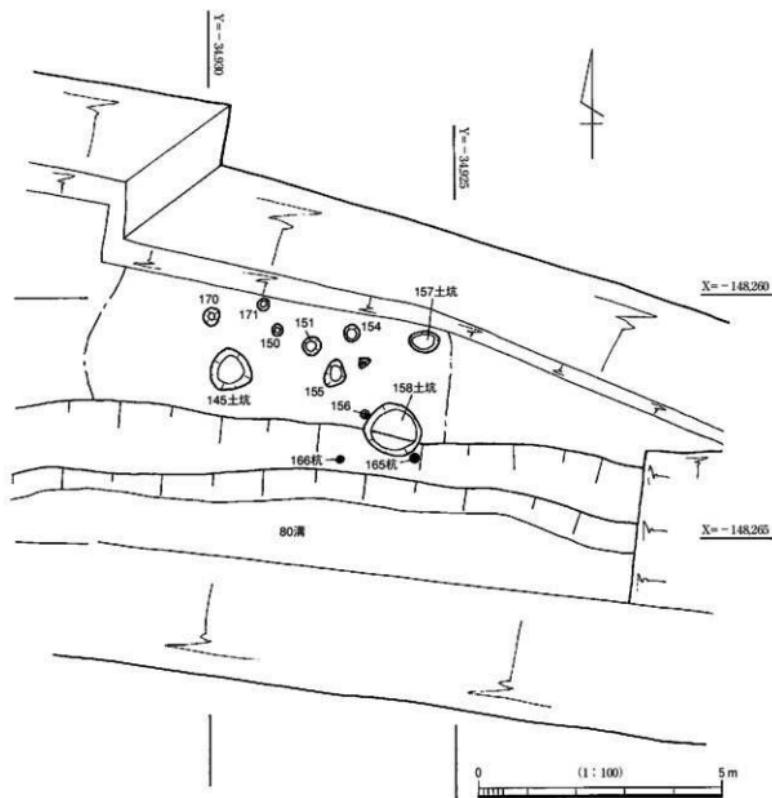
第48図 06-1-1 調査区第5面検出柱の残る柱穴



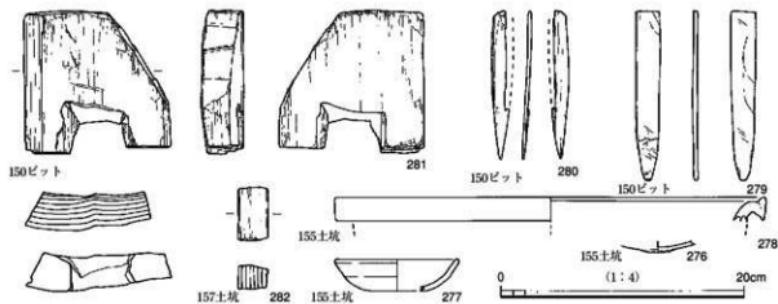
第49図 06-1-1 調査区第5面検出遺構出土遺物



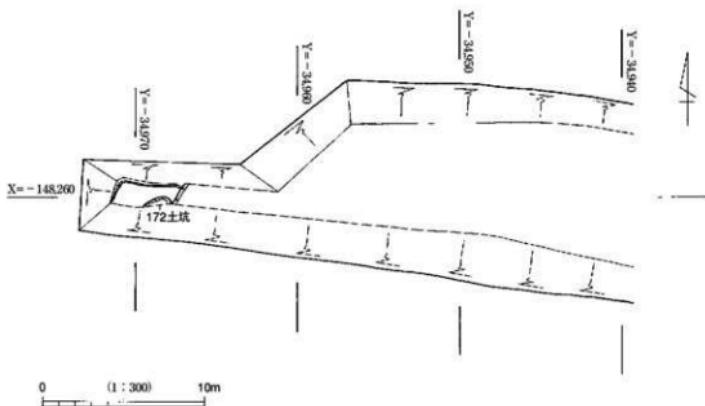
第50図 06-1-1 調査区第5層検出遺物



第51図 06-1-1調査区第5-2面全体図



第52図 06-1-1調査区第5-2面検出遺構出土遺物



第53図 06-1-2調査区全体図

理由としては、第4面の構造である60溝に80溝は切られてはいるが、同一面にて検出していること、断面を観察すると、第4面の段階で80溝が掘り込まれていることがわかるからである。

ただし、60溝〔導水施設〕、19埋桶〔貯水施設〕は80溝の範囲にすっぽり入るので、明らかに80溝が埋没した後に構築されたことは明白である。

80溝〔欄〕(第38図 図版9・21)

80溝の岸面は中心部に向かう途中で斜面に弱い段部を持つ。この段差部分の一部で欄が見つかっている。検出時にはかなり崩壊していたが、欄は土留に利用されたと思われる横板と、これを止める立杭として構成されたものが検出されている。

立杭の多くはこの80溝内に打ち込まれた形で検出している。護岸の様な施設があったかもしれない。

杭は竹製が多い。横板は、釘孔のあるもの218、292や、鋭く切断されているもの287、289、勝溝のあるもの219もあり、本来は、壁板など建築部材であったものの転用品と思われる。

14溝〔最下層〕(第13図)

14溝は先述のように、上面の第4面に統き、第3面で窪地となり、その役目を終えるが、溝もしくは流路としての機能は少なくともこの頃に有していた。当溝は、第4面の時よりさらに西に拡張していたか、もしくは西側によっていたと土層断面より観察できる。しかし、西端は近現代の搅乱により削平を受けており、本来どのような形状であったかは不明である。埋土は細かいラミナが顕著にみられる灰色5Y5/1シルト混粗砂ほかで構成されており、砂がやや多く、流れは第4面の溝よりは速かったものと思われる。遺物にはやはり、中世の遺物が出土するが、細片が多い。

83土坑(第49図)

調査区中央部北側に位置する。80溝と接している。北半分は調査区外である。円形の平面形であるとすれば、直径3.40m、深さ0.28mを測る。埋土には炭を多く含む灰オリーブ色5Y5/2シルト混粗砂が入る。遺物は瓦器細片と棒状木製品269が出土している。炭も、取り上げることはできなかったが、藁のような繊維質の炭化物と考えられた。

第5面検出のピットと杭（第48図 図版10・22）

ピットは調査区の東端部や西北部に多く見られた。大きさは直径0.20m前後のものが多く、この内いくつかに柱が残存していた。ただし、当調査区が狭いこともあり、掘立柱建物を復元するには至っていない。中には125ピットのように竹が検出された遺構もある。

また、80溝内を中心に杭が検出されている。これらの多くは直接地面に打ち込まれたようで、掘方をもたない。本書ではいくつかの断面を図化（第48図）した。

123ピット（第49図）

調査区の東端に位置する。122ピットに切られる。直径0.40m、深さ0.24mを測る。埋土に灰色N6/0砂混シルトが入る。遺物には図化した土師器皿268が出土している。

8. 第1調査区 第5'層と第5-2面（第50・51図 図版9・15）

調査区の西北部には、この部分だけ、直下にもう一面存在した。調査時には第5-2面と呼称し、その上位にある遺物を第5層中の遺物として取り上げたが、基本的に第5面以下の層は無遺物層であることから煩雑があるので、この部分的な層を「第5'層」と本報告では記述することにした。

第5-2面にも柱穴が多く見られた。T.P.2.3m前後を測る。第5'層と第5-2面検出の遺構の遺物ともに268がe類、271がE類、272がF類と80溝最下層と類似する遺物が多いようである。

また、当面検出の158土坑は80溝によって切られている。よって、これらの遺構は80溝の掘削より先行するか、もしくは80溝の拡張に伴い、当面のいくつかの遺構が削平を受けた可能性がある。

150ピット（第52図 図版19）

直径0.25m、深さ0.03mを測る。埋土に褐灰色7.5Y R5/1シルト混砂が入る。瓦器、土師器皿が出土している。

155土坑（第52図）

長さ0.60m、幅0.40m、深さ0.30mを測る。埋土に褐灰色7.5Y R5/1シルト混砂が入る。遺物には図化した土師器皿277や瓦器片が出土している。

9. 第2調査区 遺構面（第53図 図版10）

第2調査区はその大半が、近現代の搅乱で削平されていた。自然な堆積が観察されたのは西端の張り出した部分だけで、わずかに4m程度である。

当箇所はT.P.2.5m前後まで重機にて掘削し、盛土、搅乱を除去した。なお、東側の近世包含層と対応する第1層から第3層の一部も重機にて除去している。自然堆積土は7.5GY5/1緑灰色粗砂混シルト他で形成され、細かいラミナが見られる。0.2m程の厚みを持つ。東側の第1調査区の第4層に対応すると思われる。埋土中から土師器小皿片が若干出土した。遺構面は第1調査区の第5面と対応すると考えられる。面はT.P.2.2m程度でやや低い。これより下層は5GY5/1オリーブ灰色シルト混粗砂・礫層へと変わる。

172土坑（第53図 図版10）

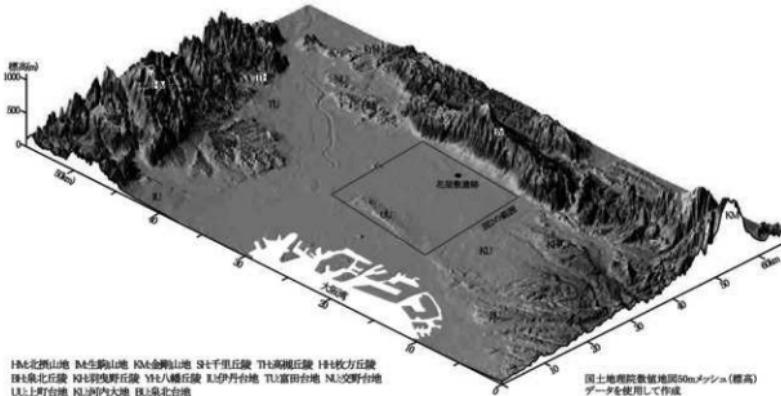
調査区南端に位置する。第2調査区で検出された唯一の遺構である。調査区外へ続く。半梢円形を呈する。長さ1.85m、幅0.50m以上、深さ0.65mを測る。埋土には灰色N6/0粗砂混シルトが入る。遺物は出土していない。

第4章 花屋敷遺跡06-1発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析

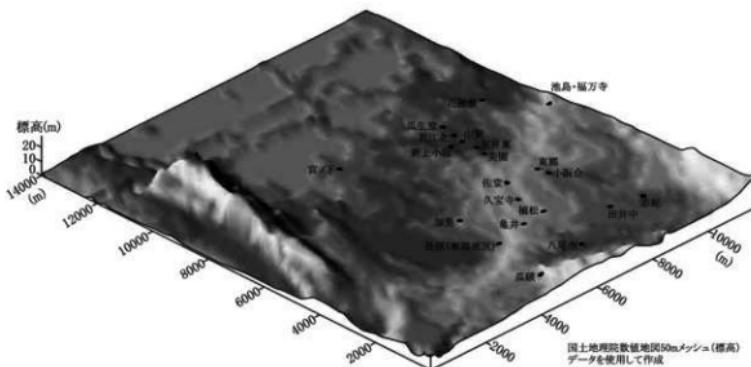
はじめに

花屋敷遺跡は、玉串川が形成した沖積リッジ上に立地する（第54図～第56図）。遺跡周辺では、おもに古墳時代以降の流路形成に伴い発達した帶状をなす微高地である沖積リッジとして認識される小阪合分流路、そこから分岐した萱振、若江分流路跡と、それらに挟まれた排水不良がちな後背湿地からなる地形配列が認められる（別所,1999）。

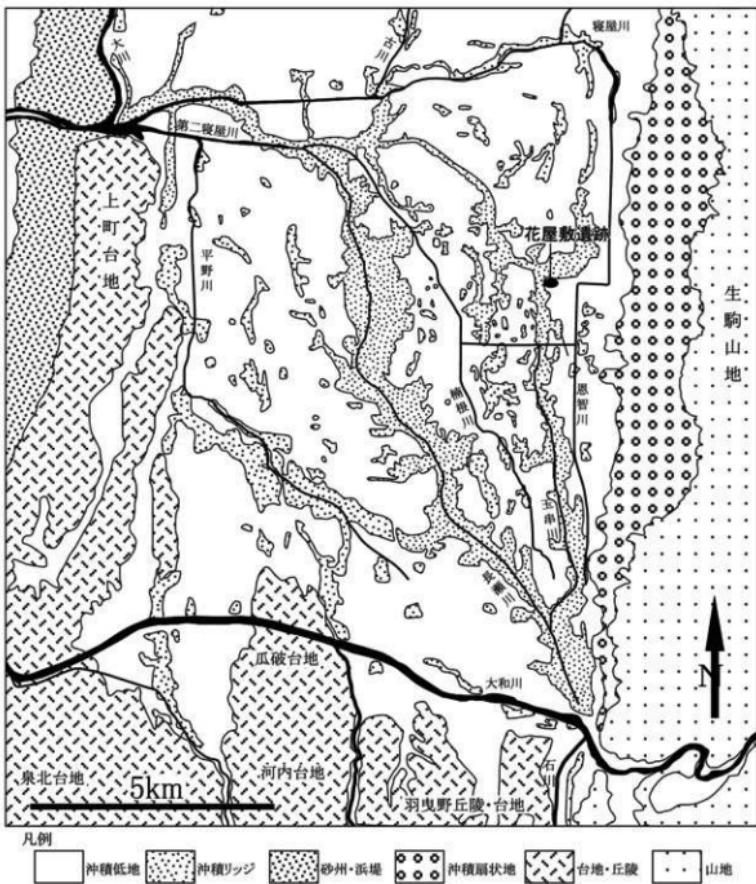
今回の分析では、14世紀代の屋敷区画溝（80溝）を埋積した堆積物について珪藻分析、花粉分析、植



第54図 花屋敷遺跡の位置



第55図 花屋敷遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡



第56図 河内平野とその周辺の地形（地形区分は、松田2001より作成）

物珪酸体分析を実施し、調査区およびその周辺の古環境復元を行うことが目的とされた。

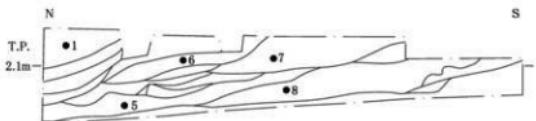
第1節 試料

試料は80溝の断面から採取された試料のうち、5点（試料番号1、5～8）である。第57図に試料採取断面図を示す。

第2節 分析方法

1. 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、



第57図 80溝分析試料採取位置 ※詳細は第37図参照のこと

珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料は、プレパラート2枚を限度に検鏡する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、渡辺（2005）、Witkowski et al.（2000）などを参照し、分類体系はRound Crawford & Mann（1990）に従った。

同定結果は、中心類（Centric diatoms）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縫溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms）と有縫溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms）に分けた。また、有縫溝類は、單縫溝類、双縫溝類、管縫溝類、翼管縫溝類、短縫溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に分ける。貧塩性種は、さらに塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境を解析するにあたって、真塩性種～中塩性種は小杉（1988）、貧塩性種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種をそれぞれ参考とする。珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表1に示す。

2. 花粉分析

約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的の処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、

表1 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による		
海水生態	海生性種	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真海生種(海水生種)	塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生態	中度汽水種(汽水生種)	塩分濃度30.0~0.5‰に生育する種
淡水生態	貧水性種(淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
海水生態の生態性区分		
塩分	貧水性種	少量の部分がいる方が最も生育する種
	真海生性種	少量の部分があつてこれらに良好に生育することができる種
	汽水生性種	少量の部分に生育することができない種
	広域性種	淡水~汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH17.0以下に生育し、特にpH4.5以下酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH17.0付近に生育し、pH17.0以下の領域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH17.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH17.0付近に生育し、pH17.0以上の領域で最も良く生育する種
Hustedt(1937-38)による	真アルカリ性種	pH17.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
	淡水	淡水域のみ生育する種
	真止水性種	止水域のみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、淡水域にも生育する種
Hustedt(1937-38)による	淡水不定性種	止水域にも淡水域にも普遍に生育する種
	好淡水性種	止水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真死水性種	死水域のみ生育する種
	主に海水域での指標種群(小杉, 1988)による	
外洋指標種群(A)		
内洋指標種群(B)	塩分濃度35~25%の内洋水で浮遊生活するもの	
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35~12%の海水場/海藻場に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12~0%の汽水域で海藻場に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
海水砂浜干潟指標種群(D1)	塩分濃度35~26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
汽水砂浜干潟指標種群(D2)	塩分濃度26~25‰の底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
海水泥濱干潟指標種群(E1)	30~12‰の泥濱の高い塩濃度など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
汽水泥濱干潟指標種群(E2)	塩分濃度12~2‰の汽水化した泥濱などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
淡水底泥指標群(F)	2‰以下の中性の水底の泥や、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼など淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することができる種群	
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20~2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
主に淡水域での指標種群(安藤, 1990)による		
上流域河川指標種群(I)		
中~下流域河川指標種群(O)	河川や流域の統合部に集中して出現することから上流域の環境を指標する可能性の大きい種群	
最下流域河川指標種群(L)		
湖沼浮遊生種群(M)	河川や流域の統合部に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼泥濱干潟地帯指標種群(N)	水深約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群	
沼沢湿生地帯指標種群(P)	湖沼における浮遊生種として沼沢地帯の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
沼沢湿生地帯付着生種群(Q)	沼より低い水位が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼底や更に水底の深い場所で優勢に出現する見られることがからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
高層原生指標種群(R)	木立や草木主体とした農耕や伐採が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域指標種群(S)	水田や畑など、多少の開墾があるところや構造物、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域での指標種群(伊藤・奥田, 1991)による		
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群	
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に隣接し、陸域にも水中にも生育する種群	
未区分陸生珪藻(RD)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾燥に対する適応性の不明なもの	

近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残流量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、数値を丸めて100単位とし、100個体以下については「<100」で表示する。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位の変化から植生の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

第3節 結果

1. 珪藻分析

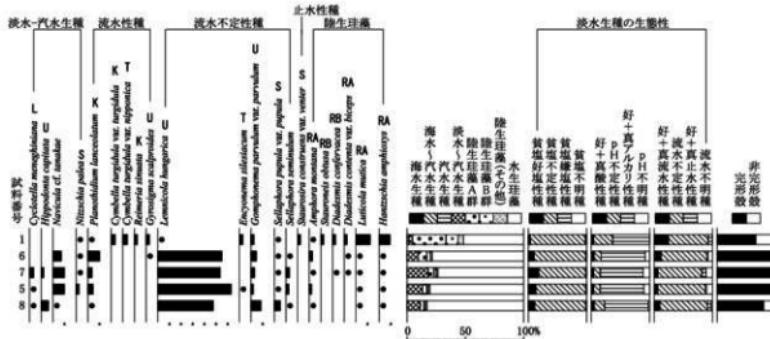
結果を表2、第58図に示す。何れの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、各試料とも約70%以上である。産出分類群数は、合計で42属117分類群である。本構造は、珪藻化石群集の特徴

表2 珪藻分析結果(1)

種類	塗分	生長性		環境指標種	試料番号				
		pH	泥水		1	5	6	7	8
Centric Diatoms (中心形珪藻類)									
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-lil	l-hi	N.U.	1	-	-	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Grun.)Simonsen var. <i>granulata</i>	Ogh-ind	al-lil	l-hi	M.U.	1	-	-	-	-
<i>Cyclotella stans</i> Hustede	Ogh-Meh	al-lil	ind	S.U.	-	-	-	-	1
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-lil	l-ph	L.S.	-	1	-	8	3
<i>Stephanodiscus hantzschii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-lil	l-hi	M.U.	-	-	-	4	4
<i>Stephanodiscus</i> spp.	Ogh-ind	unk	unk	-	-	-	-	2	-
Araphidines(無刺錐類)									
<i>Ctenophora pulchella</i> Galfy ex Kuetz.Williams & Round	Meh	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria capitata</i> (Grun.)B.Petersen	Ogh-ind	al-lil	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen var. <i>vaucheriae</i>	Ogh-ind	al-lil	l-ph	K.T	1	-	-	-	-
<i>Pseudotauvoria breviserrata</i> (Grun.)Williams & Round	Ogh-Meh	al-lil	l-ph	U	1	-	1	-	-
<i>Punctastratula literata</i> D.M.Williams & Round	Ogh-ind	al-lil	l-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg var. <i>construens</i>	Ogh-ind	al-lil	l-ph	T	3	1	-	2	1
<i>Staurosira construens</i> var. <i>blindis</i> (Ehren.)Hamilton	Ogh-ind	al-lil	l-ph	U	-	-	-	-	1
<i>Staurosira construens</i> var. <i>venter</i> (Ehren.)Kuwahima & Kob.	Ogh-ind	al-lil	l-ph	S	5	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-lil	ind	U	1	-	-	2	4
Monoraphid Pennate Diatoms(單版羽狀珪藻類)									
<i>Achnatherus subobtusus</i> Hustede var. <i>subobtusus</i>	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1	-	-	-	-
<i>Lemnella humarica</i> (Grunow)Round & Basson	Ogh-ind	al-lil	ind	U	2	154	120	120	100
<i>Planothidium delicatulum</i> (Kuetz.)Round et Bakhtiyarova	Meh	-	-	D1	2	-	-	-	-
<i>Planothidium laevigatum</i> (Breb.)Round et Bakhtiyarova	Ogh-ind	al-lil	l-ph	K.T	4	11	22	8	4
<i>Planothidium rotundatum</i> (Oestrup)Round et Bakhtiyarova	Ogh-ind	al-lil	l-ph	U	-	-	-	-	1
<i>Cocconeis sphaerophora</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-lil	l-ph	T	4	-	-	-	-
<i>Cocconeis lineata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-lil	l-ph	T	1	-	-	-	-
Biraphid Pennate Diatoms(双版羽状珪藻類)									
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-lil	ind	U	2	-	-	1	4
<i>Amphora strobliana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	R,A,U	4	5	6	4	1
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Van Goor var. <i>pediculus</i>	Ogh-ind	al-lil	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.)J.Pfister	Ogh-Meh	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Cymbella affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-lil	ind	T	1	-	-	-	1
<i>Cymbella perpusilla</i> A.Cleve	Ogh-hol	al-lil	ind	U	-	-	-	-	-
<i>Cymbella turpida</i> (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-lil	ind	T	2	-	-	-	1
<i>Cymbella turpida</i> Grunow var. <i>turpidula</i>	Ogh-ind	al-lil	l-ph	K.T	7	-	-	-	-
<i>Cymbella turpida</i> var. <i>nipponica</i> Skvortsov	Ogh-ind	al-lil	l-ph	T	8	-	-	-	-
<i>Cymbopleura nescioides</i> (Auerwald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	Q,U	-	-	-	-	-
<i>Encyonema mesostigma</i> (Khoblov)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	1	1
<i>Encyonema microcephala</i> (Grun.)Krammer	Ogh-ind	al-lil	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Encyonema siliceum</i> (Bleisch.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	6	1	-	-	-
<i>Placoneis elegans</i> (Greg.)E.J.Cox var. <i>elegans</i>	Ogh-ind	al-lil	ind	Q,U	3	-	-	-	1
<i>Placoneis elegans</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayashi	Ogh-ind	al-lil	l-ph	U	2	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-lil	l-ph	Q,U	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema affine</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-lil	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema agrestans</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-lil	ind	U	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg var. <i>gracile</i>	Ogh-ind	al-lil	l-ph	O,U	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema helveticae</i> Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema inaequale</i> (H.Kobayashi)H.Kobayashi	Ogh-ind	ind	l-ph	S	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema laevigatum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	5	5	10	7	18
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing var. <i>parvulum</i>	Ogh-ind	al-lil	ind	U	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema pusillum</i> (Grun.)Reichenbach & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-lil	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-lil	l-ph	T	-	1	-	-	2
<i>Reinmaria strobliana</i> (W.Greg.)Kociolek et Stoerner	Ogh-ind	ind	l-ph	K,T	5	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve var. <i>ovalis</i>	Ogh-ind	al-lil	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Geissleria obesa</i> (Oestrup)Lange-B. & Metzelini	Ogh-ind	al-lil	l-ph	K,T	2	-	-	-	-
<i>Hippodonta capitata</i> (Ehr.)Lange-B.,Metzelini et Witkowski	Ogh-Meh	al-lil	l-ph	U	-	-	-	5	13
<i>Narcicula cf. tanakae</i> Fukush.,Ts.Kobay. & Yoshii	Ogh-Meh	unk	unk	-	24	16	22	4	-
<i>Narcicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-lil	ind	U	-	1	3	2	1
<i>Narcicula amplioris</i> Lange-Bertalot et U.Rumrich	Ogh-ind	al-lil	l-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Narcicula cryptocapsule</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-lil	ind	U	-	-	-	-	1
<i>Narcicula kotschyana</i> Grunow	Ogh-ind	al-lil	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Narcicula pseudocryptocapsule</i> H.Kobayashi	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Narcicula pusilla</i> Cleve	Ogh-hol	al-lil	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Narcicula viridis</i> (Kuetz.)Ehrenberg var. <i>viridis</i>	Ogh-ind	al-lil	l-ph	K,U	1	-	-	-	-
<i>Narcicula viridis</i> var. <i>rotunda</i> Skv.	Ogh-ind	al-lil	l-ph	T	2	-	-	-	-
<i>Gyroisma procerum</i> Hustede	Ogh-ind	al-lil	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Gyroisma scapulae</i> (Rabb.)Cleve	Ogh-ind	al-lil	l-ph	U	6	-	1	-	-
<i>Craticula cupisidea</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-lil	ind	S	1	-	-	-	2
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg var. <i>anceps</i>	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Stauroneis borrichii</i> (Per.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	R	1	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicentera</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	-	1	1	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Tol. var. <i>vulgaris</i>	Ogh-ind	al-lil	ind	U	3	1	1	-	-
<i>Dinobryis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-lil	ind	R,B,S	5	-	-	1	-
<i>Dinobryis contenta</i> (Grun.)ex Van Heurck D.G.Mann	Ogh-ind	al-lil	ind	R,A,T	3	-	-	-	-
<i>Dinobryis contenta</i> var. <i>biceps</i> (Grun.)ex Grunow	Ogh-ind	al-lil	ind	R,A,T	5	-	2	1	-
<i>Laticula goeppertiae</i> (Bleisch.)D.G.Mann	Ogh-hol	al-lil	ind	S	-	-	1	-	-
<i>Laticula coerulea</i> (Hilse)D.G.Mann	Ogh-ind	al-lil	ind	R	1	-	-	-	-
<i>Laticula matica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-lil	ind	R,A,S	25	2	4	2	3
<i>Laticula parametica</i> (Brock)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-	-	-	-

表2 珪藻分析結果（2）

種類	生態性			環境指標種	試料番号				
	塩分	pH	流水		1	5	6	7	8
<i>Lenticula ventricosa</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	R1,U	1	-	-	-	-
<i>Nodium alpinum</i> Hustadt var. <i>alpinum</i>	Ogh-ind	ac-ll	ind	RA	1	-	1	-	-
<i>Nodium amplifolium</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-ll	l-ph	-	1	-	-	-	-
<i>Caloneis lagerstedtii</i> (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-ll	ind	S	2	-	-	-	-
<i>Caloneis leptotoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-	-	-	-
<i>Planaularia acrospheria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-ll	l-ph	O	-	-	-	-	1
<i>Planaularia appendiculata</i> (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	2	-	-	-	-
<i>Planaularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	R4,U	1	-	-	-	-
<i>Planaularia brevirostrata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-ll	ind	-	1	1	-	-	-
<i>Planaularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-ll	ind	O,U	-	1	-	3	4
<i>Planaularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-ph	O	-	1	-	-	-
<i>Planaularia obscura</i> Kruske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	2	-
<i>Planaularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-ll	ind	-	-	-	-	-	1
<i>Planaularia schoenfelderi</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	2	3	3	1
<i>Planaularia Schroederi</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Planaularia sylvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	2	-	1	1
<i>Planaularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-ll	ind	RB,S	2	3	4	3	3
<i>Planaularia subcapitata</i> var. <i>sauvastriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-ll	ind	O,U	1	2	-	1	1
<i>Sellaphora americana</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-ll	l-ph	-	-	-	1	-	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-ll	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky var. <i>pupula</i>	Ogh-ind	ind	ind	S	1	2	1	2	11
<i>Sellaphora pupula</i> var. <i>subcapitata</i> Hustadt	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	-	-	-
<i>Sellaphora seminulum</i> (Grun.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-ll	ind	S,RB	-	6	2	7	1
官能指標									
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	19	2	2	2	3
<i>Nitzschia brevisima</i> Grunow	Ogh-Meh	al-ll	ind	RB,U	3	-	-	-	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	6	1	3	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow var. <i>amphibia</i>	Ogh-ind	al-ll	ind	S	-	1	2	-	-
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow var. <i>frustulum</i>	Ogh-ind	l-ph	U	-	2	3	1	3	-
<i>Nitzschia heidenii</i> Meister	Ogh-ind	al-ll	ind	T	2	-	-	-	-
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1	-	2	-	-
<i>Nitzschia permixta</i> (Grun.)Peralgalo	Ogh-ind	al-ll	ind	RI,U	2	-	-	-	1
<i>Nitzschia terrestris</i> (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Tryblionella debilis</i> Arnott	Ogh-ind	al-ll	ind	RB,U	-	-	1	-	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.)Brebisson var. <i>adnata</i>	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	-	1	-	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Müller	Ogh-Meh	al-ll	ind	U	2	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Müller var. <i>gibba</i>	Ogh-ind	al-ll	ind	U	1	-	-	-	-
翼藻類指標									
<i>Suriirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ll	r-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Suriirella mitissima</i> Brebisson	Ogh-ind	al-ll	r-ph	U	-	1	-	-	-
短壁指標									
<i>Eucosma bilobaris</i> (Ehr.)Mills var. <i>bilobaris</i>	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	1	3	1	-
<i>Eucosma incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-ll	ind	O,U	-	-	-	-	1
<i>Eucosma indica</i> Grunow	Ogh-unik	unk	unk	-	-	-	-	-	1
<i>Eucosma monodes</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ll	l-ph	O	-	1	1	1	-
<i>Eucosma tschirchiana</i> Muell. var. <i>tschirchiana</i>	Ogh-ind	al-ll	unk	-	1	1	-	-	-
海水生種									
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					3	0	0	0	0
淡水生種					7	32	21	40	23
珪藻化石總數					194	212	197	184	187
					204	244	218	224	216
凡例									
H.R.:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	C.R.:流水に対する適応性							
Meh :汽水生種	al-bi :真アルカリ性種	l-bi :真正水性種							
Ogh-Meh :淡水～汽水生種	al-ll :好アルカリ性種	l-ph :好止水性種							
Ogh-hil :貧塩好塩性種	ind :pH不定性種	ind :流水不定性種							
Ogh-ind :貧塩不定性種	ac-ll :好酸性種	r-ph :好流水性種							
Ogh-hob :貧塩嫌塩性種	ac-bi :真鹼性種	r-bi :真流水性種							
Ogh-unk :貧塩不明種	unk :pH不明種	unk :流水不明種							
環境指標種群									
D1:海水砂質干潟指標種(小林, 1988)									
K:中下流河川指標種	L:最下流河川指標種	M:湖沼浮游性種							
N:湖沼前部湿地指標種	O:沼沢湿地付着種(以上は安藤, 1990)								
S:好汚泥性種	U:広域適応性種	T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1996)							
R:陸生種(RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)									



海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形粒産出率は全体基準、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基準として百分率で算出した。

いずれも100個体以上検出した試料について示す。なお、●は22%未満の産出を示す。種類名末尾の記号は下記の環境指標群を示す。

K: 中～下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種, T: 好汚濁性種, S: 好清水性種, RA: 広域適応性種, RB: B群, RI: 未区分, 水: 水中種

R: 陸生珪藻 (RA/A群, RB/B群, RI:未区分, 水: 水中種)

第58図 主要珪藻化石群集の層位分布

から試料番号1と6を境として2区分される。

試料番号6～8の4試料は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が全体の約80%を占める。これに次いで、淡水～汽水生種が15%前後産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。種類ごとにみると、流水不定性で好アルカリ性、汚濁耐性が広域適応性種のLemnionica hungaricaが優占する（本種は、Achnanthes属であったが、Round & Basson (1997)では、Lemnionica属に変更されている）。そのほか、塩分や塩類を含む水域に生育する淡水～汽水生種のNavicula cf. tanakae、流水性で中～下流性河川指標種群のPlanothidium lanceolatum、流水不定性で広域適応性種のGomphonema parvulum var. parvulum、流水不定性で好汚濁性種のSellaphora pupula var. pupula、Sellaphora seminulumなどがみられる。このうち、Navicula cf. tanakaeは、磯部温泉、雀の湯、余水排出口礁に大量に付着することが観察された種である（福島・小林・吉武,2002）。また、下位の試料番号8、7、5では最下流性河川指標種群のCyclotella meneghiniana、塩類の豊富な水域に生育するHippodonta capitataなども産出する。

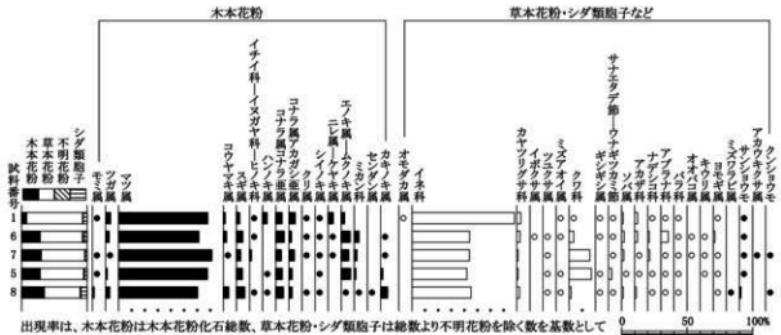
試料番号1は、陸生珪藻が増加し、全体のはば半数を占める。産出種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群のLuticola mutica、Hantzschia amphioxysが約10%産出し、好流水性のCymbella turgidula var. nipponica、Gyrosigma scalpoides、流水性で中～下流性河川指標種群のCymbella turgidula、Reimeria sinuata、流水不定性のGomphonema parvulum var. parvulum、流水不定性で好清水性種のEnchytonema silesiacumなどを伴う。

2. 花粉分析

結果を表3、第59図に示す。全体の構成比は、木本花粉に比べ、草本花粉の割合が高い。木本花粉は、マツ属（特に複複管束亞属）の割合が高く、木本花粉全体の60～70%を占める。その他、スギ属、コナラ属、アカガシ亞属、エノキ属～ムクノキ属などが少量検出される。一方草本花粉は、イネ科の割合が高く、アブランナ科やクワ科などもみられる。割合は少ないが、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウウ

表3 花粉分析結果

種類	試料番号				
	1	6	7	5	8
木本花粉					
マツノ属	-	1	-	-	-
モクノ属	2	-	1	3	8
ブナノ属	8	7	1	2	1
トクヒノ属	1	-	-	-	1
マツノ属(根管骨茎属)	-	-	-	-	-
マツノ属(根管骨茎属)	112	107	121	131	112
マツノ属(莢果不明)	27	45	30	31	31
コロヤマツノ属	3	6	-	-	10
スギノ属	5	12	7	11	15
イグサ科イヌガヤ科ヒノキ科	1	2	3	-	1
サンガヤノ属	-	1	-	2	1
トモリノ属	-	1	1	-	3
クスノ属	-	1	1	-	2
タケシダノ属アサガホノ属	-	3	3	7	5
カバノキノ属	-	1	-	3	2
ハソノキノ属	7	-	-	1	2
ブナノ属	1	2	2	1	-
ココナツノコナラノ属	10	16	9	12	14
ココナツノコガシノ属	10	5	9	6	6
クスノ属	1	1	1	-	1
シノイチロク	1	1	1	2	1
ニシキノケヤキノ属	8	1	1	-	-
エニキノムクノキノ属	5	17	12	17	22
ミズナ科	-	9	4	3	-
セダジンノ属	-	-	-	-	-
アラガガガノ属	-	1	-	-	-
ブナノ属	-	2	1	-	-
ノブリノ属	1	1	-	-	-
シナノキノ属	-	1	-	-	-
ウツギ科	-	2	2	-	-
ミズキノ属	-	1	-	-	-
ブナノ科	1	-	-	-	1
カハラノキノ属	-	1	1	4	13
エニキノキノ属	-	-	-	1	-
スカカバノ属	-	1	-	1	2
草本花粉					
オオダガ属	1	-	-	-	-
イヌ科	2069	374	309	347	307
カランギナ科	82	20	8	9	14
イヌクサ科	-	1	-	-	-
ツクサノ属	-	4	1	1	2
ミズアオイ属	3	4	-	2	3
クルクル科	2	30	111	141	10
ゼンギシノ属	1	7	-	2	1
サユエタデ科クサノキツカミ属	2	1	2	20	1
タケノコ属	2	2	-	-	-
ソリノ属	31	17	12	7	9
アザマ科	60	18	6	7	8
ナツマコ科	6	10	10	8	4
キボウヅク科	-	1	-	2	-
アンツナ科	3	48	3	2	5
ババ科	1	1	1	1	3
ソバノ属	1	-	-	-	-
マツリ科	-	8	-	-	-
フウノ属	-	-	1	-	-
キヨシダノ属	1	-	-	-	-
ブリノハサ属	-	-	1	-	-
セリ科	-	2	-	1	-
オオバコノ属	-	1	1	-	-
ゴヨウバコノ属	-	-	1	-	1
キトリノ属	-	-	1	1	3
スズウツクノ属	-	2	-	-	-
日本ギク属	8	11	1	2	4
オヤセギ属	-	2	-	-	-
キク属	11	2	-	1	1
タケボホネ科	1	-	-	-	2
その他花粉					
ヒメギノコノ属	1	1	-	-	-
ゼンマイノ属	8	1	1	1	3
イモモクノ属	2	-	-	-	-
ミズワビノ属	-	-	-	-	1
サンショウノ属	5	4	2	7	8
アラガガガノ属	-	-	1	-	-
地衣・蘭類孢子	147	32	18	26	54
その他の微細石					
シナノクサノ科	-	-	-	-	1
ケンシロウモ	-	-	1	-	1
合計					
木本花粉	294	248	212	239	239
草本花粉	2365	564	470	556	375
木本樹形	17	25	3	10	7
シダ類孢子	163	38	22	34	66
胞子(不明を除く)	2672	850	704	829	680



第59図 花粉化石群集の層位分布

モ等の水生植物や、ソバ属、キュウリ属といつ

た栽培植物もみられる。なお、試料番号1では、

他の試料に比べイネ科の割合が高い。

3. 植物珪酸体分析

結果を表4、第60図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。最下位にあたる試料番号8ではタケアキ科やイネ属などがわずかに認められるに過ぎない。この上位の試料番号1～5では、植物珪酸体含量が5,000-20,000個/gの間で推移するが、各種類の産出状況は類似する。すなわち、イネ属の产出が目立ち、ネササ節を含むタケアキ科、ヨシ属、コブナグサ属あるいはススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギアキ科などが認められる。

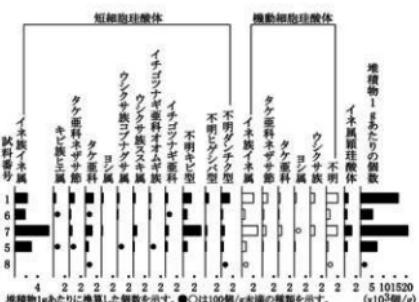
第4節 考察

1. 珪藻化石群集からみた古文環境

珪藻分析の結果、珪藻化石群集は表層に近い試料番号1と、試料番号6より下位とで異なることが明らかとなった。試料番号6～8では *Lemnicoidea hungarica* が優占するが、この種類は、池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育するのが一般的とされる。よって、溝内は、水生植物が生育するような、富栄養で

種類	(個/g)				
	1	5	6	7	8
イネ科植物珪酸体					
イネ属	2,000	2,000	1,800	6,000	-
キモチエニス属	400	100	100	-	-
タケアキ科ササ節	800	100	200	400	-
タケアキ科	1,400	500	100	1,200	100
ビニ属	300	-	-	200	-
ウシクサ族コブナグサ属	300	<100	100	-	-
ウシクサ族ススキ属	300	100	-	600	-
イギゴツナギアキ科オムギ属	200	<100	100	-	-
イギゴツナギアキ科	600	300	<100	500	-
イネ科	1,500	700	700	3,100	-
タケアキ科	600	100	-	300	-
不明	1,400	300	200	500	<100
イネ科植物珪酸体					
ウシクサ族	2,000	700	500	2,000	100
タケアキ科ササ節	900	100	200	600	-
タケアキ科	300	100	100	600	-
ビニ属	300	100	-	<100	-
ウシクサ族	700	-	-	600	-
不明	2,000	300	600	1,900	<100
珪藻類珪酸体					
イネ属	600	500	400	1,300	-
合計					
イネ科植物珪酸体	9,700	5,300	3,400	12,700	100
イネ科珪藻類珪酸体	5,200	1,600	1,000	6,700	100
珪藻類珪酸体	600	300	400	1,300	0
合計	15,500	7,200	5,200	20,700	200

合計は、100単位で丸める。○は100個/g未満の含量を示す。



第60図 植物珪酸体含量の層位分布

浅く（水深にして数十センチ以下）淀んだ水城であったと考えられる。花粉化石から、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ等の水生植物が生育していたと推定されるが、これらの生態性からみた水城環境とも調和的である。この傾向は、中世とされる瓜生堂遺跡47-2次調査の大溝1の珪藻化石群集（パリノ・サーヴェイ,2002）とも近似している。検出された溝の規模から上記のような環境は調和的ともいえるが、溝が集落内にあることから、富栄養化の原因と一つとして人為的な影響も示唆される。

一方、試料番号1をみると、水生珪藻（淡水生種の中から陸生珪藻をのぞいた種類）で多産する種類は認められない。一方、陸生珪藻も全体の半数近くを占めるが、個々の種において多産するものはない。このような群集は、「混合群集」と定義され、河川の氾濫などによって短期間に堆積した一過性の堆積物中に認められることが多い（堀内ほか,1996）。よって、試料番号1は、氾濫の影響で埋積したと思われる。

2. 調査区およびその周辺の古植生

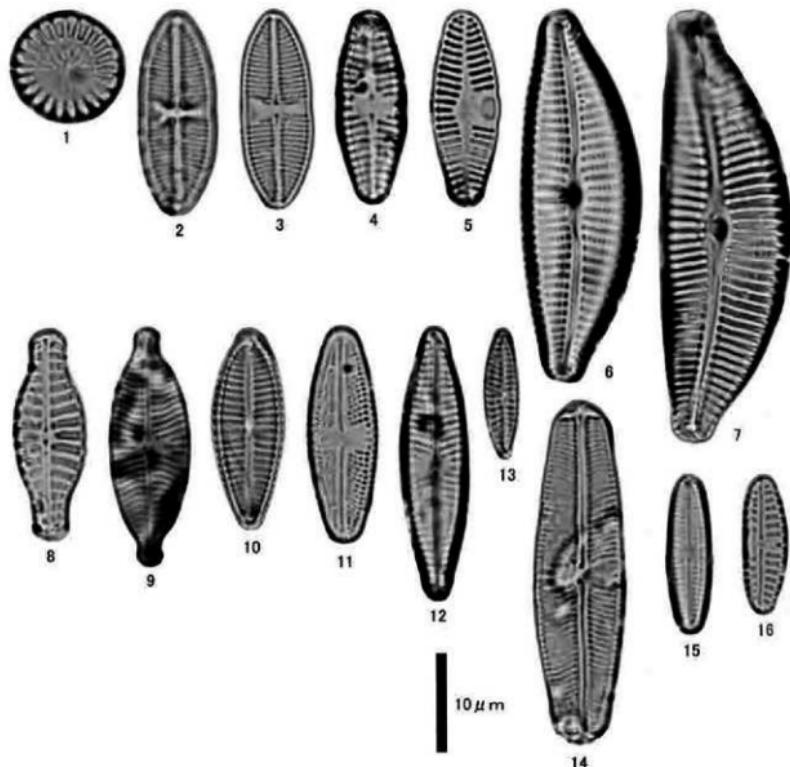
分析の結果、木本花粉ではマツ属の割合が顕著であった。また、草本花粉が全体に占める割合が高く、特にイネ科が多産する。このような傾向は、瓜生堂遺跡47-2次調査区の中世の大溝1の成果（パリノ・サーヴェイ株式会社,2002）とも近似している。草本類の花粉化石が多産することから、調査区周辺は、基本的にはイネ科、カヤツリグサ科、アザサ科、ヨモギ属などの草地であったと思われる。特にイネ科については、植物珪酸体の結果から、ネザサ節、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亞科などが含まれていたと思われる。比較的多かったアブラナ科には、アブラナをはじめ菜菜類、根菜類などの栽培種が多く存在し、クワ科の中には、アサ、クワなどの栽培種を含む。ただし、これらの分類群には人里や田畠に生育する雑草類（たとえばアブラナ科のナズナ、クワ科のクワクサやカナムグラ）も多数存在するため、一概に栽培由来とはいえない。アブラナ科やクワ科の栽培種を推定するためには、種実の検出が必要となる。花粉化石で、栽培植物由来と思われるものは、ソバ属とキュウリ属であり、植物珪酸体ではイネ属である。当該期の遺跡およびその周辺の発掘結果をふまえると、これらは周辺の耕作地に由来するとみられる。なお、イネは稲藁や稻殼も資材としては燃料材や住居構築材に利用される場合がある。そのため、イネ属の植物珪酸体は耕作地だけでなく、住居跡や集落内の遺構（溝や井戸など）にも含まれる。今回産出した珪酸体も、屋敷周辺に持ち込まれた稲藁や稻殼が溝の埋積する過程で混入した可能性が考えられる。

遺跡をとりまく山地斜面などの植生は、基本的にはマツの二次林もしくは草地であったことが花粉分析結果から推定される。当該期における河内平野やその周辺地域のこれまでの花粉分析結果をふまえると、中世においても自然状態に近い森林は少なく、低地は耕作地などを中心とした草地が卓越し、山地や丘陵斜面は二次林や草地が広がる植生景観であったと推測される。

引用文献

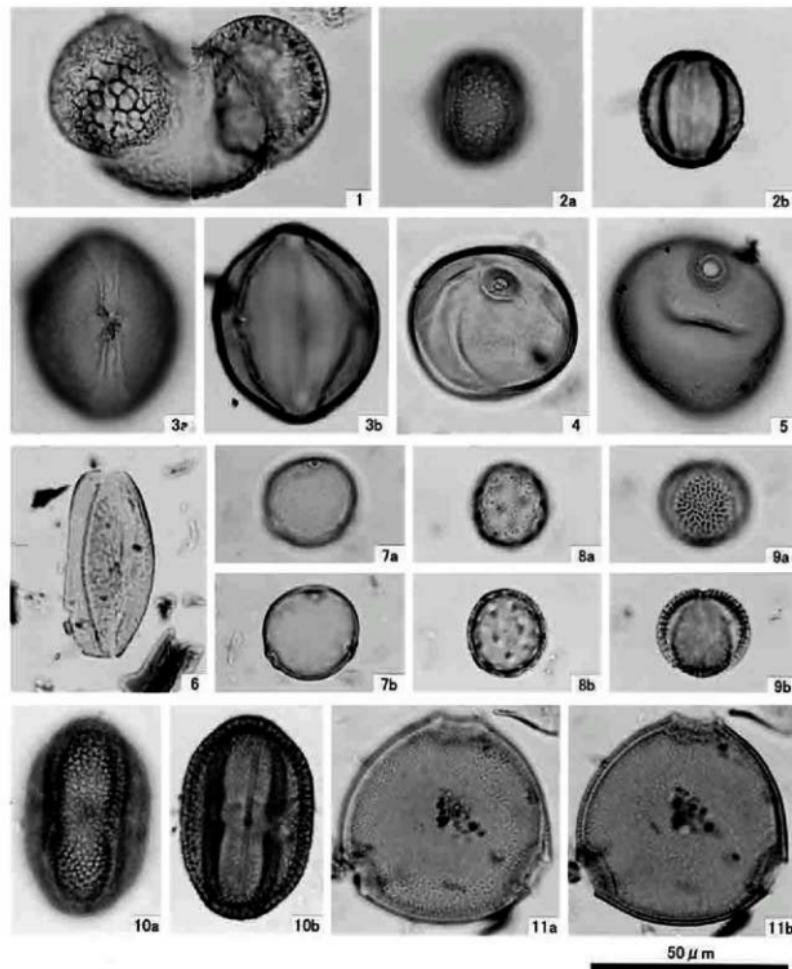
- 安藤 一男,1990.淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.
- 別所 秀高, 1999. 瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴.瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告書. (財) 東大阪市文化財協会, 225-232.

- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘. 1998. 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌. 埼玉県教育委員会. 527-600.
- 福島 博・小林 錦子・吉武 佐紀子. 2002. 温泉産新種珪藻, *Navicula tanakae* Fukush., Ts. Kobay. & Yoshit. nov. sp. について. 珪藻学会誌. 18, 13-21.
- 堀内 誠示・高橋 敦・橋本 真紀夫. 1996. 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について. -混合群集の認定と堆積環境の解釈-. 日本国文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集. 62-63.
- Hustedt, F. 1937-1939. Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiology, Supplement. 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 伊藤 良永・堀内 誠示. 1991. 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌. 6:23-45.
- 小杉 正人. 1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究. 27, 1-20.
- 近藤 錦三. 2004. 植物ケイ酸体研究. ベドロジスト. 48, 46-64.
- Krammer, K. 1992. PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986. Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag. 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988. Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae. Suriellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag. 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a. Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag. 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b. Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae. Kritische Ergänzungen zu *Navicula* (Lineolatae) und *Gomphonema*. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag. 248p.
- Lowe, R. L. 1974. Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop. U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 松田 順一郎. 2001. 河内平野沖積低地南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動. 第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会 -適応、開発から共生へ- 発表要旨集. 39-51.
- パリノ・サーウェイ. 2002. 瓜生堂遺跡47-2次調査に伴う自然科学分析. 瓜生堂遺跡46, 47-1・2次発掘調査報告書. 東大阪市教育委員会. 265-282.
- Round, F. E. & Basson, P. W. 1997. A new monoraphid diatom genus (Pogoneis) from Bahrain and transfer of previously described species *A. hungarica* and *A. taeniata* to new genera. Diatom Research 12, 71-81.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990. The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 渡辺 仁治. 2005. 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIp, pH耐性能. 内田老鶴園. 666p.



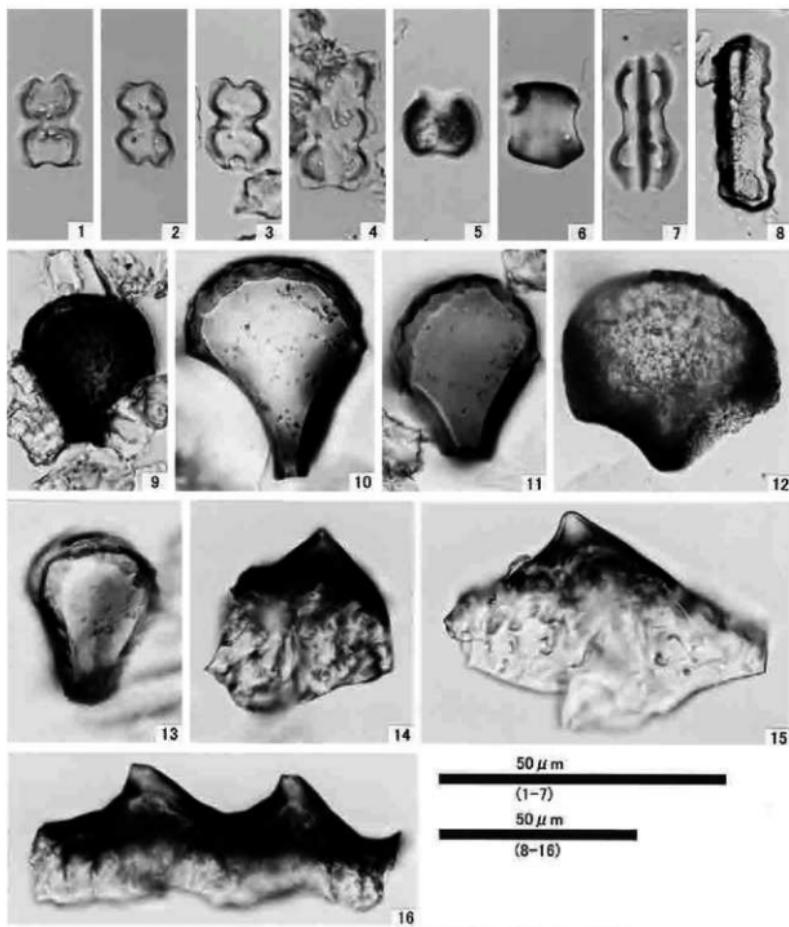
1. *Cyclotella meneghiniana* Kuetzing(試料番号8)
2. *Lemnicola hungarica* (Grunow)Round & Basson(試料番号8)
3. *Lemnicola hungarica* (Grunow)Round & Basson(試料番号8)
4. *Planothidium lanceolatum* (Breb.)Round et Bukhtiyarova(試料番号5)
5. *Planothidium lanceolatum* (Breb.)Round et Bukhtiyarova(試料番号5)
6. *Cymbella turgidula* Grunow(試料番号1)
7. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow(試料番号1)
8. *Hippodonta capitata* (Ehren.)Lange-B. Metzeltein et Witkowsky(試料番号8)
9. *Geissleria decussis* (Oestrup)Lange-B. Et Metzeltein(試料番号1)
10. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(試料番号8)
11. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(試料番号1)
12. *Navicula veneta* Kuetzing(試料番号5)
13. *Navicula* cf. *tanakae* Fukush., Ts.Kobay. & Yoshit. (試料番号5)
14. *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky(試料番号8)
15. *Sellaphora seminulum* (Grun.)D.G.Mann(試料番号5)
16. *Reimeria sinuata* (W.Greg.)Kociolek et Stoermer(試料番号1)

写真2 珪藻化石



1. マツ属複維管東亜属(試料番号6)
 2. コナラ亜属(試料番号8)
 3. カキノキ属(試料番号8)
 4. イネ科(試料番号1)
 5. イネ科(試料番号8)
 6. ミズアオイ属(試料番号6)
 7. クワ科(試料番号5)
 8. アカザ科(試料番号6)
 9. アブラナ科(試料番号6)
 10. ソバ属(試料番号5)
 11. キウリ属(試料番号5)

写真3 花粉化石



1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号1)
 3. イネ属短細胞珪酸体(試料番号7)
 5. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号1)
 7. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号1)
 9. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1)
 11. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号5)
 13. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号7)
 15. イネ属穎珪酸体(試料番号5)
 2. イネ属短細胞珪酸体(試料番号5)
 4. ヒコ属短細胞珪酸体(試料番号1)
 6. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号7)
 8. オオムギ族短細胞珪酸体(試料番号1)
 10. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号7)
 12. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号1)
 14. イネ属穎珪酸体(試料番号1)
 16. イネ属穎珪酸体(試料番号7)

写真4 植物珪酸体

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷

今回、新たに見つかった花屋敷遺跡では主に中世の遺構、遺物を中心とする調査成果を得ることができた。以下に調査した層、遺構面の順に、その成果をまとめることにしたい。

調査した面は調査区域の一部だけに存在する面も含め、合計7面である。第1面および第2面は近世以降の耕作面であることがわかった。第3面では溝、井戸、窪地が検出された。3本の溝は東西方向に走り、窪地は南北に長い。これらの遺構の下面にも溝が存在し、ほぼ同じ位置、方向に溝が連続と踏襲されていたことがわかった。

これらの溝や窪地から出土する遺物は下位の層から発見されるものと同様のものが多い。これは遺構が砂で一挙に埋まつた形跡が認められることから、洪水などにより周辺の下位の層や面を破壊し、古い遺物が混入したものと考えられる。よって当該期と思われる遺物は少なく、遺構の時期を明確にすることは難しいが、16世紀以降に耕作関係に使用された用水路として機能した溝群であろうと考えられる。

なお、井戸（16井戸）は出土した遺物から18世紀以降の遺構であることがわかり、当面検出のほかの遺構とは時期が異なり新しい。本来、もう少し上の面から切り込んで形成された遺構であろうが、耕作面を構築する際にこの面は削平され、第3面ほかの古い時期の遺構と共に検出されることになったのであろう。

このように、第1面から第3面までは耕作に使用された面であることから、その基盤となる層も、おのずと耕作面を形成するために構築された層と考えられる。

第4面以下はこれら上面の様相とはかなり異なる。中世の遺構面である。第4面では多くのピット、土坑を検出したが、当面で特筆すべきは、竹管を利用した導水施設（60溝）と、それに取り付く結桶を埋桶として使用した貯水施設（19埋桶）および土師器皿が集積して出土した長方形の土坑（20土坑）をあげることができる。

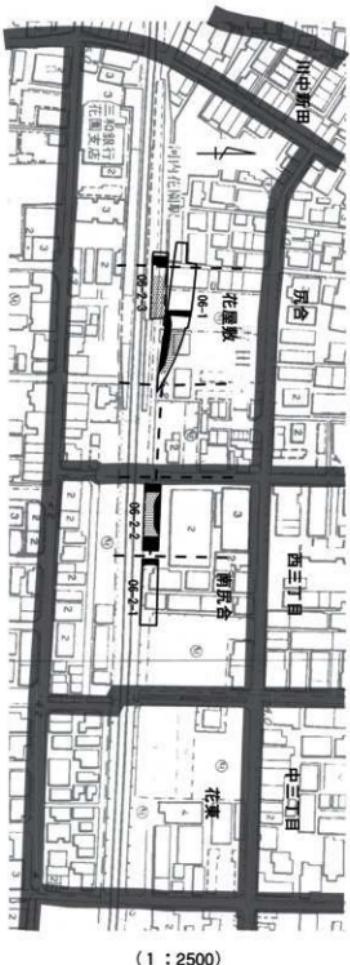
60溝は西端の14溝から水を引いていたと考えられ、東側にほぼ直ぐ約18m延び、第1調査区東端近くにある水を貯水する桶（19埋桶）に取り付く。溝には竹筒が埋められており、これが、14溝の水を桶へ流し込む導水管となっていた。中世ではこのような結桶と竹管を使用した導水施設、貯水施設は珍しい。これらの施設が構築される前までは、いずれも同一方向に、開口した幅の広い溝（第3面の15溝、第4面、第5面の80溝）が存在した。

また、20土坑は19埋桶の東に接するように位置する。平面形が長方形の土坑内に土師器皿が集積し、周りを柱列が取り囲む施設である。19埋桶を15世紀前半代とすると、同時期か、やや後出の遺構であろうが、いずれも特異な遺構であると考えれば、同時期に存在した可能性の方が高いのではないかとも思える。祭祀・宗教的な施設であろうか。類例を求めるところである。

ほかに、当面では多数のピットや残存する柱痕もいくつかあることから、掘立柱建物が存在したであろうと思われるが、なにぶん調査区が狭く、搅乱で削平を受ける箇所が多かったので、建物を復元することはできなかった。総じて第4面は15世紀代の遺構面ということができよう。

第4-2面は第1調査区の東端に部分的に存在するだけで、調査区外へ広がる。上面と同じく、多数

網目部は中世の遺構集中地、
黒塗部分は溝を表す。
破線部は区画想定ラインを表す。



第61図 調査区周辺の字名と
主要遺構模式図

のピットや柱痕が存在するので、やはり、掘立柱建物の存在が想定できる。この内の87土坑は長軸0.74m、短軸0.54m、の隅丸方形の平面形を呈し、底に根石を敷き、その上に4枚に分かれたコウヤマキを用いた礎板がのり、その上に柱材を据えたであろう、やや特異な遺構である。上部の遺構である20土坑の下部近くにて検出している。以上のことから考え、この遺構も宗教行為に関する施設の跡であるのかもしれない。

第5面は今回の調査において中心となる遺構面である。第1調査区南側にある80溝が当面で検出した遺構から出土した遺物の大半を占める。第3面にて検出した15溝と重複するように80溝も東西方向に走る。南北方向に走る14溝と西端で取次ぎ「L」字状の平面形となるようであり、恐らくは、掘立柱建物を取り囲むものと思われる。中世の集落遺跡にてしばしば認められる居住空間（屋敷地）を区画する溝であろう。

また、80溝からは多量の木製品が出土した。織機、下駄、草履などの履物、漆器椀、馬骨などが出土しているが、特に目を引くものとしては、木簡が見つかったことであろう。「西方源三上」と墨書きされた付札と「□田八郎小麦十九把 又ハ□（芋カ）カラ六把」と墨書きされた札の2点である。いずれも物品の取引に関係する札であると思われる。

第5面においても、上述の理由により、やはり復元はできなかったが、掘立柱建物が存在したであろうと思われる。

第5-2面は第1調査区の中央やや西よりの地域だけに存在する。当面からもピットが多く検出している。

第2調査区の遺構面は西端に4mだけ存在するだけで、ほかの場所は搅乱により、2m以上の深さまで破壊されていた。遺構は、第1調査区の第5面相当の面にて土坑172が1基見つかっただけである。

第1調査区、第2調査区とともに、第5面（部

分的には第5 - 2面) 相当以下の層には遺物はみられなかった。遺物よりみると、当地に開発の手が下されたのは13世紀の後半から遅くとも14世紀初頭であろうが、古墳時代から古代にかけての遺物も散見されることから、周辺にはその当時の遺構があった可能性も考えられる。

第2節 出土した木簡と花屋敷

今回の調査では、多くの遺物の出土を見たが、2点の木簡が出土している。木簡はいずれも第1調査区の第5面の80溝から出土している。

261はヒノキ材、残長20.0cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmを測る。上部は切断され、下部は欠損している。上端の一部が縦に裂けている。表裏ともに加工されている。積文と読み下しは「□田八郎小麦十九把 又ハウ(学力)幹六把」となろうか。文面から察するに、小麦もしくは芋に対し購入か借用することに関する木簡のようである。一字目は「悟」や「吾」もしくは「吉」とも読めそうであった。もし「吉」の字であれば人名に当地の字名が現れることになるが、板は縦に裂けており、文字は不明瞭である。「ウ」は「芋」の略字であると解した。

芋(からむし)はイラクサ科多年草の植物であり、茎(幹)は繊維の材料の一種となる。また、茎から製した繊維や布を指す場合がある。そもそも、布の原材料として購入か借用されていたとなれば、同じく80溝から出土している織機類との関係を考えあわせ想像するに、屋敷の住人に布織関係に従事する者の存在を想起させる。

もう一点の262はスギ材、残長7.0cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測り、下端部を尖り氣味に加工する。上端部は切目をつけて折り取る。表裏面に加工痕がある。積文と読み下しは「西方源三上」である。上部は切り取られ、さらに語句は続いている可能性も捨てきれないが、文章としては完結しているものと思われる。80溝の最下層の比較的上方、下層との境目付近で出土した。134の土師器皿が近接して出土している。

今谷明氏や弓倉弘年氏の研究によると西方氏は畠山氏の一族であり、嘉吉の変(1399年)以降に畠山氏に重用される。中でもよく知られるのは、西方国賢である。八尾立石という所の領主であったようである。河内国守護畠山持国に近侍し、河内国守護代に抜擢されるが、畠山氏の家督争いの渦中、享徳3(1454)年京都にて切腹して果てる。国賢の子孫には国信、国度と続いた。

さて、当地と西方氏は如何な関係があるのであろうか。残念ながら「源三」という名前は文献には現われず、どのような人物であったかは不明である。それでは、この木簡がどのような経緯で溝に埋まることになったのであろうか。もし、木簡が荷札などの付札としたなら、「西方源三」のものとへ、別の場所からもたらされてから廃棄されたものか、それとも、この地から「西方源三」方へもたらされるはずのものであったのか。上を奉と同義とするなら、「西方源三」へ差し上げた、と考えるのが妥当ではなかろうか。あくまで推測の域をでないが、先方から「西方源三」へ差し出された物品に付隨していた付札が役目を終えた後に、送り届けられた先にて廃棄され、80溝に投棄されるにいたった。と考えてはどうであろうか。

以上のように出土した木簡の類推から、当地が河内畠山氏の一族である西方氏に関係のある集落とすれば、第1調査地第5面の区画された屋敷地が13世紀後半に始まって、同第4面が15世紀後半までには終わり、以降は耕作地へと転換していることは何を示すのであろうか。15世紀中頃といえば国賢が非業の死を遂げた時期であり、以後、守護代の地位も遊佐氏に譲ることになる。また、遺跡の西南1.6km辺

りに位置したであろう若江城も文明9（1477）年には畠山氏関係における守護所としての役割を終える。家臣である西方氏もその動きに合わせて当地を離れたのであろうか。ただし、畠山氏一族において西方氏を名乗るのが国賛からであるとなれば、それ以前の開発主体や当の「源三」は何者であろうか。

もっともこのような小さな本簡の一片にて当地の歴史を語るのは至難の技であり、文献資料をかい摘んであてはめ、決め付けることは、慎まねばならない。しかし、当地の歴史、文化の解明はまだ始まったばかりである。今後の課題の一つとして取り上げられ、歴史の事実を紐解く一助になれば幸いである。

さて、「花屋敷」という名で当地が呼び慣わされるようになったのは何時の時代であろうか。足利義満の幕府「花御所」、御所の「花御殿」など、古にて居宅に冠される「花」の文字は、時代に権勢を振るった人々の雅な住まいを指すことがある。今回の発掘の成果は、はからずしも、このような思いを想起させる。もっとも、「花屋敷」は字名として残るのみで、具体的に文献資料としてはあらわれず、本考古資料においても、もっぱら確証を得ているわけではない。わずかに上述の「西方云々」の本簡が示唆してくれるかも知れぬ、という程度である。

この調査と同じく、隣接地にて「花屋敷遺跡06-2」の調査が行われた（第61図）が、字「花屋敷」にあたる当地の遺物の出土が群を抜いている。特に、100mほど東に離れた字名の異なる06-2-1調査区（字「南尻合」）では遺構や遺物の量は極端に減る。集落の東端となるようである。集落の中世の面にて出土する遺物の傾向をみると、圧倒的に土師器皿の出土が多いことがわかる。瓦器も多い。また陶磁器では常滑焼と備前焼、東播系練鉢の出土がめだつ。瓦質の火鉢・羽釜や瓦の出土も少なくない。先述の織機類や飴滓の出土もある。当調査区周辺がこの集落の中心となる場所の一つといえるかもしれない。いずれにせよ、検出された中世集落跡が、「花屋敷」として結びつくかは、捨て置けぬ、かつ興味深い話ではあるが、今後も検討をする。

それでは、集落の東端に対して西端はどこであろうか。当調査区の西側に当時、恐らく傍を玉串川が流れていたであろうことから、集落の西限をその近隣に求めることができるであろう。南北方向の境界は今後の調査にゆだねなければならないが、集落の東西の境がおぼろげながら見えるようである。

また、旧字名に反映される条里地割と比較すると、地割の境に06-2-2調査区の20溝が、南北のちょうど真中の位置に80溝、06-2-1調査区の14溝の位置と重なる。集落の区画が条里地割を意識し、活用もしくは規制されていることが窺える。

今回の調査では、当地において、近代以降の宅地が成立する以前、はるか昔の室町時代にも同様に居住地として使用され、生活が営まれていたことを知ることができた。

今後、この地は再び開発により生まれ変わり、未来に向けた、新しい雅な住まい、生活空間を構築していくことになろうが、まさに、时空の流れの中の榮枯盛衰の妙味を暗示してくれた今回の調査であった、と考えれば実に興味深く、奇縁を感じる次第である。

注) 東大阪市遺跡保護調査会1973「吉田条里小字図」「池島町の条里遺構－調査概要－」をもとに作成した。

【参考文献】

- 日本大辞典刊行会1973『日本国語大辞典』小学館
今谷明1986『守護領国支配機構』法政大学出版局
弓倉弘年2006『中世後期畿内近国守護の研究』清文堂
小谷利明2003『畿内戦国期守護と地域社会』清文堂
東大阪市遺跡保護調査会1973『池島町の条里遺構－調査概要－』

遺物 觀察表

①土器・陶磁器・土製品類 国版の太字はカタログ版。 () は復元。 [] は残高・長・幅。括弧は底・高台。径・Uは5%以下。

遺物番号	種類	器種	口径 [cm]	高さ [cm]	残存率 [%]	出土 遺構・層	調査・外観	主な外色の色調	備考
2 11 11-1	ミチニア 瓦質剥離	(3.2) [3.8] 20	第2層	内外面横方向のナデ。	灰白色SY7/1				
3 11 11-1	土器器	3.0 2.35 99	第2層	ナデ。	灰白色10YR8/1				
4 11 11-1	瓦質剥離	(12.0) [2.3] U5	第2層	回転ナデ。	灰褐色N7/0				
5 11 2-1	青磁碗	(15.0) [4.1] U5	第2層	口縁～全体全面施釉。	明オーラー色2.5GY7/1	難見系東D-II類			
6 11 2-1	青磁碗	6.2 [2.2] 25	第2層	全面施釉。内面へラッパ目。削りだし高台。高台内部無釉。 足付の繊細な一部剥離り取る。 見込みに斜面模様花文。外側に幅の狭い横条状を片割れり。 足部は、高台内部と同様に内面を打たせ焼。	灰オーラー色10Y4/2	難見系東D類か。			
7 11 2-1	青花罐	(7.0) [1.0] 5	第2層	回転ナデ。高台部分の一部無釉。外側削離。	明オーラー色2.5GY8/1				
8 11 11-1	把手	— [5.2] U5	第2層	全体にナラ。	にぶい褐色7.5YR7/4				
10 11	土器器	(21.0) [7.4] 5	第2層	外表面施釉状工具により上から削り落す。一部に握り方向の粗い擦りナデ。	灰白色3Y8/1				
11 11 2-1	巣戸枕 折腰式	(19.8) [3.3] U5	第2層	回転ナデ。高台部分の一部無釉。外側削離。 脚部(下部)に施釉文SY5/3)を口縁部、体部上部に施釉。 内面使用による摩擦。	淡黄色2.5YB/3	難見系。			
12 14	土器器	(7.0) [1.9] 20	14廻地	口縁部のみ横ナデ。窓や穴の粗い。 ナラで削り上げるが、捺圧底部に残る。	灰黄色2.5Y6/2				
13 14 2-1	青磁碗	4.8 [4.8] 40	14廻地	全面施釉。内面へラッパ目。削りだし高台。高台内部無釉。 足付は、一部施釉。	灰オーラー色10Y5/2	難見系東B-I類			
14 14	須恵器縄目	30.6 [4.6] U5	14廻地	外面上部に斜面模様花文を刻む。	灰褐色N5/0	B-II			
15 14	備前焼	(32.0) [4.0] U5	14廻地	回転ナデ。ナラ目(4cm)。	灰褐色SYR8/2	IV-A			
18 15	土器器	8.4 2.9 100	15廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	d-3類			
19 15	土器器	7.8 1.7 85	15廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部ナデ。 ロム～内面底部模様ナデ。	にぶい褐色7.5YR7/4	d-3類			
20 15	土器器	9.4 1.6 70	15廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部ナデ。	にぶい黄褐色2.5YR7/4	D-3類			
21 15 11-2	土器器	(9.4) 2.2 40	15廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部ナデ。	灰黄色10Y7/2	D-I類。			
22 15 11-2	土器器	14.5 3.1 75	15廻	回転ナデ。ロム～体部全面施釉。	灰白色SY7/1	京都復模倣。			
23 15 2-1	青磁碗	(16.0) [3.9] U5	15廻	回転ナデ。内面方向のナデ。ナラ目(3cm)。	灰褐色N5/1	難見系東D-I類			
24 15	備前焼縄目	(27.0) [6.0] U5	15廻	外表面の一部に盛付。	褐色2.5YR6/6	IV-A			
26 15	瓦質縄目	(40.0) [4.5] U5	15廻	横ナデ。外表面へカッペ。	褐色N6/0				
26 15	瓦質大鉢	(35.0) [6.4] U5	15廻	内面横方向のナデ。外表面口縁部全面施釉。	灰白色2.5SYB/1	浅鉢皿			
27 16	須恵器縄目	(29.5) [4.5] U5	17廻	回転ナデ。ロム～体部全面施釉。	褐色N6/0	難見系田-2			
28 17 14-4	青磁碗	(6.0) [3.5] 15	16井戸	全面施釉。ハケナレ。削りだし窓。窓付の輪は削り取る。	明オーラー色4.5GY7/1				
31 19 11-5	土器器	7.9 1.6 100	第3層	外表面底部分部、ロム～体部模様ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	a類。			
32 19	土器器	(7.9) 1.4 40	第3層	内面底部分部、外表面底部分部押さえ後ナデ。	にぶい褐色7.5YR7/4	b類			
33 19	土器器	7.9 1.3 100	第3層	内面底部分部、外表面底部分部押さえ後ナデ。	灰白色SY7/2	c類			
34 19	土器器	7.8 1.6 100	第3層	内面底部分部、外表面指さし後底部分部。	灰黄色2.5Y7/2	d-3類			
35 19	土器器	(9.6) [2.1] 25	第3層	内面底部分部、外表面指さし後体～底部相手ナデ。 ロム～内面底部模様ナデ。	淡黄色2.5Y7/3	D-3類			
36 19 11-5	瓦器	10.8 2.8 90	第3層	外表面底部分部、内面底部分部。ロム～内面底部上部横ナデ。	褐色N4/0	と乳頭IV-3～4			
37 19 2-1	青磁碗	(15.0) [2.5] 5	第3層	回転ナデ。ロム～体部模様ナデ。	灰褐色10Y5/1	難見系東D-II類			
38 19 2-1	青磁碗	(5.0) [3.8] 10	第3層	全面施釉。内面へラッパ目。削りだし窓。	明オーラー色10Y3/2	難見系東A-I類			
39 19 11-5	須恵器	(45.0) [5.5] U5	第3層	回転ナデ。全体に盛付の小窓。	にぶい赤褐色2.5GY5/4	KA1期			
40 19 11-5	瓦質縄目	(30.0) [6.0] U5	第3層	外表面横ナデ。ナラ目(4.5cm)。	灰褐色2.5Y6/1	口部			
44 25	土器器	(8.4) 1.7 30	19廻地	内面底部分部、外表面指さし後体模様ナデ。	灰白色SY7/2	d-4類			
45 25	土器器	(14.0) [2.7] 60	19廻地	内面底部分部、外表面指さし後体模様ナデ。	灰褐色2.5Y5/2	京都復模倣。			
46 25 12-2	瓦質剥離	(22.3) [8.0] U5	19廻地	体部内面横方向のナデ。ロム～底部模様ナデ。	淡黄色2.5Y6/2	河内型			
49 25	土器器	7.7 1.1 99	60廻	ロム～底部模様ナデ。内面へ外表面指さし後体模様。	灰褐色2.5Y6/2	d-1類 灯明皿			
50 25	土器器	8.0 1.6 60	60廻	内面底部分部、外表面指さし後体模様。	褐色IV6/1	d-3類 灯明皿			
51 25	土器器	8.0 1.7 70	60廻	内面底部分部、外表面指さし後体模様ナデ。	明オーラー色5Y6/2	d-4類			
52 25	土器器	8.4 1.6 60	60廻	内面底部分部、外表面指さし後体模様ナデ。	明オーラー色2.5SY6/2	d-1類			
53 25	土器器	8.3 1.7 70	60廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部ナデ。	明オーラー色5Y6/2	d-2類 灯明皿			
54 25 12-2	土器器	8.5 2.0 100	60廻	ロム～内面底部模様ナデ。	褐灰色2.5SY5/2	d-2類			
55 25	土器器	(14.5) [2.7] 15	60廻	ロム～体部模様ナデ。外側の一部に保付窓。胎土継ぎ。	灰白色SY7/1	京都復模倣。			
56 25	土器器	(15.2) [2.3] 10	60廻	外表面底部分部2次窓～底部模様ナデ。	灰褐色2.5Y7/2	京都復模倣。			
57 25 12-2	土器器	9.4 2.3 99	60廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部相手ナデ。 ロム～内面底部模様ナデ。内面の一部に保付窓。	褐灰色2.5SY5/2	D-1類 灯明皿			
68 25	土器器	10.0 1.9 99	60廻	内面底部分部、外表面指さし後体～底部相手ナデ。 ロム～内面底部模様ナデ。内面の一部に保付窓。	灰黄色2.5Y6/2	D-1類 灯明皿			

地番 番号	図版	図種	口径 [cm]	高さ [cm]	保存率 [%]	出土 遺物・管	調整・特徴	主な外面の色調	備考
59 25		瓦質錐	—	5.6	1.05	60箇	内面口縁部構ナド。外面ハラツナド。寸9目(4本/cm)。	灰N4/0	
60 25 12-2		瓦質大鉢	—	12.0	1.5	60箇	方型。内面構ナドの内ハケ。下位に一列、横方向の板ナドか。 外面内凹、足部裂け付。花茎文押形。外面ハテマキをナダ。舌ナカ。	灰褐色N4/0	浅鉢VI
61 25 12-2		瓦質大鉢	(7.0)	4.0	1.05	60箇	口縁部構ナド。ほかはナダ。内面部構ハケ。	灰褐色N4/0	
65 27 12-1		土師器皿	7.3	1.3	99	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。 内面底部ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	褐色Y3R6/6	a類
66 27 12-1		土師器皿	7.5	1.5	80	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	a類
67 27 12-1		土師器皿	7.3	1.6	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰白色5.5Y7/2	a類
68 27 12-1		土師器皿	7.2	1.3	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/3	a類
69 27 12-1		土師器皿	7.4	1.0	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/3	a類
70 27 12-1		土師器皿	7.3	1.2	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/3	a類
71 27 12-1		土師器皿	7.5	1.3	95	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/4	b類
72 27 12-1		土師器皿	7.1	1.2	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	褐色Y3R7/6	b類
73 27 12-1		土師器皿	7.6	1.1	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	b類
74 27 12-1		土師器皿	(8.2)	1.4	50	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	褐黄色2.5Y7/2	b類
75 27 12-1		土師器皿	7.6	1.3	95	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/3	b類
76 27 12-1		土師器皿	7.3	1.4	99	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/3	b類
77 27 12-1		土師器皿	7.8	1.7	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	浅黄色Y3/3	b類
78 27 12-1		土師器皿	7.6	1.3	98	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	浅黄色2.5Y7/3	b類
79 27 12-1		土師器皿	7.7	1.3	95	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	b類
80 27 12-1		土師器皿	7.4	1.3	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/6	b類
81 27 12-1		土師器皿	7.6	1.6	90	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	c類
82 27 12-1		土師器皿	(8.1)	1.7	20	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	c類
83 27 12-1		土師器皿	7.7	1.6	100	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	c類
84 27 12-1		土師器皿	8.0	1.2	95	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰褐色Y3R6/3	c類
85 27 12-1		土師器皿	7.6	1.5	99	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	c類
86 27 12-1		土師器皿	7.8	1.2	70	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	浅黄色2.5Y6/2	c類
87 27 12-1		土師器皿	7.7	1.2	80	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	c類
88 27 12-1		土師器皿	(11.3)	6.6	20	20土瓶	内面底部構ナド。各面底部構押え後ナド。口縁・体部構ナド。	浅黄色2.5Y7/3	F類
89 30		土師器皿	(15.9)	2.4	1.05	14度(下顎)	外面全体ナド。口縁・体部構ナド。	灰色3Y8/1	京都灰か。
90 30		瓦質鋸面	(20.6)	6.4	1.05	14度(下顎)	體部構力ナドに。外側構力ナドのタケナ。	灰白色10YR8/2	河内D1型
91 30		瓦質鋸面	(23.7)	4.0	1.05	14度(下顎)	口縫部ナド。外縫部構ナド。三層に三面くぐる。	褐色10Y4/1	河内D2型
92 30		瓦質鋸面	(29.9)	7.5	1.05	14度(下顎)	外内外体部ナド。口縫部構ナド。	灰色3Y4/1	
94 31		土師器皿	(8.7)	1.1	9.0	68ピット	体部ナド。口縫部構ナド。	灰白色3.5Y7/2	大和型
95 31		土師器皿	(11.7)	1.6	10	252ピット	体部ナド。口縫部構ナド。底部欠損。	灰褐色10YR6/4	
96 31		瓦器輪	(11.3)	2.3	40	30土瓶	正面直面構押え。内面構ナド。口縁・内面体部上位構ナド。 内面ナド(裏見)。輪状構ナド。タテナ。成れ成れ非その色化。	浅黄色2.5Y7/3	和泉型IV
97 31		瓦器輪	(11.8)	3.0	1.05	352ピット	外体部構押えナド。口縫部構ナド。	褐色N4/0	和泉型III-30%
98 31		瓦器輪	(37.4)	6.5	1.05	50箇	内面、口縫部構ナド。外面ナド。タテナ。寸9目(5本/cm)。 内面ナド。後2mm幅のリガード。	褐色N3/0	
100 33		土師器皿	7.8	1.8	65	第4層	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰オーラー色5Y6/2	d-4類
101 33		土師器皿	8.4	1.5	70	第4層	口縁～内面体部構ナド。	灰黄色2.5Y7/2	d-2類
102 33		土師器皿	8.0	1.5	70	第4層	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰白色5Y7/2	d-1類
103 33		土師器皿	(8.0)	1.3	50	第4層	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰白色5Y7/2	e類(口縫部外反)
104 33		土師器皿	9.5	1.7	70	第4層	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰黄色2.5Y7/2	D-2類
105 33		土師器皿	(9.0)	2.2	70	第4層	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部相いナド。	にふい黄褐色10YR6/3	D-1類
106 33 13-1		土師器皿	8.0	1.7	100	第4層	口縁～内面体部構ナド。造り悪い。	灰黄色2.5Y7/2	e類
107 33		土師器皿	(15.5)	3.5	25	第4層	外面直面構押え3層体部ナド。	灰白色2.5Y5/2	京都灰微か。打明显。
108 33 13-1		瓦器輪	(11.4)	2.8	40	第4層(下顎)	口縁～内面体部構ナド。内面ナド。口縁・内面体部上位構ナド。 見込みココロニス道輪輪形。口縫部構ナド。	灰白色10YR7/1	和泉型IV-3
109 33		瓦器輪	(11.5)	2.5	40	第4層	外面直面構押え。外面ナド。口縁・内面体部上位構ナド。 見込みココロニス道輪輪形。二次成れて赤化。	淡黄色2.5Y5/4	和泉型IV-4
110 33		瓦器輪	11.0	2.5	20	第4層	内面ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰白色2.5Y7/1	和泉型IV-5
111 33		瓦器輪	10.0	2.3	35	第4層	外面直面構押え後底部～底部ナド。口縫部構ナド。	灰白色3.0Y8/1	和泉型IV-5
112 33		瓦器輪	(9.3)	2.6	30	第4層	外面直面構押え後底面ナド。口縫部構ナド。	灰白色7.5Y8/1	和泉型IV-5
113 33 13-1		瓦質鋸面	(19.0)	8.7	1.05	第4層(下顎)	體部内面構押え方向の口縫部。輪状構ナド。	暗灰色N3/1	河内D2型
114 33		瓦質鋸面	(31.0)	6.8	1.05	第4層	回転ナド。口縫部指押さ後体付着物。	灰色N6/0	東施系III-1
120 39		土師器皿	7.7	1.7	60	80箇	外面底部構ナド。口縁・体部構ナド。	灰オーラー色5Y6/2	e類
121 39 16-1		土師器皿	7.9	1.8	80	80箇	口縁～内面体部構ナド。造り大きい。	灰白色2.5Y7/1	d-3類
122 39		土師器皿	(7.5)	1.7	50	80箇	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰黄色2.5Y6/2	d-3類
123 39 16-1		土師器皿	7.0	1.7	99	80箇	外面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰オーラー色5Y6/2	d-3類
124 39 16-1		土師器皿	7.8	1.7	100	80箇	外面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰白色5Y4/1	d-4類
125 39		土師器皿	(7.5)	1.5	50	80箇	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰黄色2.5Y6/2	d-4類
126 39 16-1		土師器皿	7.8	1.8	100	80箇	外面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰オーラー色5Y6/2	d-1類
127 39 16-1		土師器皿	9.2	2.1	100	80箇	内面底部構ナド。外面指押さ後体～底部ナド。	灰黄色2.5Y7/2	D-1類

種別 番号	説明	基盤	口径 [cm]	高さ [cm]	保存率 [%]	出土 遺構・層	調査・特徴	主な外側の色調	備考
128 39 16-1	土師器皿	9.3	1.9	95	80層	内面底面ナデ、外面指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ。	淡黄色2.5Y6/2	D-1類	
129 39 16-1	土師器皿	9.3	1.9	95	80層	内面底面ナデ、外面指揮さえ後体～底部ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	D-1類	
130 39 16-1	土師器皿	10.2	2.0	100	80層	内面底面ナデ、外面指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ。	灰黄色1.0Y5/2	D-1類	
131 39	土師器皿	10.6	2.1	100	80層	内面底面ナデ、外面指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ、内面模様付。	灰黄色2.5Y6/2	E類 明陞	
132 39 16-1	土師器皿	9.9	2.4	95	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。	黄灰色2.5Y6/1	F類	
133 39	土師器皿	10.2	2.3	70	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ、内面模様付。	に近い黄褐色16YR1/3	F類 明陞	
134 39	土師器皿	(10.5)	2.5	40	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。	に近い黄色1.5Y6/3	F類、木簡「西方郡三上」に近似して出土。	
135 39 16-1	土師器皿	10.6	2.2	100	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。	褐色10YR1/1	F類	
136 39	土師器皿	(10.5)	1.9	60	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ、内面模様付。	灰黄色2.5Y6/2	F類	
137 39 16-1	土師器皿	9.3	2.1	100	80層	内面底面ナデ、外面指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ。	灰白色5Y7/1	d-1類	
138 39	土師器皿	11.0	2.3	99	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	E類	
139 39 16-1	土師器皿	14.2	2.9	90	80層	外面底面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。 口縁～内部体部模様ナデ、内面模様付。造形細い。	に近い黄褐色1.0Y5/2	京都模倣か。	
140 39	瓦器椀	10.7	2.6	75	80層	外面底面模様ナデ、外面ナデ、口縁～内部体部ナデ。 口縁部まで内面の色調(天色NA4.0)。	褐白色2.5Y8/1	和泉型IV-4d。	
141 39	瓦器椀	(12.0)	(2.5)	25	80層	外面ナデ、体部指揮さえ後体～底部ナデ。	褐色NS/0	和泉型IV-4	
142 39 2-1	陶戸焼	9.0	2.4	99	80層	回転ナデ。内輪～外輪指揮模様。底切付。	オーラーク色SY6/3		
143 39 2-1	陶戸焼	(8.0)	(3.2)	5	80層	回転ナデ。口縁指揮模様。底切付。	オーラーク色2.5Y6/3		
144 39 2-1	陶戸焼	(16.0)	(4.0)	1.5	80層	回転ナデ。口縁指揮模様。底切付。	オーラーク色SY6/3		
145 39 2-1	青磁焼	(15.0)	(3.9)	1.5	80層	回転ナデ。青磁口縁指揮模様。底切付。	オーラーク色2.5GY6/1	難波系東I-1類	
146 39 13-2	備燒焼鉢	28.0	10.7	50	80層	底部は指揮の打ち様している。底部中心に壓付。	に近い青褐色SY8/3	IV-A	
147 39 13-2	瓦質引彫	(25.0)	(7.5)	1.5	80層	体部内側面方向ハケ、口縁、脚部模様ナデ。	褐色N4/0	河内型	
148 39 14	瓦質火鉢	(35.0)	(4.0)	1.5	80層	内面横方向カマカ、外面口縁指揮模様。	褐色N4/0	浅跡V	
149 39 14	瓦質火鉢	(29.6)	(10.7)	10	80層	外面、横カマカの後、横方向の3mm幅のヘラシガキ、底面模様なし。外表面も同模様。	褐色N5/0	浅跡無足	
150 39 14	瓦質火鉢	(30.6)	(9.0)	1.5	80層	外面体部横方向3mm幅のヘラシガキ。	褐色N5/0	浅跡Ⅱか。	
151 39 14	瓦質火鉢	(6.5)	(7.5)	1.5	80層	内面底面ナデ、外周体部模様ナデ。足跡點付。	暗褐色NS/0	浅跡V	
152 39 13-2	瓦質土製品	怪5.5	4.4	80	80層	棒に舌を含んで有る。アラ。	暗褐色2.5Y7/2	新津東か土腰か。	
153 40	土師器皿	7.7	1.9	90	80層(上層)	内面底面ナデ、外周指揮さえ後体～底部ナデ。	灰オリーブSY6/2	d-1類	
154 40	土師器皿	8.2	1.9	55	80層(上層)	内面底面ナデ、外周指揮さえ後体～底部ナデ。	灰黄色2.5Y5/2	d-2類	
155 40	土師器皿	7.9	1.7	100	80層(上層)	内面底面ナデ、外周指揮さえ後体～底部ナデ。	灰オリーブSY6/2	d-1類	
156 40	土師器皿	9.9	2.2	90	80層(上層)	内面底面ナデ、外周指揮さえ後体～底部ナデ。	灰白色7T/2	D-1類	
157 40	土師器皿	(8.0)	(1.5)	20	80層(上層)	外面底面ナデ、口縁～内面指揮模様ナデ。	灰黄色2.5Y7/2		
158 40	土師器皿	8.9	1.0	100	80層(上層)	内面底面ナデ、各面底面指揮さえ後ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	b類5。	
159 40 13-2	瓦器椀	(10.9)	(2.4)	30	80層(上層)	見込みに2mm幅の青色の縦々、口縁指揮模様ナデ。ほかはナデ。	灰白色5Y7/1	和泉型IV-4	
160 40 15-1	瓦質火鉢	(15.0)	(4.2)	1.5	80層(中層)	横ナデ。跨下で保有。	灰黄色2.5Y7/1	横跡V 窓跡か。	
161 40	瓦質火鉢	(27.0)	(6.1)	1.5	80層(下層)	摩滅のため詳しき不明。ナデナ。内面に压付。	黑色N2/0	横跡E型か。	
162 40 15-1	瓦質火鉢	(28.4)	(6.0)	1.5	80層(中層)	回転ナデ。口縁指揮模様付。	褐色SY5/1	IV-A 片口	
163 40	瓦質火鉢	(31.0)	(7.6)	1.5	80層(下層)	内面横ナデ。ナリナ(4~5cm/cm)。外周指揮ハケ後ヘラズ。	褐色N4/0		
167 41 16-2	土師器皿	7.7	1.4	80	80層(最下層)	内面底面ナデ。外周指揮模様。底面指揮さえ後ナデ。	灰白色3Y7/1	e類	
168 41 16-2	土師器皿	7.6	1.5	100	80層(最下層)	内面底面ナデ。外周指揮模様。指揮さえ後ナデ。	灰オリーブSY6/2	e類	
169 41 16-2	土師器皿	7.3	1.3	95	90層(最下層)	内面底面ナデ。外周指揮模様。指揮さえ後ナデ。	灰オリーブSY6/2	e類	
170 41 16-2	土師器皿	7.6	1.0	100	90層(最下層)	外周体部上位・内部体部模様ナデ。ほかはナデ。	灰白色SY6/1	e類	
171 41 16-2	土師器皿	7.7	1.3	90	90層(最下層)	内面底面ナデ。外周指揮さえ後～底部ナデ。	灰白色SY7/1	e類(口縁部外SC)	
172 41	土師器皿	(8.4)	1.3	70	90層(最下層)	内面底面ナデ。各面指揮。指揮さえ後底部ナデ。	灰オリーブ色SY6/2		
173 41 16-2	土師器皿	10.3	2.5	100	90層(最下層)	外周指揮さえ後ナデ。外周体部上位～内面体部模様ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	E類	
174 41	土師器皿	(11.0)	(1.8)	20	90層(最下層)	外周指揮さえ後ナデ。外周体部上位～内面体部模様ナデ。	灰黄色2.5Y7/3	E類	
175 41 16-2	土師器皿	10.9	2.5	100	90層(最下層)	外周底面ナデ。外周指揮さえ後～底部ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	E類	
176 41 16-2	土師器皿	10.5	2.4	80	90層(最下層)	外周体部上位・内面体部模様ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	E類	
177 41 16-2	土師器皿	10.2	2.3	100	90層(最下層)	外周底面ナデ。外周指揮さえ後～底部ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	E類	
178 41 16-2	土師器皿	10.9	2.0	100	90層(最下層)	外周底面ナデ。外周指揮さえ後～底部ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	E類(口縁部外)	
179 41 15-2	瓦器椀	10.3	2.9	50	80層(最下層)	外周底面ナデ。外周ナデ。口縁～内面体部上位横模様ナデ。底込みに3mm幅の指揮付のヘタが付。	褐色NS/0	和泉型IV-4	

遺物番号	神図	図版	器種	長さ [cm]	幅 [cm]	厚み [cm]	埋合率 [%]	出土遺構・層	調査・特徴	主な外側の色調	備考
180 41 15-2			瓦器輪	10.3	2.8	1.0	100	80度(最下層)	背面底面押さえ、内面両ナジ、口縁へ内面部上位焼付テ。足見に2mm程の青背骨の横穴。背面底部に成形時の板が残る。	灰褐色N4/0	和泉型IV-4
181 41			瓦器輪	(10.5)	2.7	0.9	60	80度(最下層)	背面底面押さえ、内面両ナジ、口縁へ内面部上位焼付テ。	灰褐色N5/0	和泉型IV-4
182 41 Z-1			青磁碗	(5.0)	5.8	2.5	50	80度(最下層)	回転ナジ、口縁へ弧度を半片割り、全面施釉。削れ目と縫合線の痕あり。	オリーブ灰褐色10Y6/2 B-II-a型	難波系 東播系1-2
183 41			直腹器輪鉢	—	(3.4)	1.5	80度(最下層)	回転ナジ。	灰白色5Y7/1	青灰色SPB6/1	東播系B-2
184 41 15-2			直腹器輪鉢	(28.9)	(3.5)	1.5	80度(最下層)	回転ナジ、口縁部横ナジ、口縁へ内面部上位焼付。	灰褐色N5/0	和泉型IV-4	
185 41			瓦質輪鉢	(28.0)	(6.3)	1.5	80度(最下層)	内面両ナジ、口縁部横ナジ、口縁(5~6本/cm)。外面部底部押さえの痕ある。口縁部横ナジ、底部横ハケ。	灰白色5Y8/2	和泉型IV-4	
186 41			直腹器輪鉢	(14.0)	(6.0)	1.5	80度(最下層)	回転ナジ、ナジ目(4mm/cm)、内面に自然釉付着。	灰褐色10Y4/1	和泉型IV-4	
187 41 15-2			常滑燒甕	(31.2)	(12.0)	1.5	80度(最下層)	回転ナジ、口縁部、外面部自然釉付着。	灰褐色5Y7/3 5Y8/4	7型式	
267 49			瓦器輪	(4.6)	(1.0)	0.5	80度(最下層)	底部のみ、全身ナジ。	灰白色5Y8/1	和泉型IV-4	
268 49			土師器皿	(8.0)	0.9	0.3	123ピット	内面底面ナジ、口縁部自然釉付着。	灰褐色2.5Y6/2	e型	
271 50 15-3			土師器皿	10.3	2.7	0.6	50度 ^{5'層}	内面底面、外面部上位に内面焼付テ。	淡黄色2.5Y7/3	E型	
272 50			土師器皿	(11.0)	2.0	0.5	50度 ^{5'層}	内面底面、外面部焼付テ、内面底面ナジ。	灰褐色2.5Y6/2	F型	
273 50 15-3			常滑燒甕	(46.3)	(9.1)	1.5	50度 ^{5'層}	回転ナジ、ナジ目(4mm/cm)、内面に自然釉付着。	灰褐色2.5Y5/2	6b型式	
276 52			瓦器輪	(4.6)	(1.0)	0.5	155土坑	底部のみ、全身ナジ。	灰褐色N4/0	和泉型III	
277 52			土師器皿	(18.2)	(2.6)	0.9	155土坑	内面底面ナジ、口縁へ外底部ナジ。	灰褐色2.5Y6/3	櫛6	
278 52			常滑燒甕	(35.0)	(1.9)	1.5	155土坑	回転ナジ、口縁部自然釉付着。	暗褐色7.5Y3/3	6A型式	
283	2-1		青磁碗	(2.3)	—	1.5	16戸戸	施釉。	オリーブ灰2.5Y5/1	難波系	
284	2-1		白磁碗	(3.6)	—	1.5	第2層	施釉。	灰褐色3.5Y7/1	櫛5	
285	2-1		青磁碗	(5.7)	—	1.5	第2層	施釉、見込みに印花文。	オリーブ灰2.5Y6/1	和泉型IV-4	
286	2-1		白磁碗	(6.3)	—	1.5	20土坑	施釉。	灰白色5Y7/1	和泉型IV-4	

②瓦 () は復元、〔 〕は残高・長、U5は5%以下。

遺物番号	神図	図版	器種	長さ [cm]	幅 [cm]	厚み [cm]	埋合率 [%]	出土遺構・層	調査・特徴	主な外側の色調	備考
9 11 11-1			軒平瓦	(8.0)	(4.2)	1.0	10	第2層	瓦当頭部横縫、回転部方向へのタックリ。全体にナジにて仕上げる。	灰白色5Y7/1	唐草文
16 14			丸瓦	15.8	14.2	2.0	20	14環底	回転部にナジ有る。凸部に若干回転の底面残る。	灰褐色N4/0	櫛瓦
17 14 11-3			軒平瓦	(3.1)	(3.2)	1.5	14環底	瓦当頭部横縫の上面に付て隠れ跡。底部の裏側はヘラヶ切。全体にナジにて仕上げる。	暗褐色N3/0	唐草文	
93 30			丸瓦	30.9	13.2	1.00	14度(下層)	瓦当頭部横縫、瓦当部日干し残る。瓦当部に日干し跡。各端部へ向る面取。全体をナジにて仕上げる。	灰褐色3.5Y6/1	和泉草文	
115 33 13-1			軒平瓦	(5.1)	(7.3)	1.5	14度(下層)	回転部共隠れ砂、ナジにて仕上げる。	灰褐色NS/0	唐草文	
164 40 14			道具瓦	(16.8)	(12.5)	—	80度(南側)	各面部瓦、全体にナジにて仕上げる。	灰褐色NS/0	上～下層 唐草文B	
165 40 14			道具瓦	(20.7)	(7.3)	—	80度(南側)	各面部瓦、全体にナジにて仕上げる。	灰褐色NS/0	上～下層	
166 40 13-2			軒丸瓦	(6.0)	(3.2)	1.5	80度(南側)	瓦当部に隠れ砂、全体にナジにて仕上げる。	灰褐色N4/0	上～下層 四文	

③木製品 () は復元、〔 〕は残高・長、U5は5%以下。

遺物番号	神図	器種	長さ [cm]	幅 [cm]	厚み [cm]	埋合率 [%]	出土遺構・層	調査・特徴	主な外側の色調	備考
41 23		桶板	48.0	48.0	1.5	19	9度	7枚一組。木釘にてつめている。	スギ	19桶板の一組。
42 24 20-1		桶側板	[70.9]	7.0	1.0	19	9度	中央にナジ有る。背面に竹管骨を通す為の孔あり。丁度中央から左側に斜めに開けた穴がある。側面に加工窪み、上部欠損。	スギ	
43 24 20-1		桶側板	[65.6]	6.0	1.0	19	9度	下端部を火炙り灰坑に加工、側面に加工窪み。下端部に覆の痕あり。上面を火炙。	スギ	
62 25		曲物底板	[13.5]	[7.1]	0.6	60度	コ字状に加工、各面を切削。	ヒノキ		
63 25 19		加工材	(15.7)	(7.6)	1.1	60度	コ字状に加工、各面を切削。	スギ	多角形の部材の一部。	
64 25 19		加工材	8.4	4.6	1.2	60度	コ字状に加工、各面を切削。	スギ	轟縫を竹管をためる板に加工用か。	
99 31 19		下駄	[20.6]	[8.8]	2.4	50度	足先欠損、廻転欠損。	ミズキ	轟仰下駄。	
116 35 20-2										
117 35 20-2										
118 35 20-2										
119 35 20-2										
189 42		木製茶道具	13.3	1.9	0.3	80度	上端部削り、上部に孔あき、若干粒状の付着物あり。	スギ		
190 42		六付け棒	(10.1)	1.4	0.8	80度(下層)	先端部削り、上部に孔あき。	スギ		
191 42		加工材	(10.5)	2.4	1.7	80度	上端部削り、下端部尖るように加工。	ケヤキ		
192 42		棒状木製品	(49.0)	2.8	1.9	80度	上端部削り、下端部尖るように加工、摩擦。	スギ		
193 42		加工材	(20.4)	5.1	0.5	80度	下端部第一欠損、コ字状に加工していった。下端欠損。	スギ		
194 42		棒状木製品	19.7	2.2	0.9	80度	上端部に加工あり、両端部摩擦。	スギ		
195 42		棒状木製品	(17.6)	1.5	1.2	80度	上端欠損。	スギ	角材か。	
196 42		板状木製品	28.6	(5.1)	0.8	80度	中央右側位に横方向の切り込みあり。上面に貫通しない孔あり。山形に切り込みあり、下端部に刀物による切り込みが入っているが、引きちぎりしている。	スギ		
197 42		板状木製品	(26.3)	3.9	0.8	80度	丁字形に加工。長側面に木釘3箇所、打ち込まれる。	スギ	難波芯か。	
198 42		板状木製品	(33.7)	4.9	0.8	80度	上部側面削りに横状のへこみ、4箇所あり。両端部欠損。	スギ	難波芯か。	
199 42		板状木製品	28.4	4.1	1.0	80度	表面下部に斜めに入れる刀物による傷跡あり。	スギ	桶底板の凹凸材か。また板に斜めに加工。	
200 42		棒状木製品	(35.0)	2.3	1.5	80度	上部欠損。	スギ	角材か。	
201 42 19		巻き棒木	21.9	2.4	2.4	80度	楓木・木文木を木釘にてつめている。	スギ	因は木元。	
202 42 20-3		板状木製品	33.9	6.4	1.3	80度	U字形に加工。長側面に木釘3箇所、打ち込まれる。	スギ	経巻板の軸用か。主な板に軸用。	
203 42 19		円錐状木製品	7.4	7.4	2.2	80度	縦状に細かく面状の加工。中央に小孔あり。	スギ	研磨車か。	
204 42		加工材	8.7	5.7	4.3	80度	端部も文字状に加工。	スギ		
212 42 20-3		棒状木製品	66.0	2.6	2.5	80度	両端部を突起させ、突起部に貫通する小孔あり。中央に削り0.8mm、深さ1.2cmの溝が割りこまれている。	ヒノキ	俵持木。	

部品名	基材	厚さ	幅	厚さ	寸法	特徴	基材	備考
		[mm]	[mm]	[mm]				
213 43	板状木製品	(47.3)	11.7	0.9	80廣(上幅)	角を丸く加工。上側と下側の一部を欠損。	スギ	
214 44	加工材	4.7	5.1	2.7	80廣(上幅)		スギ	
215 44	繩柱	(23.9)	2.4	2.0	80廣(上幅)	丁寧な加工。全体に黒色漆。	スギ	
216 44	板状木製品	(15.8)	2.7	0.4	80廣(上幅)	中央に不規則な小孔が1箇所あり。孔には木釘が打たれている。	スギ	筋か、縦に転用。
218 44 21-2	繩板	(82.6)	9.4	1.4	80廣	中央に約2cm、高さ約5mmの穴があいており。中央に両端部をこぎやすく平加工。両端欠損。	スギ	横の一部か、縦に転用。
219 44 21-2	棒状木製品	(104.3)	7.1	2.9	80廣	中央に約2cm、高さ約5mmの穴があいており。中央に両端部をこぎやすく平加工。両端欠損。	スギ	筋か。
220 44	棒状木製品	19.5	0.8	0.4	80廣(下幅)	偏平で整然。両端が立ち、下部膨張。	スギ	
221 44	筈	(12.9)	0.6	1.0	80廣(下幅)	先端が立ち。両端部欠損。	スギ	
222 44	筈	10.2	0.5	0.4	80廣(下幅)	下部欠損。	スギ	
223 44	板状木製品	34.0	3.0	0.5	80廣(下幅)	両端部欠損。	スギ	
224 44 19	板状木製品	10.7	10.2	0.5	80廣(下幅)	中央部に切り込みがあり。一部欠損。	スギ	
225 44	加工材	4.8	(7.6)	3.0	80廣(下幅)		スギ	
226 44	板状木製品	(16.9)	5.6	0.5	80廣(下幅)	織目が丸みを帯びる。	スギ	
227 44	板状木製品	38.7	7.4	0.4	80廣(下幅)	ひざひざ大きい。上部欠損。	スギ	草履芯の一部か。
228 45	筈	(16.7)	0.6	0.6	80廣(最下幅)	下端が丸く、上部欠損。	ヒノキ	
229 45	筈	(15.7)	0.7	0.8	80廣(最下幅)	下端が丸く、上部欠損。	ヒノキ	
230 45	筈	(16.8)	0.6	0.6	80廣(最下幅)	両端部欠損。	ヒノキ	
231 45	火付け棒	31.2	1.1	1.2	80廣(最下幅)	先端が削化。	ヒノキ	
232 45	棒状木製品	26.6	1.5	1.0	80廣(最下幅)	上部に丸み加工。欠損。	スギ	織機の一部か。
233 45	板状木製品	(28.6)	(1.2)	(1.1)	80廣(最下幅)	両端部が丸く、棒状木製品をするが、本来もく少しつまら。	スギ	
234 45	板状木製品	(36.5)	3.0	2.8	80廣(最下幅)	下部に丸く、上部削化。中央に小孔あり。	スギ	
238 45	加工材	12.8	2.8	2.7	80廣(最下幅)	両端部無し。少し削り。	ヒノキ	
236 45	板状木製品	14.6	2.0	1.2	90廣(最下幅)	丁寧な加工。中央に複数の穴があり。黒色漆。一部欠損。上部に丸み加工。中央に複数の穴があり。	スギ	織機の一部か。
237 45	材	35.7	3.9	3.9	90廣(最下幅)	黒色の主張感。三塗を施す上に加工。	コナラ黒風	
238 45	棒状木製品	(16.5)	2.7	1.4	90廣(最下幅)	両端部が丸く、棒状木製品をする。	スギ	
239 45	繩札木製品	15.0	2.0	0.5	90廣(最下幅)	下端部を丸く削化。加工。繩札。	スギ	
240 45	糸巻	(8.7)	3.8	1.1	90廣(最下幅)	繩札を削る上部先端に突起あるが、欠損している。	コウヤマキ	
241 45	加工材	6.5	2.6	0.8	90廣(最下幅)	体形がぐやぐやする。	ケヤキ	
242 45	加工材	(9.2)	1.9	1.9	90廣(最下幅)	体形がぐやぐやする。	ケヤキ	
243 45	栓	4.6	3.0	2.0	90廣(最下幅)		スギ	
244 45	棒状木製品	(23.4)	1.7	1.3	90廣(最下幅)	丸く削化を削る上部先端に突起あるが、欠損している。	スギ	
245 45	火付け棒	(16.5)	0.8	0.3	90廣(最下幅)	下端部削化。上部欠損。	マツ科	
246 45	板状木製品	(11.5)	1.1	0.3	90廣(最下幅)	下端部丸く、上端部丸く加工。	ヒノキ	
247 45	板状木製品	30.6	1.8	1.0	90廣(最下幅)	下端部など、部分的に欠損。	スギ	角材か。
248 45	棒状木製品	(26.4)	2.3	0.9	90廣(最下幅)		スギ	
249 46 21-1	魚骨底板	(11.6)	5.4	0.9	90廣(最下幅)	側面部が中央に木目が打たれている。片面黒色漆を塗布する。	スギ	
250 46 21-1	曲物底板	13.3	(6.2)	0.65	90廣(最下幅)	側面部に削化を施した加工の傷跡あり。画面黒面あり。半分程度欠損。	ヒノキ	
251 46	曲物底板	(17.1)	(5.0)	0.6	90廣(最下幅)	大手の欠損。厚みが薄るので結構底。	ヒノキ	
252 46	板状木製品	25.4	3.4	0.2	90廣(最下幅)	両側の側面部欠損。	ヒノキ	折れ底か。
253 46	電線芯	(8.3)	4.7	0.3	90廣(最下幅)	裏面に斜め方向の加工痕あり。先端に小孔あり。	ヒノキ	
254 46 19	草簾	16.4	7.6	0.5	90廣(最下幅)	中央に丸に削り出された。中央側面削側に切り込みがある。	スギ	
255 46 19	下駄	22.5	10.6	4.2	90廣(最下幅)	上部削出しに丸2箇所。下駄側面に小孔2箇所あり。	スギ	運搬下駄。
256 46 19	加工材	(15.7)	5.4	2.5	90廣(最下幅)	使用する上駄の形状のみ。	スギ	轟棒の加工用か。
257 46	板状木製品	(35.3)	6.8	0.8	90廣(最下幅)	上駄側面。下端部削化加工。	スギ	建築雑材か。
258 46	板状木製品	29.7	2.8	0.8	90廣(最下幅)	表面に刀物傷あり。大手の欠損。	スギ	折れ底か。また壁に転用。
259 46 21-1	曲物底板	25.0	—	0.7	90廣(最下幅)	表面に丸に削化の刀物傷あり。裏面に付着物あり。	コウヤマキ	
260 47 19	加工材	(25.6)	4.7	1.8	90廣(最下幅)	方形状の削化が施されている。	コナラ黒風	
261 47 18-1	木葉	(20.0)	2.7	0.9	90廣(最下幅)	上端部削取り。表面に丸に削化あり。下駄欠損。	ヒノキ	「日田八小吏十九把」といふ。(手ガト)カハ六把。
262 47 18-2	木葉	7.0	1.9	0.4	90廣(最下幅)	下端部を丸く削後に加工。上駄側は切口を鋏で折り取る。	スギ	「西方源三上」。
263 47 20-3	棒状木製品	(26.1)	1.5	1.2	90廣(最下幅)	先端に丸に削り出された。両端側面に小孔2箇所あり。	スギ	粗底か。
266 47 19	梶	—	4.8	6.0	90廣(最下幅)	表面に細く削る。一握欠損。両端側面は削り出された。	スギ	梶の種。
269 49	棒状木製品	(85.3)	2.9	2.5	83士坑	丸削する小孔2箇所あり。両端部欠損。	スギ	
270 49	板状木製品	(21.3)	3.5	0.5	83士坑	両端部欠損。	スギ	
274 50	棒状木製品	(13.8)	0.9	0.7	第5 ⁵ 棒	両端部欠損。	スギ	筆か。
275 50	曲物底板	(26.0)	(8.3)	5.6	第5 ⁵ 棒	約2mm程の直線的な削み込み。大手が欠損。	ヒノキ	
279 52	荷札状木製品	14.0	2.0	0.3	150ピット	先端を尖り気味に加工。上駄側は切断。	スギ	荷札か。底か。約柄の転用か。
280 52	荷札状木製品	(12.2)	(1.2)	0.3	150ピット	先端を尖り気味に加工。上駄部欠損。	スギ	前記か。底か。約柄か。
281 52 19	加工材	11.7	12.0	3.0	150ピット	コ字状に加工。各端を切削。	スギ	轟棒の加工転用か。
282 52	加工材	4.3	2.55	2.0	157士坑		ヒノキ	
287 21-2	繩板	(99.0)	(10.6)	0.8	80廣	上端部削取り。下駄部欠損。	スギ	縦に転用。
288 21-2	繩板	(89.0)	5.4	0.6	80廣	両端部欠損。	スギ	縦に転用。
289 21-2	繩板	(81.7)	9.2	0.8	80廣	下端部削取り。上駄部欠損。	スギ	縦に転用。
290 21-2	繩板	(66.0)	7.2	0.7	80廣	両端部欠損。	スギ	縦に転用。
291 21-2	繩板	(62.2)	9.0	1.2	80廣	両端部欠損。	スギ	縦に転用。
292 21-2	繩板	(61.5)	(10.3)	1.2	80廣	両端部削取り。表面に丸に削り跡がある。	スギ	縦に転用。

④漆器類 国版の太字はカラー国版。 () は復元。 [] は最大残存高・長・斜体は残長。

遺物番号	種類	基盤	口径 [cm]	底径 [cm]	高さ [cm]	出土遺構・層	特徴	基盤	備考
47 25 2-2	漆器碗	—	8.0	[3.2]	19厘米	内外面黑色漆の地に赤色漆で丸窓に留めの文様を内外に描く。	トチノキ		
48 25 2-2	漆器碗	[12.0]	6.0	[4.0]	19厘米	外面丸窓に三の字状ワタ文様を赤色漆で描く。 外面部台裏に留めの文様が木地に剥がれています。	トチノキ		
205 43 17	漆器碗	—	—	(3.9)	80度	内外面黑色漆の地に赤色漆で丸窓に留めの文様(不明)を描く。	トチノキ		
206 43 17	漆器碗	—	—	(4.8)	80度	内外面黑色漆の地に赤色漆で文様(不明)を描く。	トチノキ		
207 43 17	漆器碗	—	—	(11.4)	80度	内外面黑色漆の地に赤色漆で文様(草文)を描く。	トチノキ	縦片	
208 43 17	漆器碗	—	(8.0)	(0.8)	80度	内外面黑色漆の地に赤色漆で文様(草文)を描く。	トチノキ		
209 43 17	漆器碗	(9.2)	1.3	(7.0)	90度	内外面黑色漆の地に赤色漆で文様(不明)を描く。	トチノキ		
210 43 17	漆器碗	—	(8.2)	(6.4)	90度(最下幅)	内外面黑色漆、高台部分は木地露出。 内外面黑色漆、高台部分は木地露出。	トチノキ		
211 43 17	漆器碗	—	(9.0)	(3.3)	80度	内外面黑色漆、高台部分は木地露出。 外面部見込みに赤色漆で墨文様を描く。	トチノキ		
217 44 17	漆器碗	—	(5.5)	(2.8)	80度	内外面黑色漆の地に赤色漆で文様(草文)を描く。	コナラ並風	縦片	
264 47	漆器	—	—	[4.2]	80度(最下幅)	内外面黑色漆の地に赤色漆で文様(不明)を描く。	ケヤキ		
265 47 17	漆器碗	—	6.7	[3.7]	80度(最下幅)	内外面黑色漆、見込みに墨文様を描く。 内面部見込み、外面部見込みに赤色漆を描く。見込みに付着物あり。	ケヤキ		

⑤金属器・石器・鉱滓類 () は最大残存長。

遺物番号	種類	基盤	長さ [cm]	幅 [cm]	厚み [mm]	出土遺構・層	特徴	基盤	備考
1 9	鍔錐	7.7	1.2	0.15	7.7	発見品			
29 18 11-4	埋管	5.4	0.8	0.1	16.8	戸			
30 18 11-4	軸瓦	(2.6)	3.0	0.1	16.8	戸	中空、2箇所小孔有。		
188 41	砾石	6.8	3.9	1.2	80度(最下幅)				
293 22-2	軸津	4.4	—	—	33.5	ツット			
294 22-2	軸津	4.6	—	—	—	第2層			
295 22-2	軸津	3.2	—	—	—	第2層			
296 22-2	軸津	7.7	—	—	—	第3層			
297 22-2	軸津	5.4	—	—	—	150ツット			
299 22-2	軸津	9.5	—	—	—	80度(最下幅)			
300 22-2	軸津	4.8	—	—	—	33ツット			
		6.9	—	—	—	第5層			

⑥柱材

遺物番号	種類	神社	国版	出土遺構・層	基盤	遺物番号	種類	神社	国版	出土遺構・層	基盤
70 柱穴	第4周	—	—	—	2.8	114	杭	48	第3層	—	ハンノキ
89 柱穴	第4-2周	—	—	—	2.8	115	杭	49	第3層	—	スギ
96 柱穴	第4-2周	—	—	—	2.8	119	杭	48	第3層	—	スギ
99 柱穴	第4-2周	—	—	—	2.8	132	杭	49	第3層	—	スギ
102 柱穴	第4-2周	—	—	—	2.8	133	杭	48	22-1	第3層	スギ
103 柱穴	第4-2周	—	—	—	2.8	134	杭	49	22-1	第3層	スギ
105 柱穴	第4-2周	—	—	—	2.8	135	杭	48	第5層	—	ケヤキ
106 柱穴	22-1	—	—	—	2.8	148	杭	48	第5層	—	ケヤキ

觀察表における分類は以下の著作によった。

森島健雄ほか「瓦器碗」、立石堅志「奈良火鉢」、森田稔「中世須恵器」、中野晴久「常滑・渥美」、木戸雅寿「信楽」以上中世土器研究会編1995 「概説中世の土器・陶磁器」真桑社に所収

菅原正明1988「畿内における土塼の製作と流通」「文化財論叢」奈良文化財研究所創立30周年記念叢書集刊行会

重根弘和「中世の備前焼」2005備前歴史フォーラム資料集「備前焼研究最前線」Ⅱ～備前焼、その歴史、今まで何がわかつて、何がわからないのか～備前市歴史民族資料館・備前市教育委員会

上田秀雄1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁器研究」No.2 日本貿易陶磁器研究会

遺物出土遺構 一覽

遺物出土遺構一覧(1)

〔破片数〕

種類	器種	0層 擾乱	1層	2層	14底地 [3面]	15溝 [3面]	16井戸 [3面]	17溝 [3面]	3層	14溝 (上層) [4面]	14溝 (下層) [4面]	14溝 (最下層) [5面]	19埋植 [4面]	
瓦質土器 (中世)	瓦器碗・皿	2	6	23	2	4		1	40		1			
	羽釜	5	3	39	3	9	2		29		12			3
	甕		2	4	2				5		2	6		
	火鉢	5	2	13		5			5					
	鉢	4		7	1	4			2		1	2		
	擂鉢	2	7	11	2	10	1		6		7			
	三二釜													
	三二羽釜				1									
	三二擂鉢			1										
	不明			3	2	6			2		2			
土師質土器 (中世)	土師器皿	21	24	78	11	97	7	2	241	2	7		20	
	羽釜	2	6	8		6		3	10					
	鉢		1			1								
	土壇			1										
	甕			1							2			
	擂鉢													
	土錐													
	不明	1		8		1			6		1			
	日本製陶磁器 (中世)	備前焼甕・壺	4	8	5		5	2		1		1		
	備前焼擂鉢	1	2	2	1	1								
中国製陶磁器 (中世)	常滑焼甕・壺	2	32	3	3	3	3	12		3	1	1		
	常滑焼鉢		2											
	信楽焼甕・壺										1			
	東播系甕・壺										3			
	東播系線鉢	4		4				1	9		1			
	須恵器不明										1			
	湘戸・美濃	1	3											
	不明陶器													
	不明													
	青磁碗		3	1	1	2		2						
瓦 (中世)	白磁碗・皿		1											
	白磁壺													
	青花皿		1											
	丸瓦	3	9	23	10	4	3	1	6		4			
	平瓦	2	5	50	7	7	5	2	17		14	7		
	軒平瓦			1	1									
	軒丸瓦													
	道具瓦					1								
	不明			1										
その他 (古代以前)	須恵器甕	1		2			1		2					
	須恵器壺								1					
	須恵器杯舟	1		2										
	須恵器杯蓋													
	須恵器楌	1												
	須恵器高杯													
	須恵器不明			1										
近世	土師器把手			1										
	土師器高杯													
	唐津碗・皿	1	4	1			1							
	青磁染付						1							
	白磁													
	堺焼鉢	1												
	信楽焼鉢	1	1	1										
その他	染付	1												
	不明陶磁器		6											
	飴津類			3					3					
	磁石													

遺物出土遺構一覧(2)

〔破片数〕

種類	器種	20土坑 【4面】	22土坑 【4面】	25ピット 【4面】	30土坑 【4面】	33ピット 【4面】	35ピット 【4面】	37ピット 【4面】	50溝 【4面】	52土坑 【4面】	60溝 【4面】	61ピット 【4面】	64ピット 【4面】
瓦質土器 (中世)	瓦器碗・皿				3		1		1		7		1
	羽釜								1		5		
	甕								2		1		
	火鉢										2		
	鉢										1		
	擂鉢								3		1		
	三二釜										1		
	三二羽釜												
	三二擂鉢												
	不明												
土師質土器 (中世)	土師器皿	227	3	1					8	2	108	2	2
	羽釜	1											
	鉢												
	土塊												
	甕												
	擂鉢												
	土鍋												
	不明											1	
日本製陶磁器 (中世)	備前燒甕・壺										2		1
	備前燒擂鉢											1	
	常滑燒甕・壺	1							6	3	1	3	
	常滑燒鉢												
	信楽燒甕・壺												
	東播系甕・壺								2		1		
	東播系鉢												
	須恵器不明												
	瀬戸・美濃												
	不明陶器												
	不明										1		
中國製陶磁器 (中世)	青磁碗												
	白磁碗・皿												
	白磁壺	1											
	青花皿												
瓦 (中世)	丸瓦								1		1		
	平瓦	1									1		
	軒平瓦												
	軒丸瓦												
	道具瓦										1		
	不明												
その他 (古代以前)	須恵器甕												
	須恵器壺												
	須恵器杯身												
	須恵器杯蓋												
	須恵器桙												
	須恵器高杯												
	須恵器不明												
	土師器把手												
	土師器高杯												
近世	唐津焼・皿												
	青磁染付												
	白磁												
	博羅鉢												
	信楽擂鉢												
	染付												
	不明陶磁器												
その他	航津類						2						
	磁石												

遺物出土遺構一覧(3)

〔破片数〕

種類	器種	68ピット [4面]	70ピット [4面]	4層	87土坑 [4-2面]	94ピット [4-2面]	4-2層	80溝 [5面]	80溝 〔上層〕 [5面]	80溝 〔中層〕 [5面]	80溝 〔下層〕 [5面]	80溝 〔最下層〕 [5面]	80溝 〔縦〕 [5面]
瓦質土器 (中世)	瓦器碗・皿	1		20	1			17	3	2	11	20	
	羽釜			11	2			9	1	1	6	4	
	甕			2				2		2	1		
	火鉢			1				9	1	1	2		
	鉢			5				4					
	攘鉢			1				3			4	1	
	ミニ甕												
	ミニ羽釜												
	ミニ攘鉢												
	不明			2				2					
土師質土器 (中世)	土師器皿	7		111	7			193	40	6	45	165	3
	羽釜			4				1		3		7	
	鉢							2					
	土壇			4				2			1		
	甕							2				1	
	攘鉢							2					
	土錐							1					
	不明			3				1	2				
日本製陶磁器 (中世)	備前焼甕・壺			5				3		1	2		
	備前焼攘鉢							4	1			1	
	常滑焼甕・壺			4				12	1	8		12	
	常滑焼鉢												
	信楽焼甕・壺												
	東播系甕・壺			2				1		1	1	3	
	須恵器不明			1									
	瀬戸・美濃							2	1				
	不明陶器												
	不明												
	青磁碗							2				1	
	白磁碗・皿												
瓦 (中世)	白磁壺												
	丸瓦	5	3					6		2	3		
	平瓦	8	9		1	6	8			2	2		
	軒平瓦			1									
	軒丸瓦							1					
その他 (古代以前)	道具瓦	1	1					1	3				
	不明							3					
	須恵器甕			1				1		1	1		
	須恵器壺												
	須恵器杯身			1						2	2		
近世	須恵器杯蓋												
	須恵器高杯			1									
	須恵器高杯								1		1		
	須恵器不明								1				
	土師器把手												
	土師器高杯												
	唐津焼・皿												
その他	青磁染付												
	白磁			1									
	堺焼鉢												
	信楽焼鉢												
	染付												
	不明陶磁器												
その他	鈴洋殻											1	
	硯石									1	1		

遺物出土遺構一覧(4)

〔破片数〕

種類	器種	B3土坑 【5面】	I23ピット 【5面】	I49ピット 【5面】	5'層	I50ピット 【5-2面】	I55土坑 【5-2面】	I57土坑 【5-2面】	06-2 包含層
瓦質土器 (中世)	瓦器碗・皿	1			10	2	2		6
	羽釜				1			1	18
	甕								2
	火鉢								1
	鉢								
	擂鉢							4	
	三二釜								
	三二羽釜								
	三二擂鉢								
	不明					1			
土師質土器 (中世)	土師器皿		2		44		3	40	
	羽釜								
	鉢								
	土塊								
	甕								
	擂鉢								
	土鍋								
	不明	1			1			1	
日本製陶磁器 (中世)	備前燒甕・壺								
	備前燒擂鉢								
	常滑燒甕・壺				4		3		
	常滑燒鉢								
	信楽燒甕・壺								
	東播系甕・壺								
	東播系鉢								
	須恵器不明								
	瀬戸・美濃								
	不明陶器								
	不明								
中國製陶磁器 (中世)	青磁碗								
	白磁碗・皿								
	白磁甕								
	青花皿								
	瓦				2				
瓦 (中世)	丸瓦								
	平瓦							1	
	軒平瓦								
	軒丸瓦								
	道具瓦								
	不明								
その他 (古代以前)	須恵器甕				1				
	須恵器壺						1		
	須恵器杯身								
	須恵器杯蓋								
	須恵器板								
	須恵器高杯								
	須恵器不明				1				
	土師器把手								
	土師器高杯				1				
	唐津焼・皿								
近世	青磁染付								
	白磁							1	
	博羅鉢								
	信楽擂鉢								
	染付							1	
	不明陶磁器								
	磁石								
その他	磁津焼				1	1			1
	磁石								

写 真 図 版

図版1 06-1-1調査区 第1面(上) 第2面(下)



1. 第1面全景(西から)



2. 第2面全景(東から)

図版2 06-1-1 調査区 第3面



1. 第3面全景（東から）



2. 第3面全景（西から）

図版3 06-1-1調査区 第4面



1. 第4面全景（東から）



2. 第4面全景（西から）

図版4 06-1-1 調査区 第4面



1. 20土坑遺物出土状況（北から）



2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（南西から）

図版5 06-1-1 調査区 第4面



1. 60溝竹製導水管と土師器Ⅲ54出土状況（北から）



2. 60溝竹製導水管出検出状況（東から）



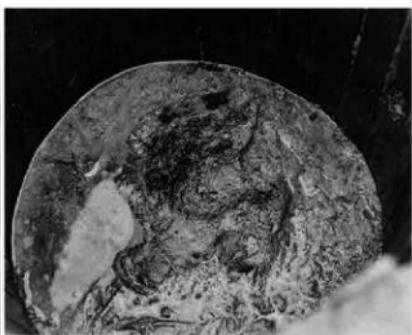
3. 19埋桶検出状況



4. 19埋桶漆器碗出土状況



5. 19埋桶取水口部



6. 19埋桶籠出土状況

図版6 06-1-1 調査区 第4面



1. 19埋桶半裁状況と60溝より延びる竹製導水管（北から）

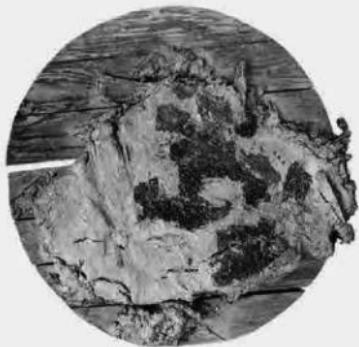


2. 19埋桶側板とタガ（北から）

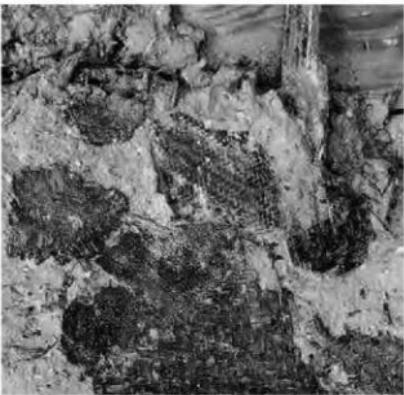


3. 19埋桶底板除去後（北から）

図版7 06-1-1 調査区 第4面



1. 19埋桶出土籠（クリーニング後）



2. 19埋桶出土籠網目（部分写真）



3. 19埋桶上部の籠除去後、遺物出土状況



4. 19埋桶底板



5. 第4-2面全景（南西から）



6. 87土坑、108ピット（北から）

図版8 06-1-1調査区 第5面



1. 第5面全景（西から）



2. 第5面全景（東から）

図版9 06-1-1調査区 第5面



1. 80溝〔櫛〕(左:南から 右上:部分 右下:東から)



2. 80溝断面(東から)



3. 第5-2面全景(南東から)

図版10 06-1-1調査区 第5面(上・中)、06-1-2調査区(下)



1. 118柱穴(北から)



2. 125柱穴(北から)



3. 133柱穴(北から)



4. 134柱穴(南から)



5. 135柱穴(南から)



6. 148柱穴(南から)

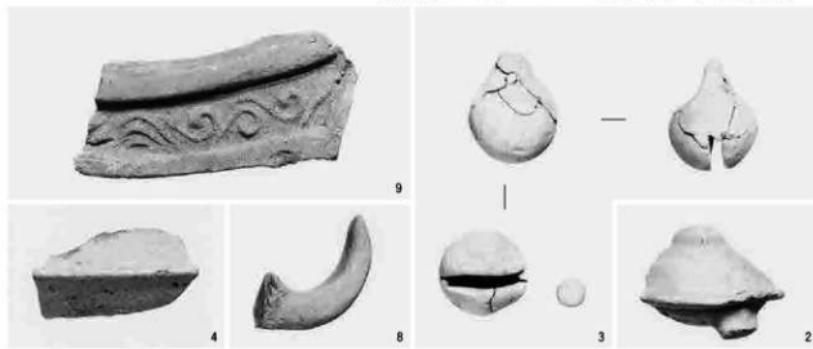


7. 06-1-2調査区全景(西から)



8. 172土坑(西から)

図版11 06-1-1 調査区 出土遺物 1



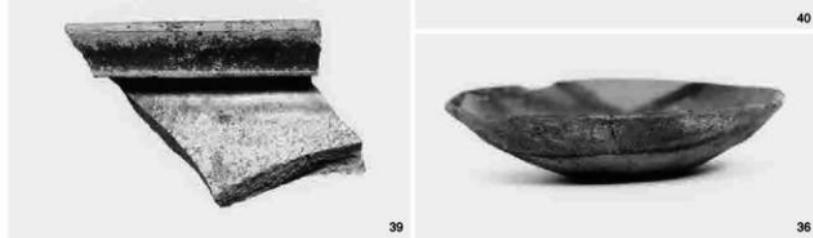
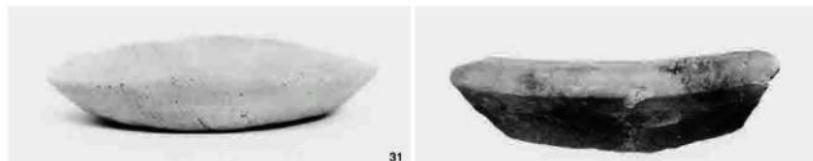
1. 第2層出土遺物



2. 14窓地（第3面）出土遺物 3. 15溝（第3面）出土遺物



4. 16井戸（第3面）出土遺物

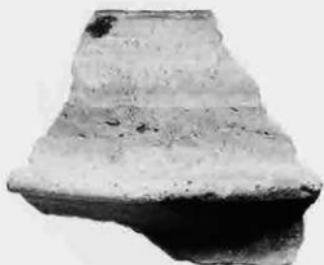


5. 第3層出土遺物

図版12 06-1-1 調査区 出土遺物 2



1. 20土坑（第4面）出土土師器皿



46



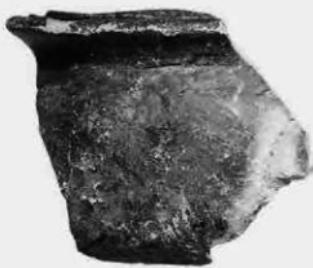
60



57



54



61

2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（第4面）出土遺物

図版13 06-1-1 調査区 出土遺物 3



115



113



106



108

1. 第4層出土遺物



142



159



147



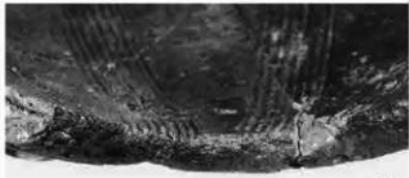
166



152



146



146 (底部)

2. 80溝(第5面)出土遺物 1

図版14 06-1-1 調査区 出土遺物 4



165



164



149



151



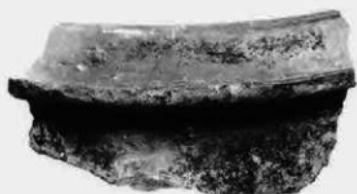
150



148

80溝（第5面）出土遺物 2

図版15 06-1-1 調査区 出土遺物 5



160



162

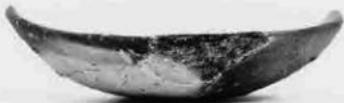
1. 80溝〈中層〉(第5面)出土遺物



180



184



179



187

2. 80溝〈最下層〉(第5面)出土遺物



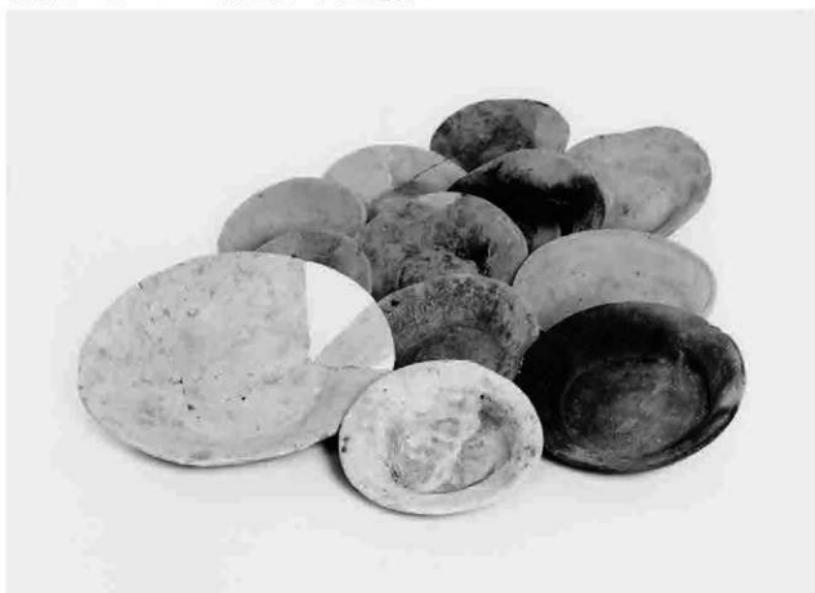
273



271

3. 第5'層出土遺物

図版16 06-1-1 調査区 出土遺物 6



1. 80溝（第5面）出土土師器皿



2. 80溝〈最下層〉（第5面）出土土師器皿

図版17 06-1-1 調査区 出土遺物 7



217



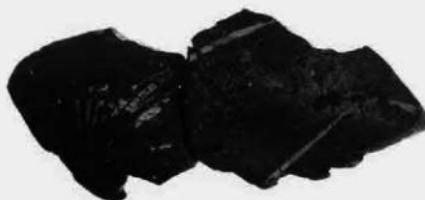
211



209



207



206



208



265



210

80溝（第5面）出土漆器



1. 80溝〈最下層〉(第5面)出土木簡

「□田八郎小麦十九把又ハ □ (亨力) カラ六把」



2. 80溝〈下層〉(第5面)出土木簡

「西芳源三上」

図版19 06-1-1 調査区 出土遺物 9



63



64



281



256



201



203



266



224



260



99



255



254

50溝（第4面）・60溝（第4面）・80溝（第5面）・150ピット（第5-2面）出土木製品

図版20 06-1-1 調査区 出土遺物10



42



43



116

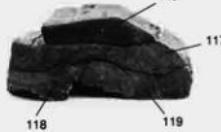


117



119

118



1. 19埋桶〔防水施設〕(第4面)側板

2. 87土坑(第4-2面)礎板



212



263



202

3. 80溝〔最下層〕(第5面)出土木製品

図版21 06-1-1 調査区 出土遺物11



250



249



259

1. 80溝〔最下層〕(第5面)出土木製品



219



287



288



289



218



290



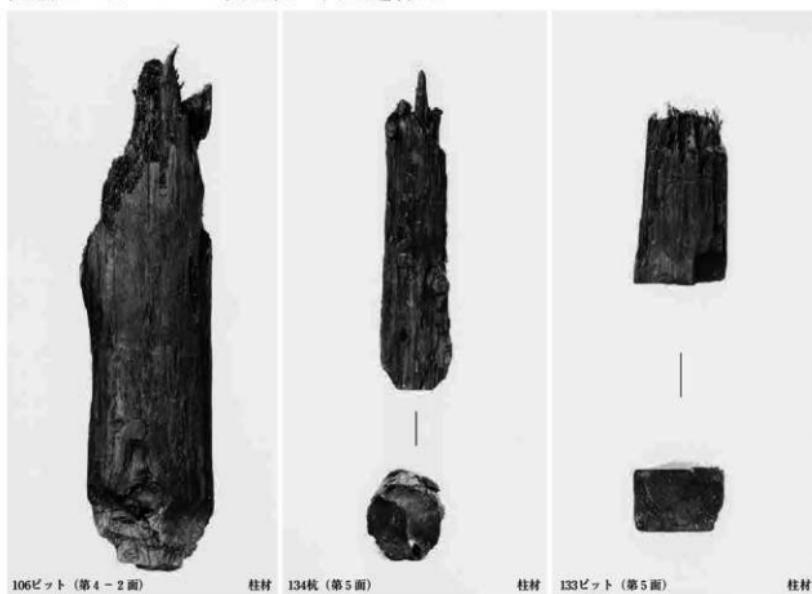
291



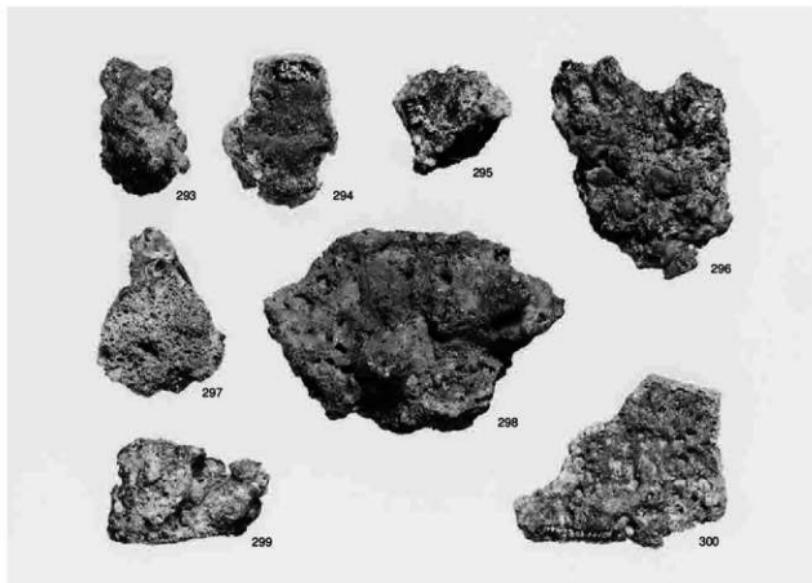
292

2. 80溝〔柵〕板列(第5面)構成木製品

図版22 06-1-1 調査区 出土遺物12



1. 柱根・杭



2. 出土鉱滓

報 告 書 抄 錄

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第161集

花屋敷遺跡 I

河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2007年3月30日

編集・発行／財團法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号